

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（195）

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書（1）

やまのくち 山ノ口 遺跡

（錦江町馬場）

山ノ口遺跡

二〇一八年三月



2018年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

卷頭図版 1 山ノ口遺跡出土主要遺物集合写真







①



②



③

①C地点出土遺物 ②錦江町所蔵（D地点出土主体）土器 ③錦江町所蔵（D地点出土主体）軽石製品

序 文

この報告書は、文化庁の補助金を受け実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち、本県で「河口コレクション整理活用事業」と呼称する事業に伴い、平成28年度～29年度に整理作業を行った肝属郡錦江町馬場に所在する山ノ口遺跡の発掘調査の記録です。

故河口貞徳氏は、昭和20年代から鹿児島県内の学術的な調査を行い、長年に渡り鹿児島県考古学会会長や鹿児島県文化財保護審議委員として、本県の文化財の保護に尽力されました。

河口氏が発掘・収集された資料は、御遺族の厚意により、鹿児島県立埋蔵文化財センターへ一括寄贈されたところです。このうち、学史的に著名で、全国に知られている遺跡・遺物については、早急に整理して全国に発信し、活用を図る必要があります。そのため、当センターでは寄贈された資料の整理を計画的に進めながら、学術的な再評価を行っています。

今回報告する山ノ口遺跡では、昭和33年～36年に河口氏が主体となって、発掘調査が実施されました。南九州の弥生時代中期を代表する標式遺跡であるとともに、環状の配石遺構の周囲に岩偶などの軽石製品や孔が開けられた多数の土器などが出土した祭祀遺跡として学史的にも著名です。

本報告書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に調査に当たり御協力いただいた錦江町教育委員会、鹿児島県歴史資料センター黎明館及び関係各機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成30年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 堂込秀人

報 告 書 抄 錄



山ノ口遺跡位置図 (1:50,000)

例　言

- 1 本書は、鹿児島県が文化庁の補助を受け、平成28・29年度に実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち、本県で「河口コレクション整理活用事業」と呼称する事業に伴う山ノ口遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 山ノ口遺跡は鹿児島県肝属郡錦江町馬場に所在する。
- 3 報告書作成（整理作業）は、鹿児島県教育委員会が調査主体者となり、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は河口真徳氏が発掘責任者となり、昭和33年12月25日～昭和34年1月4日（第1次調査）、昭和35年4月5日～7日（第2次調査）、昭和36年5月5日～7日（第3次調査）に実施し、整理・報告書作成作業は平成26～28年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 6 新たな遺物注記は行っていない。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 9 本書で使用した方位は原図のまま国化した。磁北と思われる。
- 10 遺構図等の作成及びトレースは今村結記が整理作業員の協力を得て行った。
- 11 出土遺物の実測・トレースは、今村が作業員の協力を得て行った。遺物の実測の一部は、株式会社九州文化財研究所に委託した。
- 12 出土遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 13 本書の編集は今村が担当した。執筆の分担は次のとおりである。

第Ⅰ章	……………	今村
第Ⅱ章 第1節	……………	今村
第2節1	……………	前追亮一
第2節2	……………	大久保浩二
第Ⅲ～V章	……………	今村
- 14 附編として、以下の報告を再録した。再録に当たっては、立正大学より本報告書への掲載の許可を頂いた。

河口貞徳 1960 「山ノ口遺跡」『鹿児島県文化財報告書』第7集 鹿児島県教育委員会

河口貞徳 1962 「山ノ口遺跡」『立正考古』第21号 立正大学考古学研究会
- 15 本書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用を図る予定である。なお、出土遺物の一部は鹿児島県歴史資料センター黎明館、錦江町教育委員会にも所蔵されている。

凡 例

1 観察表の表記凡例は次のとおりである。

(1) 土器の「法量」において、括弧内に記載している数値は復元径の値、石器・石製品の「法量」において括弧内に記載している数値は残存長の値である。

(2) 「胎土」における記号の表現は次のとおりである。

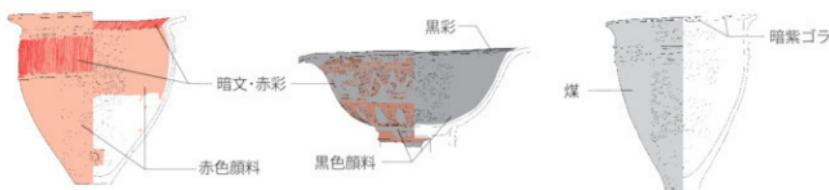
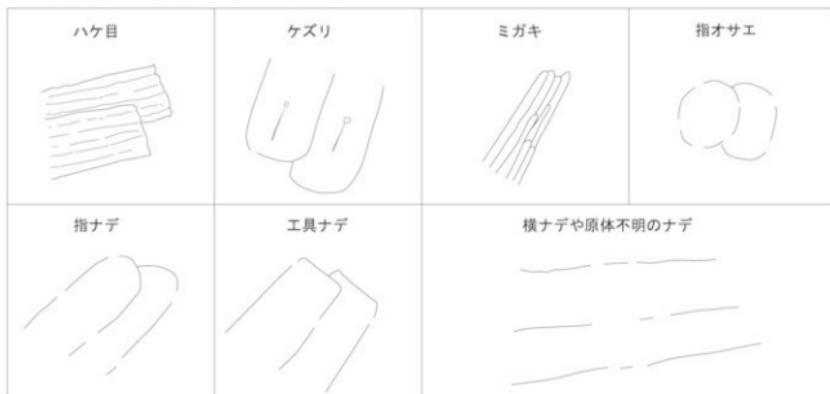
□…微量含む △…少量含む

○…含む ○…多量含む

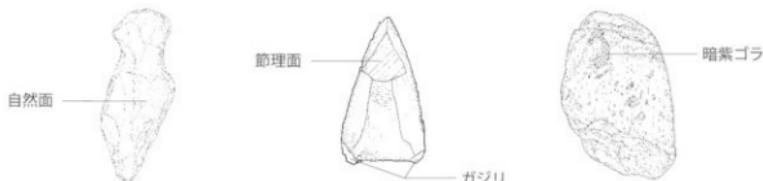
(3) 「河口郡保管場所」は第3図で示した場所と対応する。

2 使用した土色は「新版標準土色帖」に基づく。

3 本書で用いた土器の表現は次のとおりである。



4 本書で用いた石器の表現は次のとおりである。



目 次

卷頭図版	
序文	
報告書抄録	
例言・凡例	
第Ⅰ章 事業の経緯と経過	
第1節 事業の経緯と事業内容	1
第2節 整理・報告書作成業務	2
第3節 再整理の方法及び報告書の構成	2
第Ⅱ章 河口貞徳コレクションの概要	
第1節 河口貞徳氏の業績	3
第2節 寄贈されたコレクションの概要	6
第Ⅲ章 山ノ口遺跡の再検討	
第1節 遺跡の現状	13
第2節 現場図面の追加資料	13
第3節 遺物の追加資料及び再実測	21
第Ⅳ章 山ノ口遺跡の再評価	
第1節 山ノ口遺跡に関する研究史	61
第2節 山ノ口式土器に関する研究史	62
第3節 山ノ口遺跡の現代的評価	63
第Ⅴ章 総括	
第1節 出土遺物の検討	65
第2節 遺跡の性格の検討	67
附編 旧報告の再録	
1 「鹿児島県文化財報告書」第7集	69
2 「立正考古」第21号	97
写真図版	103

挿図目次

山ノ口遺跡位置図 (1 : 50,000)	
第1図 河口邸収蔵品収納状況写真	6
第2図 河口邸収蔵品収納状況・搬出状況等写真	7
第3図 河口邸収蔵品収納状況図	8
第4図 河口コレクション整理・収納状況写真①	10
第5図 河口コレクション整理・収納状況写真②	11
第6図 河口コレクション整理・収納状況写真③	12
第7図 山ノ口遺跡の現況	13
第8図 山ノ口遺跡年度別調査地点位置図	14
第9図 B地点遺構配置図及び遺物出土状況図①	15
第10図 B地点遺構配置図及び遺物出土状況図②	16
第11図 C地点遺構配置図及び遺物出土状況図	17
第12図 C地点軽石製品出土状況メモ	18
第13図 C地点軽石製品出土状況写真	18
第14図 A地点とC地点の間で検出された軽石集積位置図メモ	18
第15図 D地点遺構配置図及び遺物出土状況図①	19
第16図 D地点遺構配置図及び遺物出土状況図②	20
第17図 B地点出土土器実測図①	22
第18図 B地点出土土器実測図②	23
第19図 B地点出土土器実測図③	24
第20図 B地点出土土器実測図④	25
第21図 B地点出土土器実測図⑤	26
第22図 B地点出土石器・石製品実測図①	27
第23図 B地点出土石器・石製品実測図②	28
第24図 B地点出土石器・石製品実測図③	29
第25図 B地点出土石器・石製品実測図④	30
第26図 C地点出土土器実測図①	32
第27図 C地点出土土器実測図②	33
第28図 C地点出土土器実測図③及び石器・石製品実測	

図①	34
第29図 C地点出土石器・石製品実測図②	35
第30図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図①	37
第31図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図②	38
第32図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図③	39
第33図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図①	40
第34図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図②	41
第35図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図③	42
第36図 A地点下層出土土器実測図	44
第37図 A地点上層出土土器実測図①	45
第38図 A地点上層出土土器実測図②	46
第39図 A地点上層出土土器実測図③	47
第40図 A地点上層出土土器実測図④	48
第41図 A地点上層出土石器・石製品実測図①	49
第42図 A地点上層出土石器・石製品実測図②	50
第43図 A地点上層出土石器・石製品実測図③	51
第44図 その他地点及び出土地不明遺物実測図①	52
第45図 その他地点及び出土地不明遺物実測図②	53
第46図 その他地点及び出土地不明遺物実測図③	54
第47図 南部九州の弥生時代中期土器様式の動態（中園 2004を再トレース）	64
第48図 新・旧遺物実測図の比較	64
第49図 山ノ口遺跡出土土器変遷図	66
第50図 土器の埋没過程想定図	68
第51図 弥生時代中期後葉の土器群の諸要素	68

図版目次

卷頭図版 1	山ノ口遺跡出土主要遺物集合写真
卷頭図版 2	B地点出土遺物集合写真
卷頭図版 3	C地点・D地点（錦江町所蔵）遺物集合写真
図版 1	山ノ口遺跡調査地点遠景
図版 2	B地点調査状況①
図版 3	B地点調査状況②
図版 4	B地点遺物出土状況①
図版 5	B地点遺物出土状況②
図版 6	C地点環状配石検出状況①
図版 7	C地点環状配石検出状況②
図版 8	C地点遺物出土状況
図版 9	D地点環状配石検出状況及び遺物出土状況
図版10	昭和36年砂鉄採掘地遺構検出状況・遺物出土状況及び調査状況
図版11	山ノ口遺跡出土遺物①
図版12	山ノ口遺跡出土遺物②
図版13	山ノ口遺跡出土遺物③
図版14	山ノ口遺跡出土遺物④
図版15	山ノ口遺跡出土遺物⑤
図版16	山ノ口遺跡出土遺物⑥
図版17	山ノ口遺跡出土遺物⑦
図版18	山ノ口遺跡出土遺物⑧
図版19	山ノ口遺跡出土遺物⑨
図版20	山ノ口遺跡出土遺物⑩
図版21	山ノ口遺跡出土遺物⑪
図版22	山ノ口遺跡出土遺物⑫
図版23	山ノ口遺跡出土遺物⑬
図版24	山ノ口遺跡出土遺物⑭

表目次

第1表	平成24年度～29年度における「河口コレクション」整理作業状況
	1
第2表	河口貞徳氏発掘調査歴一覧表①
	3
第3表	河口貞徳氏発掘調査歴一覧表②
	4
第4表	河口貞徳氏発掘調査歴一覧表③
	5
第5表	山ノ口遺跡出土土器観察表①
	55
第6表	山ノ口遺跡出土土器観察表②
	56
第7表	山ノ口遺跡出土土器観察表③
	57
第8表	山ノ口遺跡出土土器観察表④
	58
第9表	山ノ口遺跡出土石器・石製品計測表①
	59
第10表	山ノ口遺跡出土石器・石製品計測表②
	60
第11表	山ノ口遺跡上層出土土器を標式とする土器型式の名称と時期比定
	64

第Ⅰ章 事業の経緯と経過

第1節 事業の経緯と事業内容

故河口貞徳氏は、昭和46年～平成23年まで長年にわたり鹿児島県考古学会会長として、本県考古学の発展に寄与するとともに、昭和28年～平成7年まで鹿児島県文化財保護審議委員として、本県文化財の保護に尽力した人物である。河口氏は、昭和20年代から県内の学術的な発掘調査を行っており、同氏所有の遺物等の資料(以下、「河口コレクション」とする)を、鹿児島県立埋蔵文化財センター(以下、「埋文センター」とする)が遺族から寄附受納することになった。

埋文センターに寄贈されることが決定された後の、作業内容等は、第1表に示すとおりである。まず、平成24年度～26年度にかけて、緊急雇用創出事業臨時特例基金事業を活用し、河口コレクションとして寄贈された資料の受け入れ、収蔵された資料の整理や基礎データの作成、展示・公開や今回報告する山ノ口遺跡等重要遺物の整理作業などを一部実施した。

平成27年度は、国庫補助事業の「県内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」に伴い、河口コレクションの台帳整理や関連文献の収集のほか、「かごしま遺跡

フォーラム2015」を実施し、河口コレクションの一部成果をパネル展示了。平成28年度から、国庫補助事業の「県内遺跡事前調査等事業」の中で、「河口コレクション整理作業事業」と称して実施し、台帳等基礎整理作業に加え、総合的な整理・報告がなされていない重要遺跡について順次、将来的に保存・活用を図るため、今日的視点での整理を行っている。

今回、報告する山ノ口遺跡は、肝属郡錦江町馬場に所在する。昭和33年5月頃、砂鉄の採掘がきっかけで、遺跡が発見された。遺跡滅失の恐れがあったため、河口氏らにより、昭和33年12月～昭和34年1月に第1次調査、昭和35年4月に第2次調査、昭和36年5月に第3次調査が実施された。山ノ口遺跡は、弥生時代の円形の配石遺構が検出されたほか、完形の弥生土器や軽石製品、磨製石器等が多数出土した祭祀遺跡として知られる。また、弥生時代の南九州の土器型式である「山ノ口式土器」の標式遺跡としても著名である。平成27年には、埋文センター及び鹿児島県歴史資料センター黎明館、錦江町教育委員会に所蔵されている山ノ口遺跡出土遺物146点が県指定文化財に指定されている。

第1表 平成24年度～29年度における「河口コレクション」整理作業状況

種別	作業内容等	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	備考	
寄贈資料の受入作業	内容の確認と分類及び埋文センターへの搬入							終了(H24年12月寄贈。その後、数回に分けて搬入作業実施)	
寄贈資料	内容ごとの収録・保管								
考古 (調査) 資料	遺物	水洗						脆弱な遺物が若干残る	
	注記・接合・復元								
	実測図作成								
	写真撮影								
	図面類	発掘調査記録(現場図面等)の点検・修復							基礎作業終了
		発掘調査日誌類(調査の基礎情報)の整理							
	写真	クリーニング・修復							
		遺跡ごとのファイリング							
		公開用写真のデータベース化							
		フィルム写真的デジタル化							
書籍	分類・選別								
	河口文庫(重要書籍)設置							図書室に「河口文庫」コーナー設置	
	考古関係論文(抜刷)資料の整理								
	地形図類	分類・修復・リスト作成							寄贈地形図類の整理はほぼ終了
	発掘調査報告(原稿)作成							平成29年度から報告書刊行	
公開活用	展示公開(図文の森企画展・外部への貸出等)							講演会・シンポ等の開催も含む	
	重要遺物のレプリカ作成							重要遺物の保護	
事業 実施方等	緊急雇用:埋蔵文化財活用整理等事業								
	緊急雇用:重要遺物等選択・公開事業								
	緊急雇用:重要遺跡調査整理事業								
	国庫補助県内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業								
	国庫補助県内遺跡事前調査等事業								

第2節 整理・報告書作成業務

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は主に平成28年4月～平成30年2月にかけて埋文センターで行った。寄贈された遺物と既報告分の遺物の照合作業や遺物の再実測・トレース、未報告の現場図面のトレース、レイアウト等の編集作業を行った。

整理・報告書作成業務に関する調査体制は以下のとおりである。

平成28年度調査体制（整理作業）

事業主体 鹿児島県

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 福山 德治

調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長 兼 調査課長 前迫 亮一

総務課長 高田 浩

調査課 第二調査係長 今村 敏照

調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財研究員（9月まで） 今村 結記

文化財主事（10月から） 今村 結記

事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

主事 丸野 将輝

調査指導 鹿児島県考古学会

副会長 池畠 耕一

鹿児島大学

名譽教授 上村 俊雄

鹿児島県考古学会

会員 出口 浩

鹿児島県考古学会

会員 本田 道輝

文化庁文化財部記念物課

文化財調査官 水ノ江和同

平成29年度調査体制（整理・報告書作成作業）

事業主体 鹿児島県

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 堂込 秀人

調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長 兼 調査課長 大久保浩二

総務課長 高田 浩

調査課 第二調査係長 宗岡 克英

調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 今村 結記

事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

主事 丸野 将輝

調査指導 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

特任助教 寒川 朋枝

鹿児島国際大学

教授 中國 聰

鹿児島県考古学会

会員 長野 真一

鹿児島県考古学会

会員 長 本田 道輝

文化庁文化財部記念物課

文化財調査官 水ノ江和同

報告書作成指導委員会

平成29年11月28日

報告書作成検討委員会

大久保次長ほか6名

平成30年1月5日

堂込所長ほか 6名

第3節 再整理の方法及び報告書の構成

第Ⅱ章以下、本報告書で山ノ口遺跡について再報告する方法について説明する。

第Ⅱ章では、「河口貞徳コレクションの概要」として、河口貞徳氏の業績や寄贈の経緯、寄贈されたコレクションの概要について述べる。

第Ⅲ章では、「山ノ口遺跡の再検討」として、山ノ口遺跡の現状や未報告の現場図面等の掲載、未報告の遺物の掲載、既報告の遺物の再実測の掲載やこれらとの説明を行う。なお、山ノ口遺跡出土遺物の抽出にあたっては、注記や遺物カード（荷札）の確認のほか、既報告の遺物実測図や掲載写真との照合、現場図面や現場写真との整合等を行った。遺物の実測・再実測は、河口コレクションだけではなく、鹿児島県歴史資料センター黎明館及び錦江町教育委員会所蔵の山ノ口遺跡出土品も対象とした。

第Ⅳ章では、「山ノ口遺跡の再評価」として、山ノ口遺跡の性格に関する研究史や山ノ口式土器に関する研究史についてまとめ、山ノ口遺跡の現代的評価について述べていきたい。

第V章で、「総括」として、第Ⅲ章・第Ⅳ章の成果をもとに、改めて山ノ口遺跡について検討を行う。

図版では、未報告の現場写真のほか、再撮影した遺物写真等を掲載している。

なお、山ノ口遺跡の主たる報告は、「鹿児島県文化財報告書」第7集、「古代学」第9巻第3号、「立正考古」第21号でなされている。このうち、「鹿児島県文化財報告書」第7集と「古代学」第9巻第3号の内容はほぼ同一であるため、今回附録として「鹿児島県文化財報告書」第7集と「立正考古」第21号で報告された内容を再録した（以下、「旧報告」とする）。再録に当たっては、立正大学より掲載の許可を頂いた。

第Ⅱ章 河口貞徳コレクションの概要

第1節 河口貞徳氏の業績

故河口貞徳氏は、本県のみならず、わが国の考古学の基礎を築いてきた先駆として、全国的にも著名な考古学者である。以下、河口氏の経歴や業績などの略譜や発掘調査歴について触れたい。

1 河口貞徳氏の略譜

1909（明治42）年	鹿児島市で誕生
1933（昭和8）年	鹿児島県第一師範学校専攻科卒業
1942（昭和17）年	立正大学専門部歴史地理科卒業
1948（昭和23）年	公立高等学校教諭 （～1967年）
1949（昭和24）年	寺師見国・三友国五郎氏等と鹿児島県考古学会創立

1952（昭和27）年

1953（昭和28）年

1961（昭和36）年

1966（昭和41）年

1970（昭和45）年

1971（昭和46）年

1979（昭和54）年

2011（平成23）年

日本考古学協会員

鹿児島県文化財専門委員

（～1972年）

鹿児島大学非常勤講師

（～1985年）

南日本文化賞（南日本新聞社）

文化財功労者（文化庁）

鹿児島県考古学会会長

（～2011年）

歎五等雙光旭日賞

101歳で逝去

2 発掘調査歴

管見の限り、確認できた範囲の河口氏の発掘調査歴を第2表に示す。

第2表 河口貞徳氏発掘調査歴一覧表①

調査年	調査月	遺跡名 (調査・報告時の名称)	所在地	備考
1949（昭和24）年	9・11月 12月	笹貫道路 千束道路	鹿児島市上福元町笹貫湯貫迫 南大隅町根占川北千束	寺師見国・三友国五郎氏との調査
	1月	大野道路	南さつま市金峰町大野南原	坪井清足・寺師見国・三友国五郎氏との調査、現「南原A道路」
	4・5月	中津野道路	南さつま市金峰町中津野	
1950（昭和25）年	6月	祓川地下式横穴墓	鹿児島市西祓川町井ノ上	
	7月	一の宮道路	鹿児島市都元一丁目一之宮神社境内	現「一之宮道路（A地点）」
	12月	市来貝塚	いちき串木野市川上中組	現「川上（市來）貝塚」
	12月	千束道路	南大隅町根占川北千束	三友国五郎氏との調査
	12月	岩崎道路	錦江町田代麓曾原神社北	
1951（昭和26）年	4月	県立大道路	鹿児島市都元一丁目鹿大構内	現「鹿大構内道路（郡元团地道路等）」
	6・8月	若宮道路	鹿児島市池之上町若宮神社境内	現「大龍道路群（若宮）」
	7月	草野貝塚	鹿児島市下福元町草野賀呂	
1952（昭和27）年	3月	前平道路	鹿児島市吉野町雀宮前平	
	4月	木ヶ暮道路	鹿児島市西別府町木ヶ暮	
	5・9月	春日町道路	鹿児島市春日町	現「大龍道路群（春日）」
	5月	黒川洞穴	日置市吹上町坊野黒川	
	6月	東昌寺道路	鹿児島市直木町宮田岡	
	8月	本城道路	西之表市榕城松島	三友国五郎・国分直一氏との調査
	8月	一滝道路	屋久島町一滝松山	三友国五郎・国分直一氏との調査、現「一滝松山道路」
	12月	大原道路	鹿児島市本名町大原柔黄木迫	
1953（昭和28）年	5月	牧道路	鹿児島市宮之浦町半札谷の牧	現「牧古墓」
	7月	石坂上道路	南九州州市知览町水里石坂ノ上	
	8月	城ノ平道路	屋久島町口良部島城ノ平	三友国五郎・国分直一氏との調査
	8月	大原道路	鹿児島市本名町大原柔黄木迫	
	11月	春日町道路	鹿児島市春日町5番通	現「大龍道路群（春日）」
	12月	出水貝塚	出水市中央町尾崎	村田重幸氏との調査
1954（昭和29）年	5月	宇宿貝塚	奄美市笠利町宇宿字大道	
	5月	兼久貝塚	伊仙面面鏡裏久バル	現「面鏡第三貝塚（兼久貝塚）」
	5月	畦布道路	和泊町畦布字伊延原	現「畦布ナーベンタ道路」
	7月	出水貝塚	出水市中央町尾崎	山内清男・村田重幸氏らとの調査
	12月	永野道路	南九州市知観町東別府水野弥六・永野白石原	

第3表 河口貞徳氏発掘調査歴一覧表(2)

調査年	調査月	遺跡名 (調査・報告時の名称)	所在地	備考
1955(昭和30)年	7月	宇宿貝塚	奄美市笠利町字宿大道	国分直一・曾野壽彦・野口義磨氏らとの調査(九学会連合奄美大島共同調査委員会)
	8月	和田前遺跡	南九州市知覧町永里和田前	
1956(昭和31)年	5月	折尾遺跡	南九州市領山村上別府折尾	
	7月	下郡遺跡	南九州市知覧町郡射手園	現「射手園遺跡」
	8月	面繩第二貝塚・第四貝塚	伊仙町面繩秉久・バル	国分直一・野口義磨・原口正三氏らとの調査(九学会連合奄美大島共同調査委員会)
	8月	喜念貝塚	伊仙町面繩秉久	国分直一・野口義磨・原口正三氏らとの調査(九学会連合奄美大島共同調査委員会)
	11月	南洲神社遺跡	鹿児島市上竜尾町南洲神社境内	
1957(昭和32)年	3-12月	大渡遺跡	指宿市十二町大渡	国分直一・河野治雄・重久十郎氏らとの調査
	5月	成川遺跡	指宿市山川成川曲道	河野治雄・重久十郎氏らとの調査
	8月	住吉貝塚	知名町住吉字秉久	九学会連合奄美大島共同調査委員会
	12月	大平遺跡	宮崎県串間市大平	
1958(昭和33)年	7月	成川遺跡	指宿市山川成川曲道	青藤忠・八幡一郎・金闇丈夫・杉原莊介・国分直一・乙益重蔵氏らとの調査(文化財保護委員会)
	9月	竈相地下式横穴調査	大崎町神領	現「神領地下式横穴1号(竈相地下式横穴)」
	12月	山ノ口遺跡	錦江町馬場山ノ口	
1959(昭和34)年	4月	南丹波遺跡	指宿市南丹波小平礼原他	国分直一氏らとの調査
	8月	口輪野遺跡	霧島市国分川原口輪野	
	8月	城元遺跡	肝属郡大根古町	現「神之浜遺跡」
1960(昭和35)年	1月	鍋谷遺跡	姶良市平松字小瀬戸	現「鍋谷洞窟」
	4月	山ノ口遺跡	錦江町馬場山ノ口	
	8月	本場遺跡	涌水町栗野馬場追	現「馬場追遺跡」
	12月	前田地下式横穴	肝付町前田上ノ原	現「上ノ原地下式横穴群」
1961(昭和36)年	1月	手手下遺跡	いちき串木野手手下	
	3月	市来貝塚	いちき串木野市川上中組	現「川上(市来)貝塚」
	5月	山ノ口遺跡	錦江町馬場山ノ口	
	8月	浜坂貝塚	十島村宝島浜坂	三友国五郎氏との調査
1962(昭和37)年	2月	指江古墳	長島町指江	池水寛治氏との調査
	3月	麦ノ浦貝塚	薩摩川内市南陽町本川	
	8月	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	
	8月	境遺跡	垂水市牛根境小学校	
1963(昭和38)年	7月	鹿大崩風中遺跡	鹿児島市元一丁目鹿大構内	現「鹿大構内遺跡(郡元構地道路群)」
	7月	入佐遺跡	曾於市末吉町源訪入佐	
	8月	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	
	8月	片野洞穴	志布志市志布志町内之倉字片野	
1964(昭和39)年	8月	検見崎古墳	肝付町後田	現「検見崎遺跡」か?
	11月	黒川洞穴	日置市吹上町野黒川	八幡一郎・江坂輝弥氏らとの調査
	12月	横岡古墳	薩摩川内市上川内町横岡	
	8月	黒川洞穴	日置市吹上町野黒川	
1965(昭和40)年	8月	薩摩国府跡	薩摩川内市御陵下町・国分寺町	鹿児島県教育委員会の調査
	3月	轟貝塚	椎本郡宇土市宮庄町字須崎・居屋敷・池田	江坂輝弥氏らとの調査
	7月	錦峯窓跡	薩摩川内市宇都宮町錦峯	小田富士雄氏らとの調査
	8月	鳥ノ峯遺跡	中種子町珊瑚中之町・鳥の峯	盛岡尚孝・永井昌文氏らとの調査
1966(昭和41)年	8月	石峰遺跡	霧島市溝辺町蟹石峰	
	3月	山ノ上遺跡	志布志市志布志町帖	
	7月	黒川洞穴	日置市吹上町野黒川	
	8月	片野洞穴	志布志市志布志町内之倉字片野	志布志町教育委員会の調査
1967(昭和42)年	8月	薩摩国府跡	薩摩川内市御陵下町・国分寺町	鹿児島県教育委員会の調査
	3月	天子ヶ丘古墳	大崎町神領	現「神領古墳6号 天子ヶ丘古墳」
	3月	北手牧遺跡	南九州市領山村北手牧	河野治雄氏らとの調査
	8月	華熱里遺跡	日置市吹上町花熱里	

第4表 河口貞徳氏発掘調査歴一覧表③

調査年	調査月	遺跡名 (調査・報告時の名称)	所在地	備考
1968(昭和43)年	8月	薩摩国分寺跡	薩摩川内市国分寺町大都・下台	鹿児島県教育委員会の調査
	10月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	
	11月	木浦遺跡	枕崎市西鹿砦	
1969(昭和44)年	1月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	
	3月	別府原古墳	さつま町永野	
	6月	御灰塚	南大隅町根占川南	根占町教育委員会の調査
	7月	入来遺跡	日置市吹上町入来	
	7月	薩摩国分寺跡	薩摩川内市国分寺町大都・下台	鹿児島県教育委員会の調査
	8月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	
1970(昭和45)年	12月	朝仁貝塚	奄美市名瀬市朝仁字前間	現「朝仁前間遺跡」
	1月	入来遺跡	日置市吹上町入来	
	6月	北方地下式横穴	涌水町北方小屋敷	
	7月	空港予定地遺跡	霧島市溝辺町鹿児島空港内	鹿児島県教育委員会の調査、現「十三塚原第一・二地点」
	8月	薩摩国分寺跡	薩摩川内市国分寺町大都・下台	鹿児島県教育委員会の調査
	11月	鷹塚地下式横穴	大崎町吉永	大崎町教育委員会の調査
1971(昭和46)年	12月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	加世田市教育委員会の調査
	1月	堂前古墳	出水市高尾野町紫引堂前	高尾野町教育委員会の調査
	6・8月	平裕貝塚	霧島市国分上井	
	9月	小瀬戸遺跡	姶良市西瀬戸町瀬戸	鹿児島県教育委員会の調査
	11月	小山遺跡	鹿児島市宮之浦町字小山	鹿児島県教育委員会の調査
	12月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	加世田市教育委員会の調査
1972(昭和47)年	1月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	加世田市教育委員会の調査
	3月	上能野貝塚	西之表市吉上能野	西之表市教育委員会の調査
	5月	上小原古墳群	鹿屋市串良町上小原	
	7月	玉利池遺跡	鹿児島市上荒町田	鹿児島県史跡調査会の調査
	8月	千束遺跡	南大隅町根占北千束	現「鹿大撫内遺跡〔郡元团地道路群〕」
	9月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	弥生系高地性集落総合研究発掘調査
1973(昭和48)年	8月	永山古墳群	涌水町西永山	加世田市教育委員会の調査
	10月	大原・宮衛遺跡	薩摩川内市下郷町手打	下郷村教育委員会の調査
	11月	嘉慈遺跡	瀬戸内町嘉慈	瀬戸内町教育委員会の調査
	12月	入来遺跡	日置市吹上町入来	東南アジアより見えた日本古代墓制研究
	1月	上原地下式横穴	鹿屋市串良町上原	鹿児島県教育委員会の調査
	3月	下小路遺跡	南さつま市金峰町高橋下小路	現「上原小原古墳群 1号地下式横穴墓」
1975(昭和50)年	4月	石峰遺跡	霧島市溝辺町麗石峰	鹿児島県教育委員会の調査
	8月	横平遺跡	薩摩川内市五ヶ町横平	
	10月	石峰遺跡	霧島市溝辺町麗石峰	鹿児島県教育委員会の調査
	12月	白寿遺跡	日置市吹上町中之里	
	3月	入来遺跡	日置市吹上町入来	
	3月	上小原地下式横穴	鹿屋市串良町上原	
1976(昭和51)年	6月	下小路遺跡	南さつま市金峰町高橋下小路	
	11月	石峰遺跡	霧島市溝辺町麗石峰	鹿児島県教育委員会の調査
	3月	石峰遺跡	霧島市溝辺町麗石峰	鹿児島県教育委員会の調査
	8月	サウチ遺跡	奄美市笠利町喜瀬字サウチ	笠利町教育委員会の調査
	2・6・7月	中岳洞穴	曾於市末吉町南之郷市林	末吉町教育委員会の調査
	8月	宇宙宿塚	奄美市笠利町宇宙字大道	笠利町教育委員会の調査
1977(昭和52)年	11月	白寿遺跡	日置市吹上町中之里	
	3月	中岳洞穴	曾於市末吉町南之郷市林	末吉町教育委員会の調査
	8月	石峰遺跡	霧島市溝辺町麗石峰	
	10月	東黒土田遺跡	志布志市志布志町内之倉	瀬戸町望氏との調査
	2月	謙石橋遺跡	志布志市志布志町帖字前畠	鹿児島県考古学会の調査
	3月	草野貝塚	鹿児島市下福元町草野賀呂	鹿児島市教育委員会の調査
1978(昭和53)年	10月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
	9月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	知名町教育委員会の調査
	10月	越城路	霧島市福山町福山大廻	財団法人福山美術館の調査
	11月	白寿遺跡	日置市吹上町中之里	
	12月	東黒土田遺跡	志布志市志布志町内之倉	
	2月	謙石橋遺跡	志布志市志布志町帖字前畠	
1979(昭和54)年	3月	中岳洞穴	曾於市末吉町南之郷市林	
	8月	石峰遺跡	霧島市溝辺町麗石峰	
	1月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
	2月	謙石橋遺跡	志布志市志布志町帖字前畠	
	3月	草野貝塚	鹿児島市下福元町草野賀呂	
	10月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
1980(昭和55)年	9月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	知名町教育委員会の調査
	12月	東黒土田遺跡	志布志市志布志町内之倉	瀬戸町望氏との調査
	2月	謙石橋遺跡	志布志市志布志町帖字前畠	鹿児島県考古学会の調査
	3月	草野貝塚	鹿児島市下福元町草野賀呂	鹿児島市教育委員会の調査
	10月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
	8月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
1981(昭和56)年	9月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	知名町教育委員会の調査
	10月	越城路	霧島市福山町福山大廻	財団法人福山美術館の調査
	11月	白寿遺跡	日置市吹上町中之里	
	12月	東黒土田遺跡	志布志市志布志町内之倉	
	2月	謙石橋遺跡	志布志市志布志町帖字前畠	
	3月	草野貝塚	鹿児島市下福元町草野賀呂	
1982(昭和57)年	10月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
	9月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
	10月	越城路	霧島市福山町福山大廻	
	11月	白寿遺跡	日置市吹上町中之里	
	12月	東黒土田遺跡	志布志市志布志町内之倉	
	2月	謙石橋遺跡	志布志市志布志町帖字前畠	
1983(昭和58)年	3月	草野貝塚	鹿児島市下福元町草野賀呂	鹿児島市教育委員会の調査
	10月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
	8月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
	9月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
	10月	越城路	霧島市福山町福山大廻	
	11月	白寿遺跡	日置市吹上町中之里	
1984(昭和59)年	12月	東黒土田遺跡	志布志市志布志町内之倉	
	2月	謙石橋遺跡	志布志市志布志町帖字前畠	
	3月	草野貝塚	鹿児島市下福元町草野賀呂	
	10月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
	8月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
	9月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	

第2節 河口貞徳コレクションの概要

1 寄贈の経緯（第1・2図）

鹿児島県のみならず、日本の考古学研究に寄与すること計り知れないと評価された河口コレクションは、ご遺族の多大な御厚意・御配慮により、埋文センターへ寄贈されることとなった。ここでは、寄贈に至るまでの流れを簡潔に記すこととする。

- 平成23年1月10日 河口貞徳氏ご逝去。
- 平成23年3月 考古関係の収蔵資料について、ご遺族から県への一括寄贈の意思を確認。
- 平成23年9～12月 河口邸において、書籍類を中心とした収蔵資料の仮リスト作成作業を実施。
- 平成24年1～2月 河口邸において、遺物を中心とした実地調査・内容把握作業の実施。
- 平成24年3月12～14日 第1次搬出作業： 完形土器約60点、特殊遺物（金属製品等）、一般遺物収納コンテナ約250箱等について、美術専用車等（4t トラック3台分）を利用して、埋文センターへ運搬。
- 平成24年5月23～25日 第2次搬出作業： 完形土器約180点、特殊遺物（金属製品等）、一般遺物収蔵コンテナ約100箱、図面・地図等ボール約50箱等について、美術専用車等（4t トラック2台・公用車等）を利用して、埋文センターへ運搬。
- 平成24年6月 第3次搬出作業： 書籍や書棚類を4t トラック1台で運搬。
- 平成24年7～11月 寄贈品リストの詳細作成。
- 平成24年12月 寄贈（寄付受納）の決定。

寄贈申出者：《故河口貞徳氏のご遺族5名》袖山和子（長女）・菊池節子（次女）・河口徳男（長男）・河口彬（次男）・信國敏子（三女）

- 平成24年12月21日 感謝状贈呈式（於：上野原織文の森多目的ホール）において六反省一県教育長（当時）から袖山和子・菊池節子・河口彬の3氏に直

接贈呈。

河口徳男・信國敏子の2名については送付贈呈。

○平成24年12月22日～平成25年3月31日 上野原織文の森第35回企画展「古代人の華麗な技」の中で寄贈された代表資料を展示公開。

2 寄贈品リスト作成について

寄贈品のリストを作成するにあたり、収蔵品が置かれていた原位置をなるべく記録することに努めた。保管・収蔵位置を示すため、第3図のような凡例を設定した。

収蔵品はおおむね敷地内に建てられた「収蔵庫」（A棟）と「主屋」（B棟）の2か所に分散して保管されていた。遺物の主たる収蔵・保管場所は「収蔵庫」で、書籍類は「収蔵庫」の2階と主屋であった。

「収蔵庫」の2階の北側が「書庫・書斎」（A21）、南側が「土器完形品他重要資料置場」（A22）、1階が「一般収蔵庫」（A1）として利用されていた。

なお、それぞれの場所・位置を記号化したが、大分類した6か所（①～⑥）の記号例については、それぞれの配置図下に示したとおりである。



収蔵庫2階（書庫・書斎）にあった机 A2118



主屋の空き部屋を利用した書庫（B1）



収蔵庫1階重要遺物棚（A101）

第1図 河口邸収蔵品収納状況写真



収蔵庫 2階の土器完形品類収蔵状況《A21》



収蔵庫 1階の遺物収納用コンテナ類収蔵状況《A11他》



収蔵庫 1階の遺物収納用木箱類収蔵状況《A103他》



河口邸の外観 (中央樹木の奥がA棟・収蔵庫、右がB棟)



搬出作業の様子：土器完形品の準備《A棟：収蔵庫》



搬出作業の様子：大壺の梱包《B棟：主屋縁側》

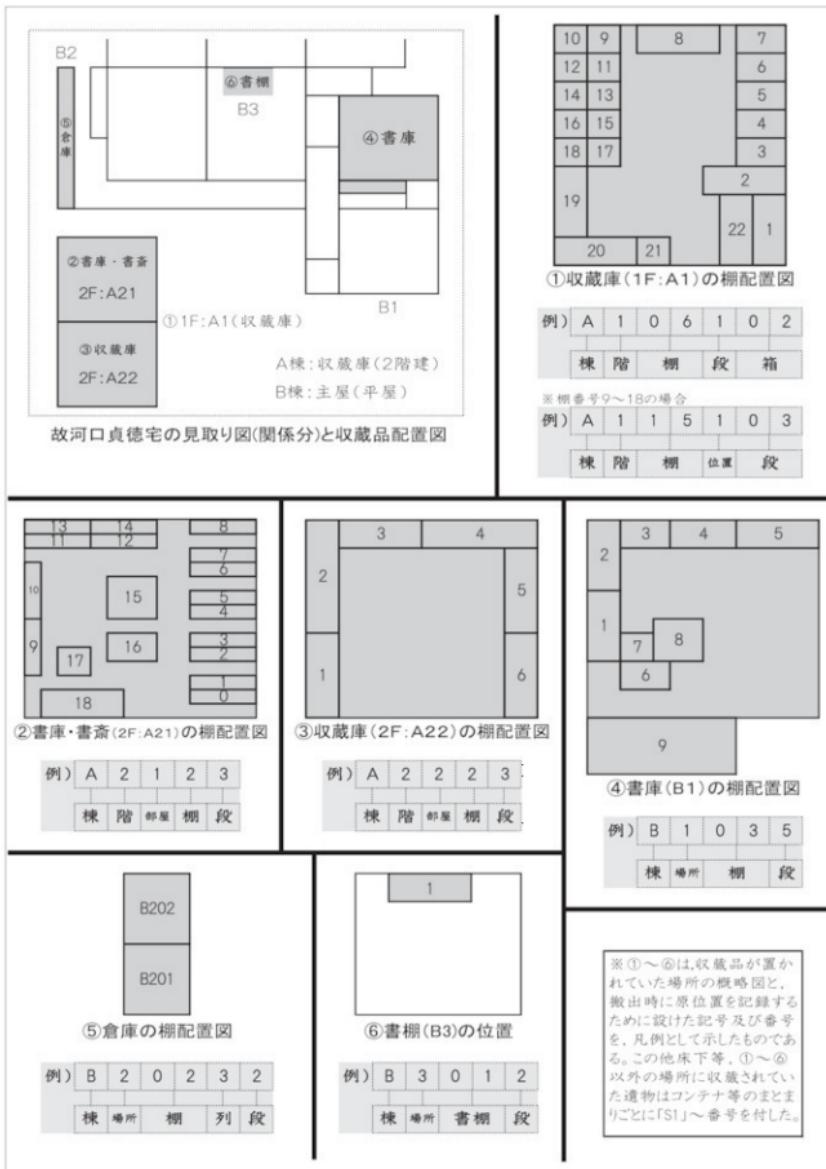


感謝状贈呈式の様子 (上野原綱文の森 多目的ホール)
平成24年12月21日



企画展「古代人の革新的な技」で寄贈品を観覧されるご遺族他
《上野原綱文の森 企画展示室》

第2図 河口邸収蔵品収納状況・搬出状況等写真



第3図 河口邸収蔵品収納状況図

2 寄贈されたコレクションと整理の概要

寄贈された膨大な資料については、考古遺物・書籍類・地図類・写真類のそれぞれの整理方法にしたがって基礎的な再整理・再分類を行い、リストや台帳を作成した。

河口邸からの搬入時に作成されたリストには、それぞれの資料が河口邸のどの部屋にあったのか、どの棚の何段目にあったのかという位置情報まで記録されており、その情報は再整理で作成したリストや台帳にも記載している。

その他、先生が書かれた注記やメモの類いはすべて保管もしくは転記し、情報が損なわれることがないよう最大限の注意を払った。

保管にあたっては埋文センターの一般収蔵庫二階の一角を仕切り、「河口コレクション保管室」として施錠・管理できるスペースを設けたほか、図書室、特別収蔵庫、写真保管庫、一般収蔵庫などで保管している。

(1) 寄贈された資料の内容（寄付採納上の数量）

① 考古資料

コンテナ	872箱
完形土器	250点

② 書籍類

報告書	2,711冊
雑誌	2,736冊
単行本	721冊
その他（図録、年報、郷土誌等）	1,902冊
合計8,070冊	

③ 地形図類

明治以降の地形図等（国土地理院、地理調査所発行）735枚

④ 写真類

カラースライド	386ケース
カラーネガ	21本
モノクロネガ	663本
ガラス乾板	22セット
ベタ・プリント類	118セット

⑤ その他

河口邸から一括して搬入した資料の中には、上記の他に、発掘調査時に記録された実測図面、使用された野帳やメモ類、調査日誌、日々の研究を記録された研究ノート、日記、大学の講義で使用された講義録等の貴重な資料も含まれている。

また、昭和20年代からの多数の新聞切り抜き、投稿された原稿類、考古学関係者と交わされた書簡や抜き刷り、パンフレット等もある。

(2) 整理の概要（第4～6図）

① 考古遺物の整理

河口先生宅に保管されていた考古資料は、遺跡名等の表記のある木箱やコンテナ、段ボール箱、菓子箱等に詰

められていた。埋文センターに搬入後はひとつひとつ丁寧に開梱し、洗浄や清掃をしつつ、先生が仕分けされたまとまりごとに台帳を作成し、パンケースに整理した。寄贈時にはコンテナ872箱であったが、再整理・再分類等をすすめた結果、パンケース換算で1,122箱となった。山口遺跡（8箱）、黒川洞穴（76箱）、入来遺跡（118箱）、上加世田遺跡（185箱）、高橋貝塚（119箱）などである。また、遺跡ごとに作成した台帳ファイルは327冊にのぼる。

台帳には先生が箱やビニール袋に注記されていた遺跡名や地名等の情報はそのまま転記し、情報を失うことのないように最大限留意した。また使用されていた菓子箱等も河口先生の研究の姿を垣間見る記録として一部保管している。

完形土器については個別に番号を付けて1点ずつ撮影し、台帳を作成して河口コレクション保管室に保管している。

② 書籍類の整理

寄贈された書籍類にはすべて「河口文庫」の判を押し、ジャンルごとに分類してリストを作製した。

8,070冊のうち、特に貴重な書籍や学会誌等のバックナンバーを約2,000冊抽出し、「河口文庫①」と名付けて埋文センター図書室の蔵書管理システム（バーコード管理）に登録した。書架についても河口先生の書斎にあった移動式書架の寄贈を受け、図書室に移設して「河口文庫①」を納めている。

それ以外の約6,000冊の書籍は「河口文庫②」としてリストを作成し、リスト順に並べ替えて221箱の収納箱に納めた。収納箱にはその箱に収めている書籍リストを前面に貼り付け、閲覧や検索也可能である。一般収蔵庫二階に保管している。

③ 地図・地形図類の整理

寄贈された資料には、地図類も含まれており、総数は約1,000枚である。すべてに「河口文庫」の判を押し、製作された発行元と年代順にリストを作成した。古くは1903年発行の地図から含まれている。発行元は「大日本帝国陸地測量部」「内務省地理調査所」「国土地理院」などがある。17箱に分けて一般収蔵庫二階に保管している。

④ 写真類の整理

写真類にはボジやネガのほか、ガラス乾板、プリント類、報告書に使用した写真原稿などがある。

ボジやネガの類いはカビが発生しているものもあり、フィルムクリーナーを用いてクリーニングを行った。その後、カラースライドについては遺跡名を付けて新規のファイルに収納し、モノクロネガはベタ焼きを作成、合わせてファイルに収納した。台帳を作成し、順次デジタル化も進めているところである。

プリント類には裏面に遺跡名やメモがあるものが多

く、それが見えるような形でファイルに収納した。

ガラス乾板には手札版や4×5版のサイズのものがあり、状態があまりよくないものもあったので取扱いや保存方法を専門業者に問い合わせ、損傷の無いよう十分に配慮して作業を行った。まず水洗し、十分に乾燥させた後、ベタ焼きを作成した。その後、薄紙に包んで一枚一枚をガラス乾板専用のケースに収め、ケースにはベタ焼きを貼付して内容物が分かるようにした。そのケースをまとめて専用の箱に収めている。

ガラス乾板には学生の実習風景のようなものが写っており、撮影年等の詳細は不明である。使用の際はベタ焼きで対応することとし、ガラス乾板の現物は保管ケースから出さないことをしたい。

写真類を納めたファイルは再整理後100冊程度になり、すべて写真保管庫（温度20℃、湿度50%の環境設定）に保管している。

⑤その他の資料の整理

現場で作成された実測図等については丸めて保管されていたものが多く、広げて大判のクリアファイルに差し込み、遺跡ごとに面面ケースに入れて「河口コレクション保管室」に保管した。折り目など傷んでいる箇所は修復を行った。

野帳や調査日誌、日記、研究ノート、その他の資料については「河口文庫③」として一般収蔵庫二階に保管している。野帳や研究ノート類が約25箱、先生の原稿類が2箱、抜き刷りが7箱、他にも各種委員会等の資料や遺跡関係の書類等が多数あり、分類とリストの作成を順次進めているところである。

また、遺跡調査時の野帳や調査日誌については、大変重要な情報であるため、原本を傷めないように、コピーの作成とデジタル化を順次進めている。

新聞の切り抜きは年代順に並べ替え、直接台紙に貼ることは避け、薄いビニールで包んだうえで台紙に貼り付け、大判のファイルに保管している。切り抜きファイルは一括して図書室に保管し、閲覧できるようにしている。

この他、手紙や葉書など河口氏と親交のあった方々との書簡や報告書原稿の版下、パンフレット等大体の分類はできたものの、細かなリスト化までには至っていない。また、河口コレクションには河口氏が使用していた実測道具や文房具等の資料も含まれている。今後順次整理を進めていく予定である。



考古遺物搬入状況



開梱と台帳作成作業



遺物洗浄作業



遺物実測作業

第4図 河口コレクション整理・収納状況写真①



書籍類の搬入状況（段ボール400箱）



写真フィルムクリーニング作業



図書室内に設置した「河口文庫①」



ネガ・ポジの整理・保管（写真保管庫）



河口先生の書斎から移設した書架



写真プリントの整理



「河口文庫②」の整理・保管（一般収蔵庫二階）



ガラス乾板の整理

第5図 河口コレクション整理・収納状況写真(2)



第6図 河口コレクション整理・収納状況写真(③)

第Ⅲ章 山ノ口遺跡の再検討

第1節 遺跡の現状

山ノ口遺跡は、現在の行政区画で鹿児島県肝属郡錦町馬場に所在する。錦町南部の沖積平野の南端にあたる海浜地で、背後には肝属山地がせまり、前面は約200m余で鹿児島湾の海岸線に至る。

本遺跡周辺は以前から水田地帯であり、山ノ口遺跡発見時の昭和30年代には、砂鉄採掘地帯となっていた。現在は、水田から畑地への転換が行われている。

現在遺跡地には、「山ノ口祭祀遺跡の碑」が建てられている（第7図）。また、平成の大合併前の大根占町時代、昭和47年4月には「山ノ口祭祀遺跡」として町指定文化財に指定されている。

本遺跡の発掘調査はその後行われていないが、隣接する出口遺跡で国道269号線の改良工事に伴い、昭和62年に発掘調査が実施された。しかし、山ノ口遺跡で大量に出土した弥生時代の遺物ではなく、绳文時代後期と古墳時代が主体であったと報告されている。

第2節 現場図面の追加資料

山ノ口遺跡関係の図面類として、第1～3次調査の図面、第1次調査の調査日誌（B5版ノート1冊）、第2・3次調査の調査メモ（B5版ノート1冊、メモ帳2冊）がある。これらの中から未報告の図面類について報告する。

第8図は、山ノ口遺跡のトレンド配置図である。旧報告では、C地点のグリッド設定状況が、文章中に記載されているものの図化されていなかった。調査日誌により、グリッド設定状況が確認できたため、今回図化した。また、昭和36年5月の砂鉄採掘状況も記録されており、第3次調査（D地点）時点では、すでにB・C地点は削平されている様子が窺える。

第9図は、B地点（第1次調査）の環状配石及び遺物出土状況図である。旧報告でも図化されているが、炭化物出土範囲及び暗紫ゴラ検出範囲等を凡例をつけて分かれやすくしたほか、A'地点の範囲も追加し、砂鉄採掘により削平を受けている範囲と環状配石の関係がより明らかになった。併せて、第10図として遺物実測図も配置した図を掲載した。

第11図は、C地点（第2次調査）の環状配石及び遺物出土状況図である。IIトレンド9区よりIVトレンド1区へかけて検出された楕円形環状の配石及びその周囲の遺物出土状況図は、旧報告でも図化されているが、Iトレンド4区からIIトレンド8区もあわせて実測されている。この状況が確認できたため、今回図化を行った。Iトレンド5区よりIIトレンド6区にかけて検出された軽石集積地の状況や楕円形環状の配石の周囲以外の遺物の出土状況



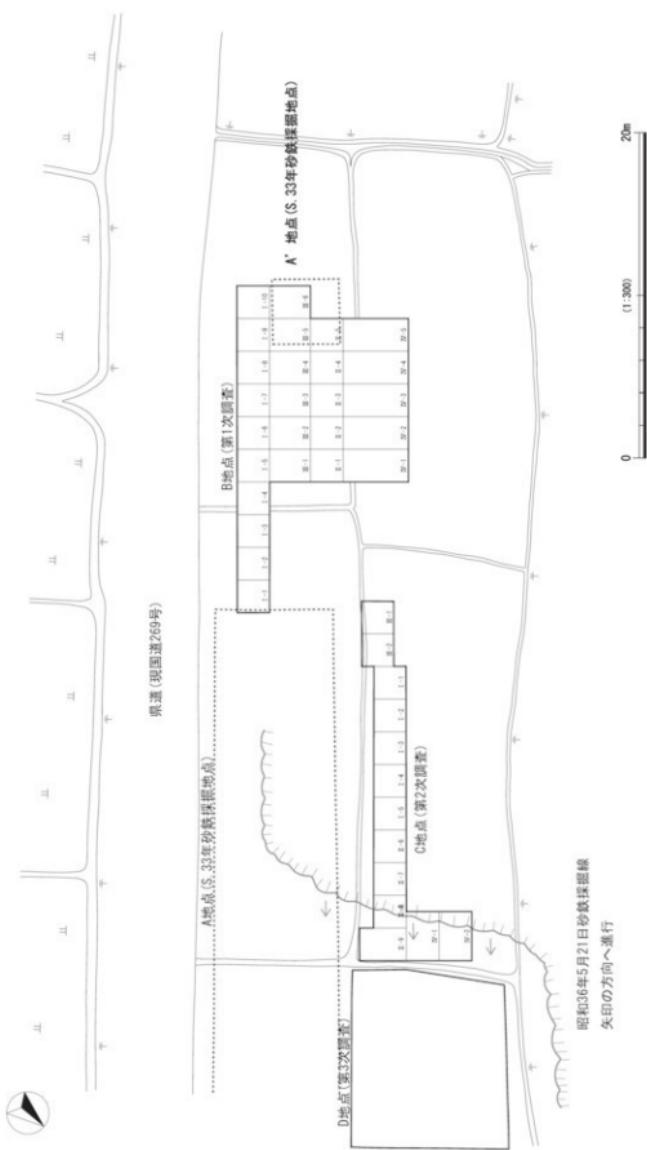
第7図 山ノ口遺跡の現況

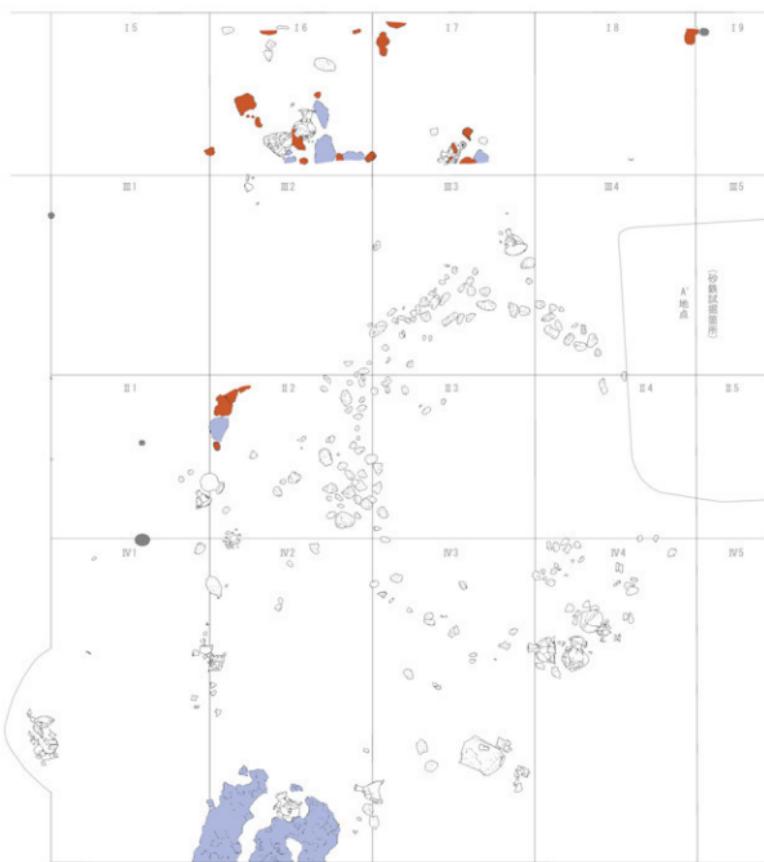
等が明らかになった。併せて、遺物実測図も配置した。

第12図は、C地点出土の陰石とされる軽石製品出土状況のメモである。旧報告では出土状況について「配石端より30cmの間隔をおいて34cm×24cmの軽石に、19cm×7cmの楕円形で深さ10.5cmの凹穴を刻んだ襍を配し、その上を加工した二箇の軽石で蓋し、更に薄板状の粘板岩で覆っている。」とあり、その状況をメモしたものと思われる。

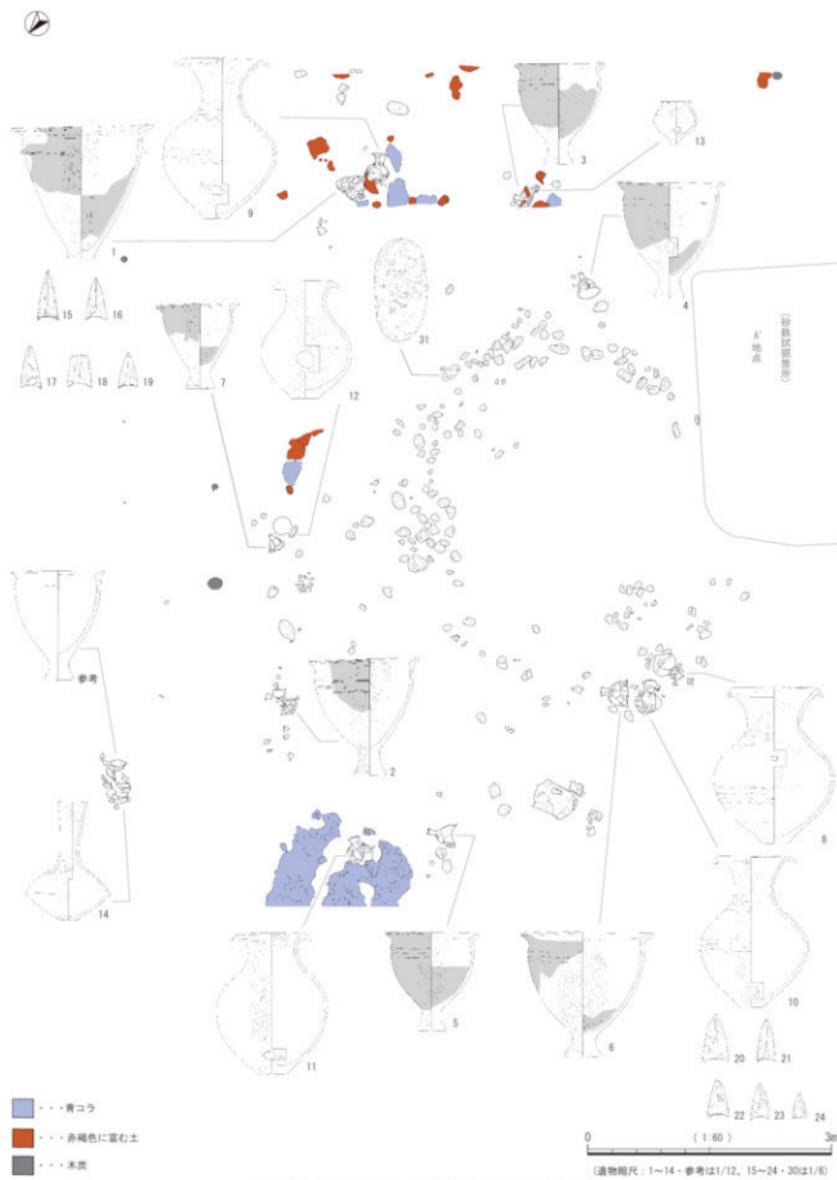
第13図は陰石とされる軽石製品の出土状況写真である。左から右へ撮影された順に配置している。まず、陰石とされる軽石製品の出土状況の写真が撮影される。次に陰石とされる軽石製品の上に加工した2箇の軽石を乗せた状況で撮影される。軽石の周囲は砂や竹串で固定されている。最後に固定していた砂や竹串をはずした状態で撮影される。このような撮影順序から、河口氏が陰石とされる軽石製品の出土を知った時にはすでに、蓋をしていた軽石や薄板状の粘板岩を取り上げていたものと思われる。その後、おそらく発掘した作業員に聞き取り、出土状況を復元して撮影したのである。なお、実測図は第13図右の写真的状況に近い。

第14図は、昭和36年の第3次調査前後、砂鉄採掘時に発見された軽石集積地の位置図のメモである。A地点とC地点の間に位置する。おそらく、図版10-①の写真はこの軽石集積地を状況を写したものと思われる。メモと写真から壺形土器が1点出土している状況が窺える。また、写真上部には、ポンプによる砂鉄採掘の際に生じた

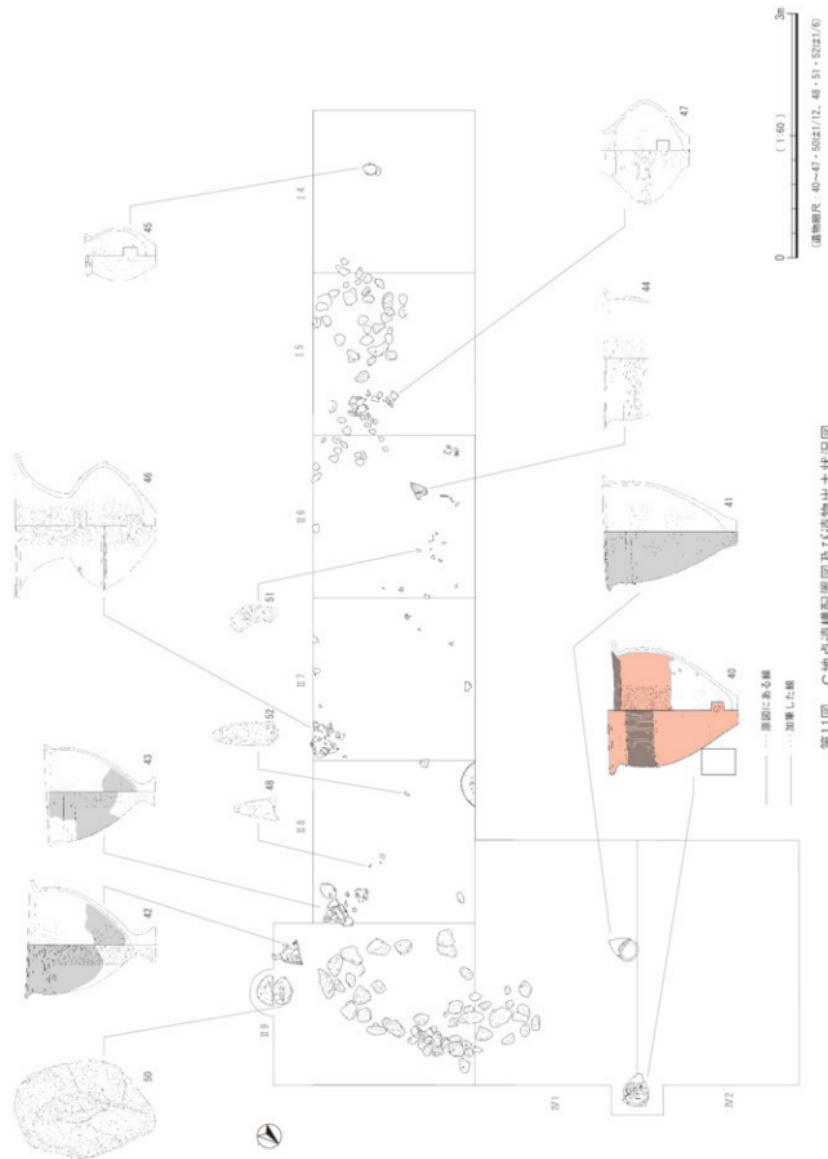




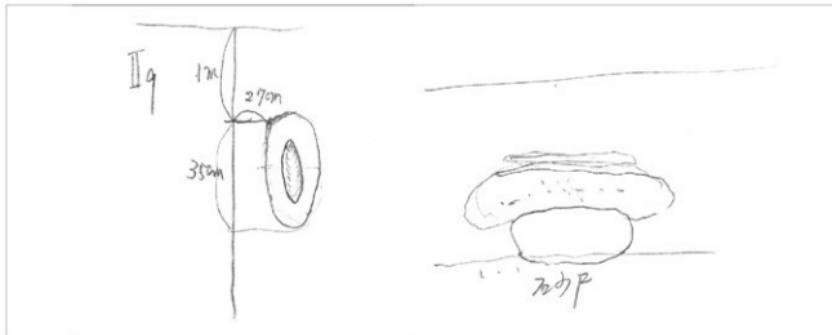
第9図 B地点遺構配置図及び遺物出土状況図①



第10図 B地点遺構配置図及び遺物出土状況図②



第11図 C地点遺構配置図及び遺物出土状況図



第12図 C地点軽石製品出土状況メモ

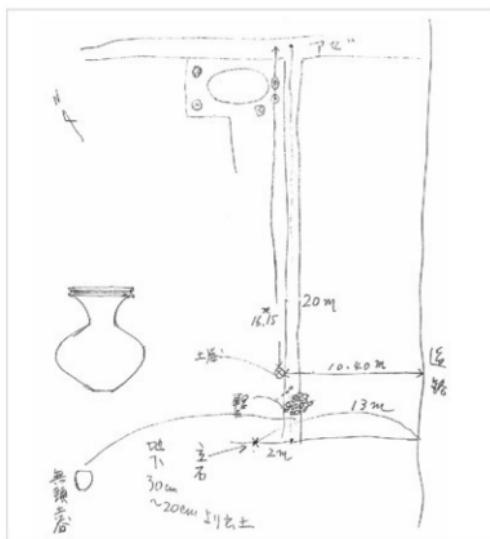


第13図 C地点軽石製品出土状況写真

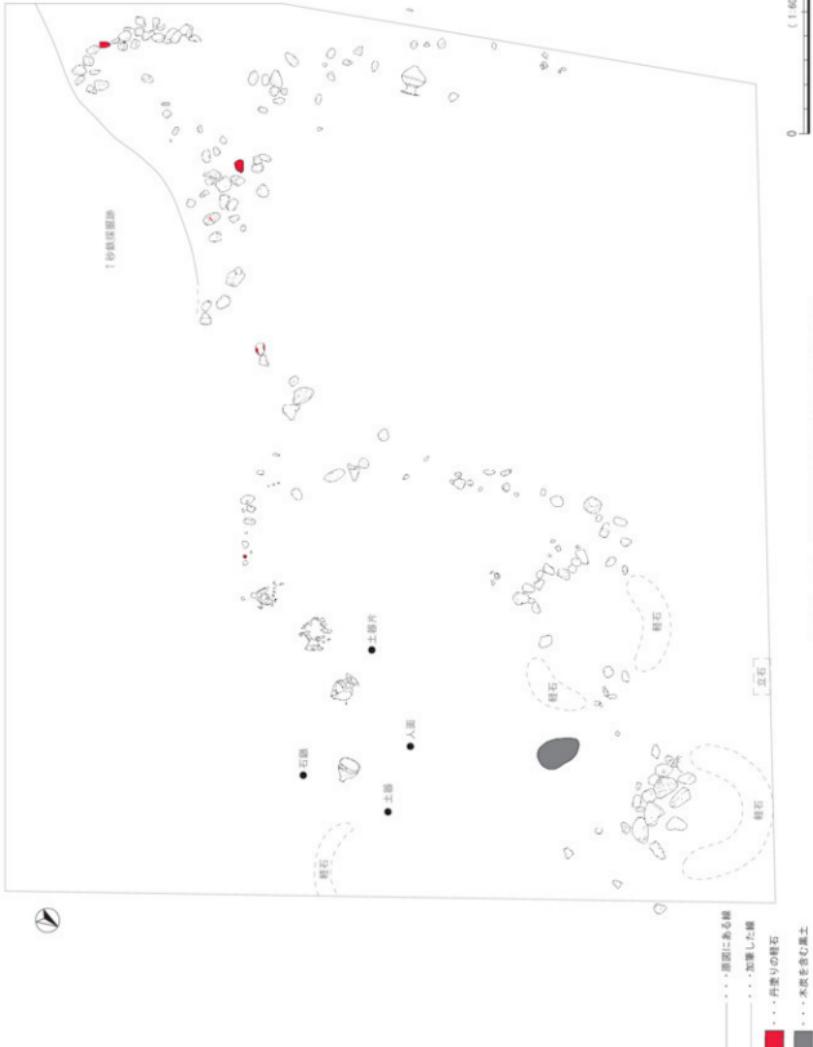
水が近くまで流れ込んでいる状況が写っており、応急的にメモと写真のみ記録した様子が窺える。

第15図は、D地点（第3次調査）の環状配石及び遺物出土状況図である。旧報告では、文章のみの報告であったため、今回初めて図化されたものである。残されている図面と出土状況の写真を見比べると、図化されていない軽石や遺物があった。そのため、写真を参考に加筆し、可能な限り出土状況の再現を行った。この図により、模式化した略図しかなかったD地点の状況がより詳細に分かるようになった。あわせて、第15図に分かり得た限り、遺物実測図も配置した。

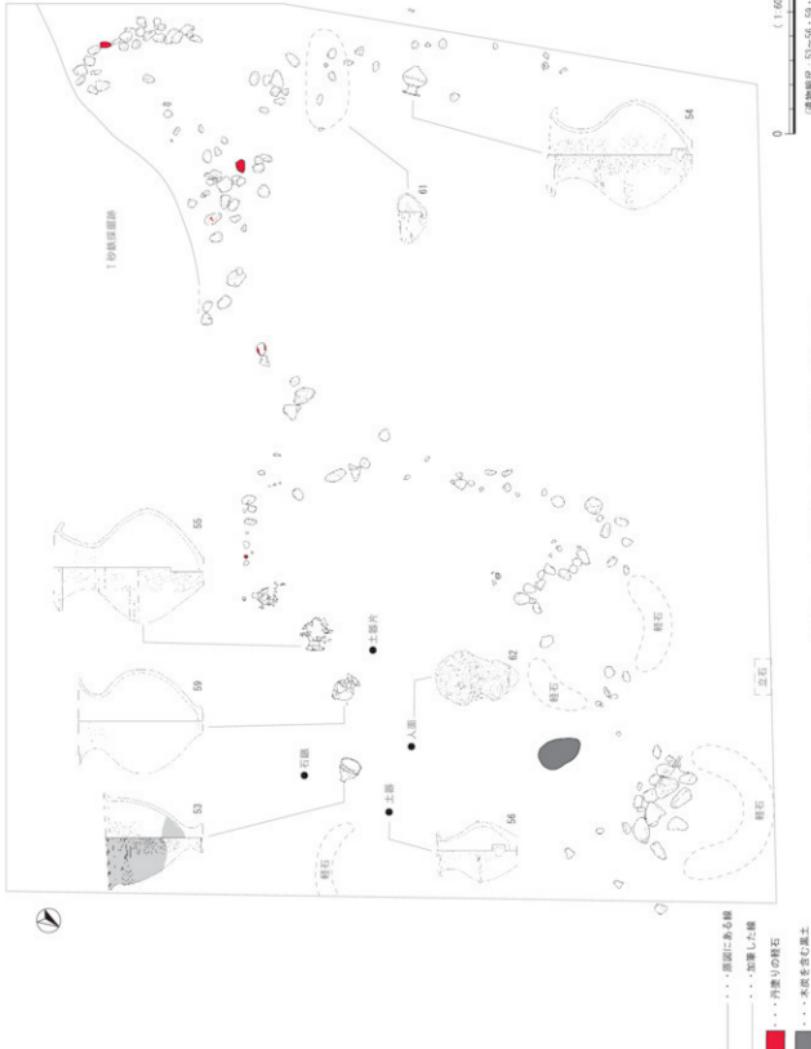
このように第3次調査では、実測図が不十分であったり、メモや写真のみで済ませていたりすることから、極めて緊急性が高い状況で調査を行っていたことが窺える。



第14図 A地点とC地点で検出された軽石集積地位置図メモ



第15図 D地点遺構配置図及び遺物出土状況図①



第16図 D地点遺構配置図及び遺物出土状況図(2)

第3節 遺物の追加資料及び再実測

今回、これまで未発表の遺物についても、現代的視点で改めて実測を行った。土器については、胴部片のみの破片を除く全ての遺物を、剥片石器は全ての遺物を、軽石・軽石製品については、加工が認められる全ての遺物を実測対象とした。以下、出土地点毎に遺物の説明を行う。

1 B 地点（第1次調査）出土遺物

（1）土器（第17～21図）

1～7は壺である。1はやや小ぶりだが、大甕の形態を呈する。口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈し、内面には口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。口唇部は四線状となる。口縁部下には、断面形態がM字状を呈する1条の突帯を巡らす。底部は、端部がやや外側へ張り出す平底である。内外面に煤が付着する。口縁部にわずかながら暗紫ゴラと思われる灰色の付着物が確認される。2の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は四線状となる。外面胴下半部の調整に、ハケ目ではなく、窓方向のミガキを施すのが特徴である。外面には、部分的に暗紫ゴラや煤の付着が確認できる。3の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は四線状となる。内外面に煤が付着する。また、口唇部にわずかながら暗紫ゴラの付着が確認できる。4の口縁部は、やや内湾して斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、2条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は四線状となる。内外面に煤が付着する。また、口唇部と胴上半部にわずかながら暗紫ゴラの付着が確認できる。胴下半部には孔が外面から穿たれている。5はやや小型の壺である。口縁部は、やや斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は四線状となる。内外面に煤が付着する。6はやや大型の壺である。口縁部は、やや斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は四線状となる。内外面に煤が付着する。7は小型の壺である。口縁部は、やや斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下の突帯はない。頭部に米粒状の刻みが連続的に施されている。文様として意識的につけたものか、調整時についてしまったものかは判然しない。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は四線状となる。このほか、旧報告では、B地点出土の壺がもう1点出土しているが所在を確認することができなかつた。再トレースした実測図を参考として掲載する（第19図参考）。

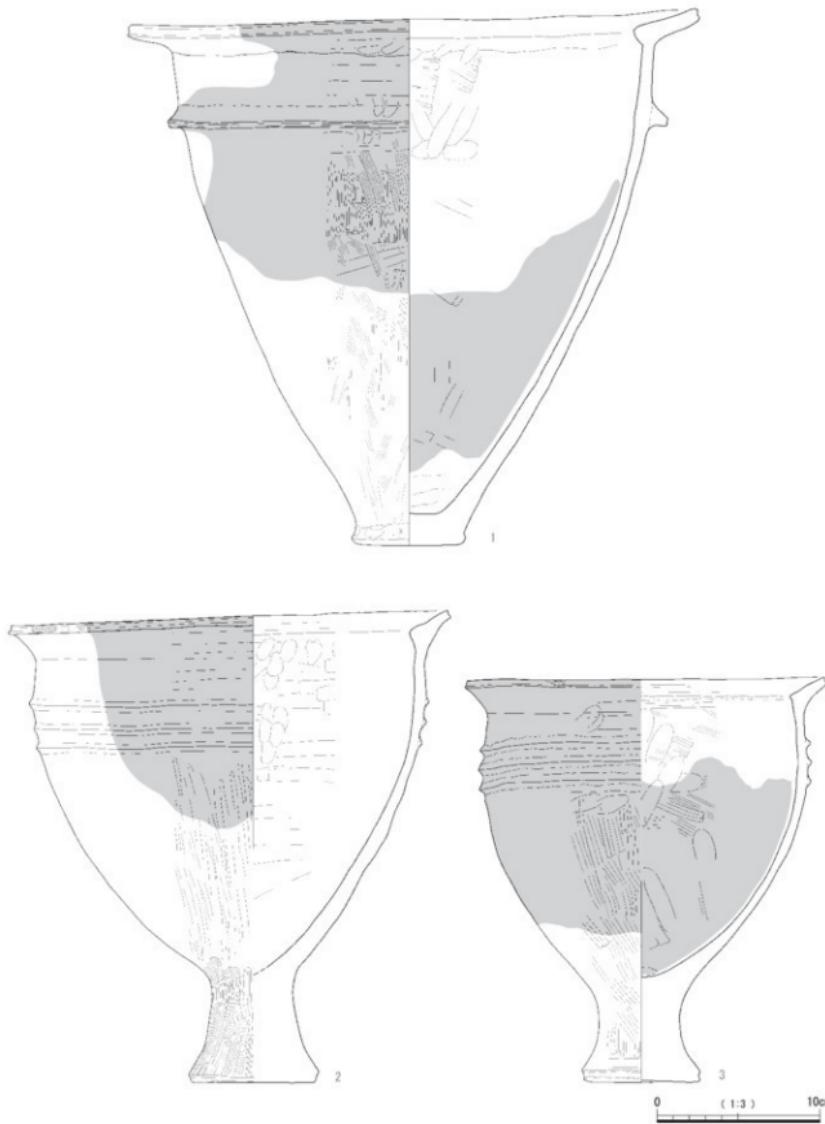
8～14は壺である。8は底部から胴下半部はストレー

トに外開きし、胴部中央から胴上半は球形に近い。胴部最大径のところに、4条の突帯を巡らす。胴上部と頸部の境は、形としては境が明瞭でないものの、6条の突帯を巡らすことから境が明らかである。口縁部は、やや垂れ下がった二叉状口縁である。内面に口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。胴部上位には、孔が外面から穿たれている。赤褐色の胎土にミガキを施することで、丹塗のような印象を受ける。9・10は底部から胴下半部はストレーントに外開きし、胴部中央から胴上半は球形に近い。胴部最大径のところには、4条の突帯を巡らす。胴上部と頸部の境は、形としては境が明瞭でないものの、7条の突帯を巡らすことから境が明らかである。口縁部は、やや垂れ下がった逆L字状を呈する。鶴先状の整形を意識したものであろうか。内面に口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。口縁部は四線状となる。底部付近には、孔が外面から穿たれている。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。11の口縁部は、やや垂れ下がった逆L字状を呈し、内面には口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。胴部は、球形に近い形態を呈する。また、胴下半部には、孔が外側から開けられている。底部は、平底である。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。12は11とほぼ同様の形態だが、11に比べやや小ぶりである。胴部中央に孔が外面から穿たれている。13は台付小型壺である。脚台部の大半が欠損している。口縁部は逆L字状を呈し、ほぼ水平方向に伸びる。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。胴部形態は球形に近い。胴部下位には孔が外面から穿たれている。14は長頸壺である。頭部下位から胴部上位にかけて8条、胴部中央に1条の突帯を巡らす。突帯の断面形態は頭部下位から胴部上位のものが三角形、胴部中央のものがM字状である。胴部は算盤玉状を呈する。底部には孔が外面から穿たれている。胴部中央の突帯の凹み部には暗紫ゴラが付着している。

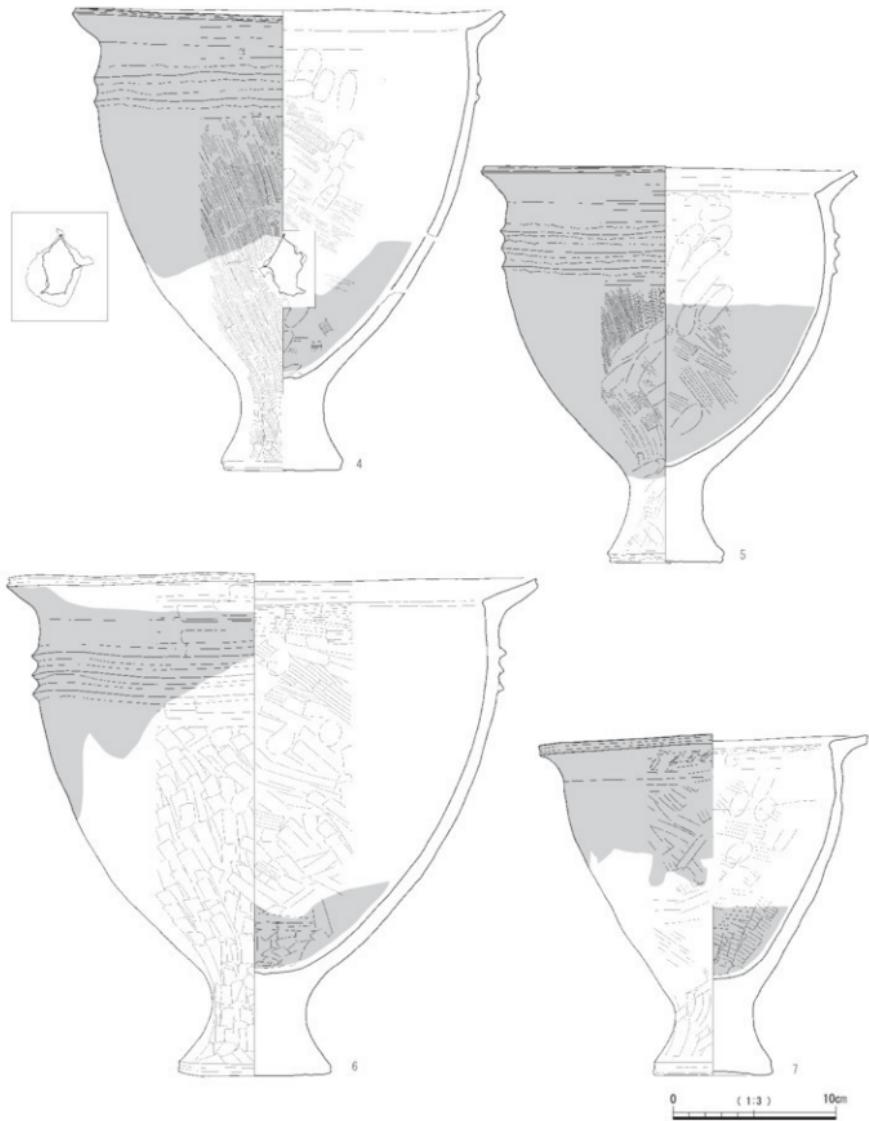
（2）石器・石製品（第22～25図）

15～25は磨製石器である。15～19は、1の土器付近で、20～24は、10の土器の直下からまとめて出土したとされる。粘板岩製のもの（15～19、21～24）と頁岩製のもの（20・25）がある。大きさは、長さ6cm程度の大型品（15・20）から、長さ3cm程度の小型品（24）までバリエーションがある。また、先端部は欠損しているものが多く、18や21のように鏃をもつものもみられる。

26～39は軽石製品である。26～28は勾玉である。両側から孔が穿たれている。29は勾玉状を呈する軽石製品である。孔は穿たれていない。30は線刻や小凹み穴を穿った軽石製品である。線刻は非常にシャープな加工である。31も同様な軽石製品である。小凹穴は、同じ斜め方向から穿たれている。また凹みから生じる短い線刻もほぼ同じ方向である。河口氏は30・31の軽石製品を呪術具と想

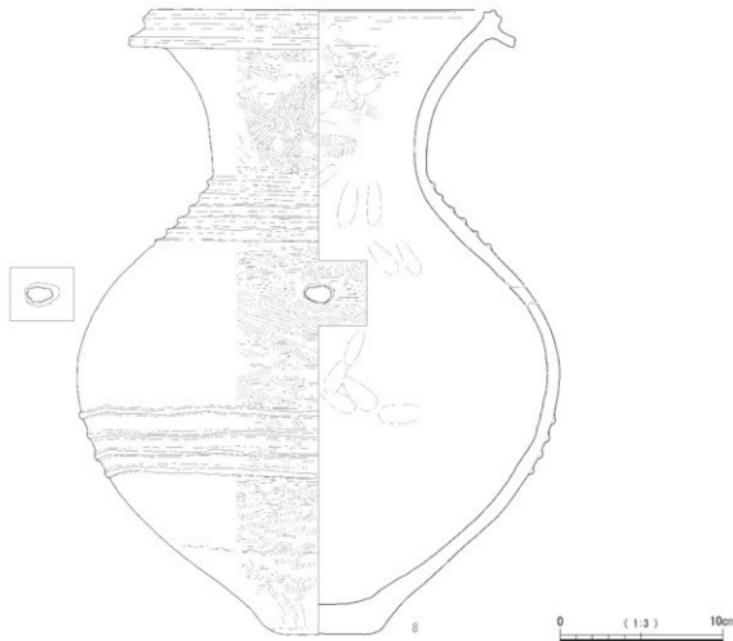
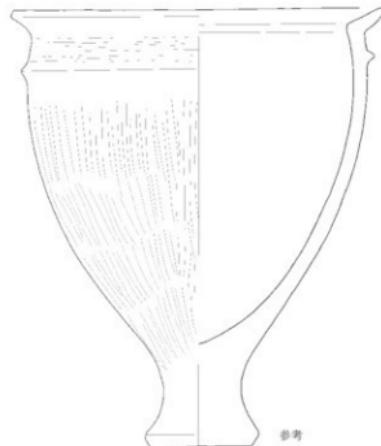


第17図 B地点出土土器実測図①



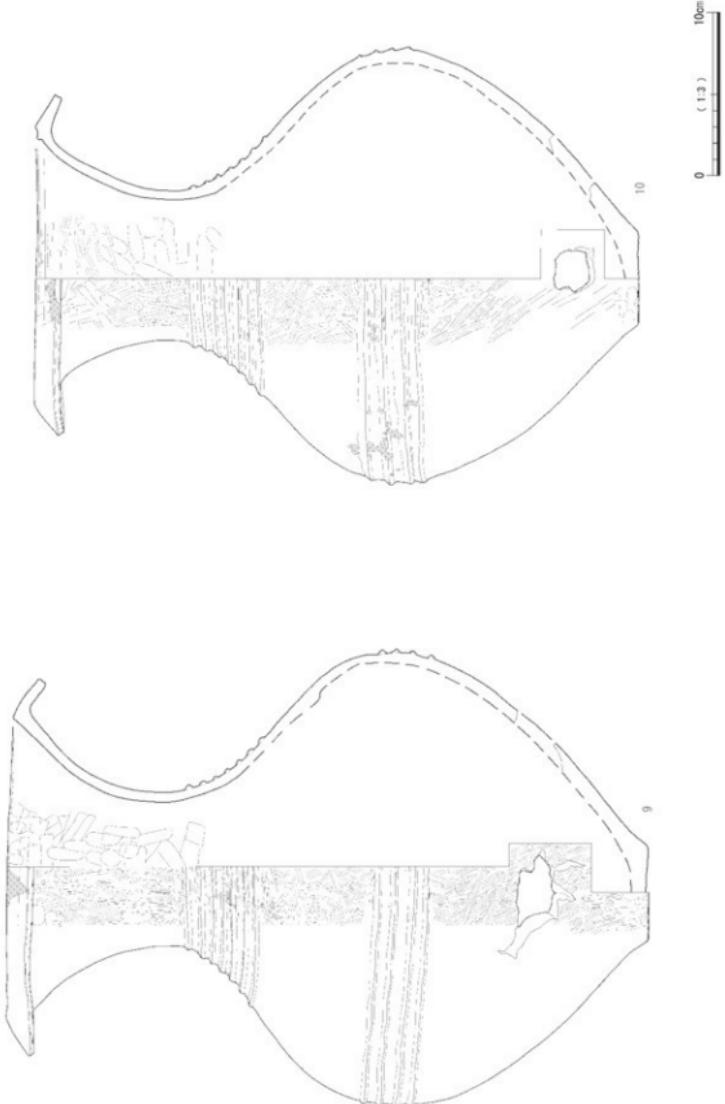
第18図 B地点出土土器実測図②

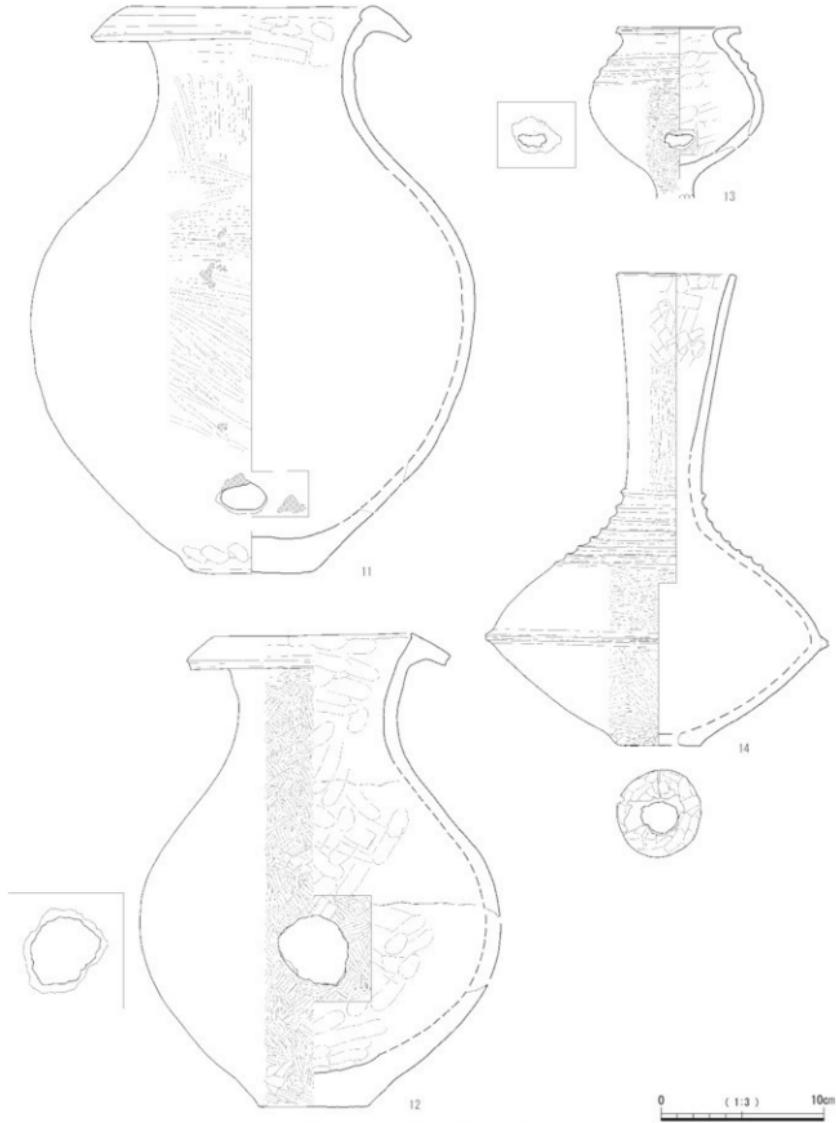
定している。しかし、31は底面が緩やかに磨かれ作業にあたって安定するように加工していることから、何らかの作業台の可能性もある^[31]。32・34は、幅1~2cm程度の棒状のものを研削したと思われる軽石製品である。33・34には暗紫ゴラが付着している。35~39は、加工がみられるが用途不明の軽石製品である。35は側面に小凹穴が見られる。先の尖った工具で穴を穿ったと思われる。暗紫ゴラが付着している。36は正面2か所や底面1か所、直徑2cm程度の凹穴が確認できる。37は両側面に加工が見られる。38は、研磨され、勾玉状に加工されるが、最大長が11.7cmあり、勾玉にしては大きい。39は中央に橢円形の凹穴があり陰石のように見えるが、凹穴が人為的なものかどうか判然としない。



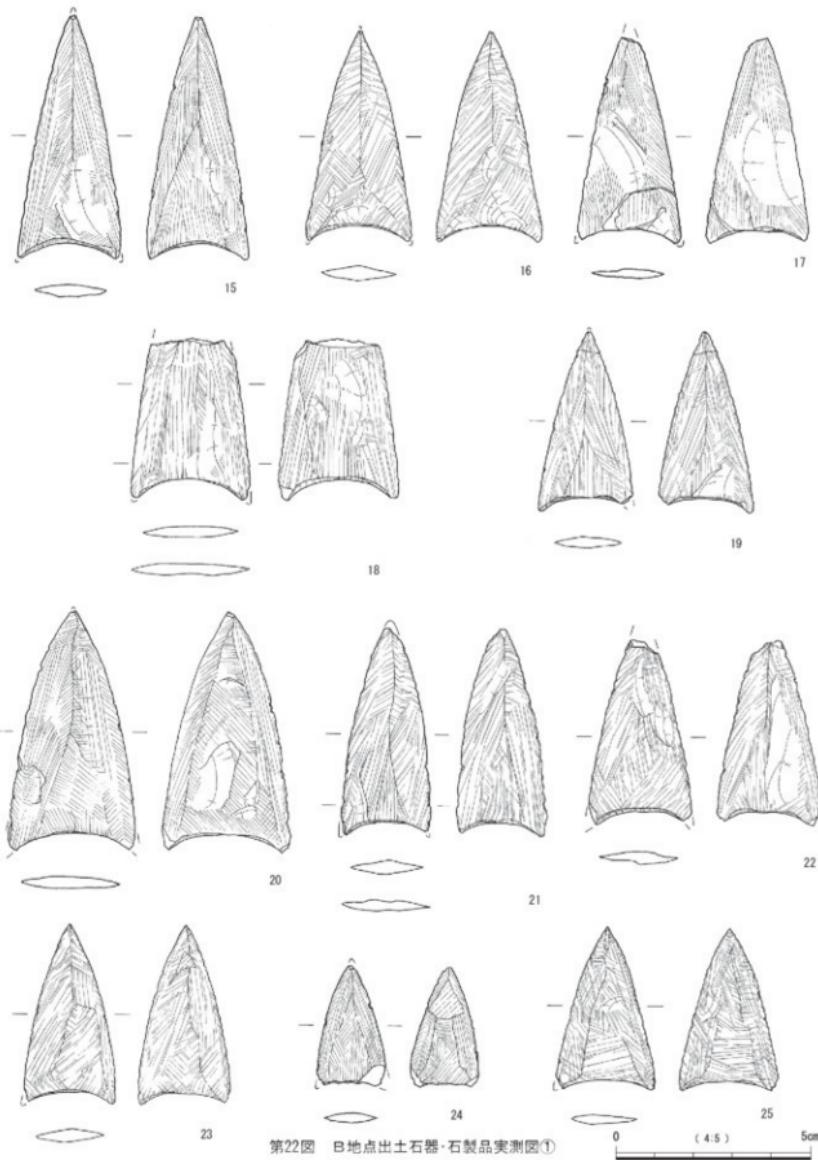
第19図 B地点出土土器実測図③

第20圖 B地點出土土器實測圖4





第21図 B地点出土土器実測図⑤

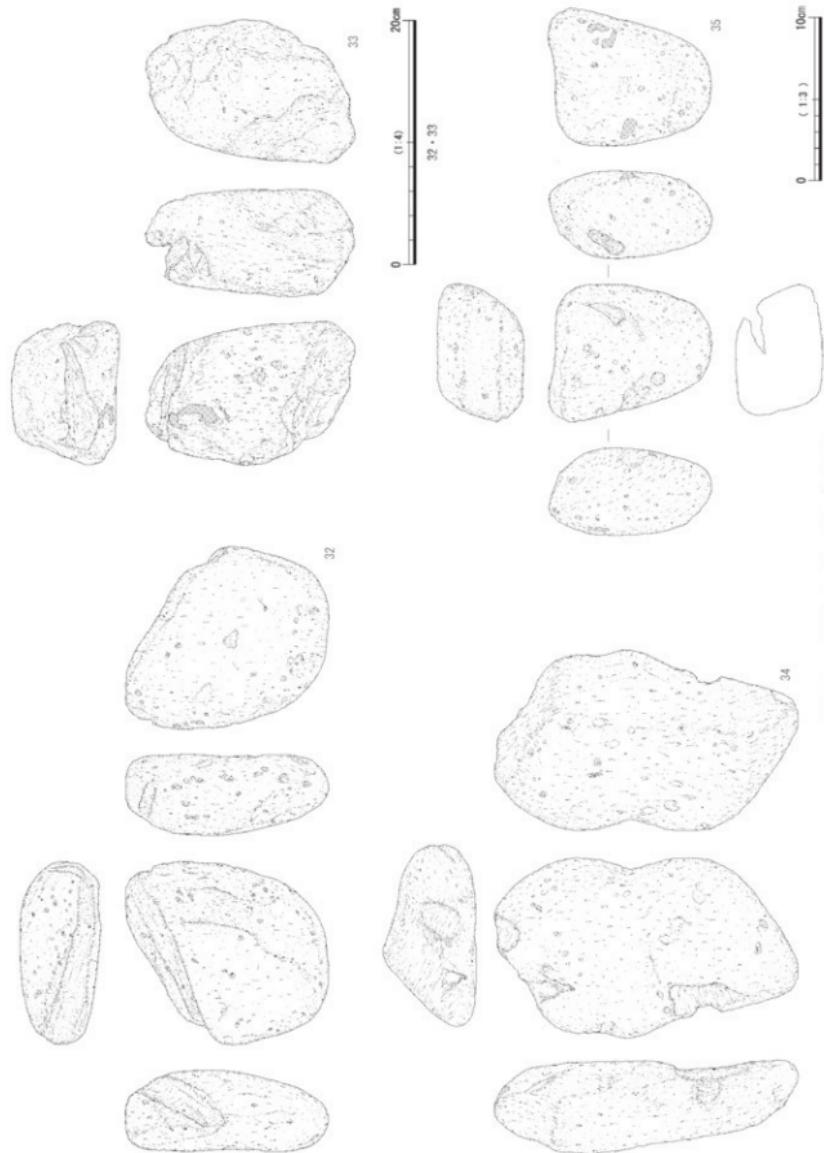


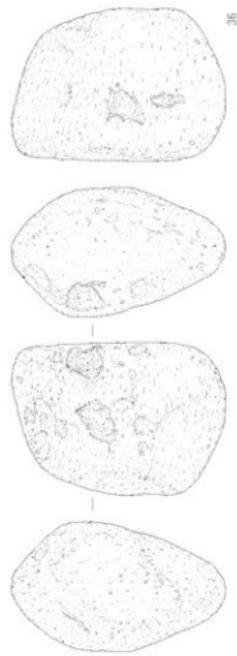
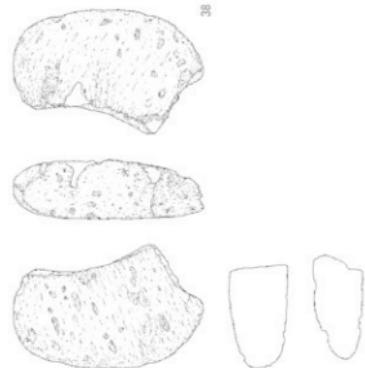
第22図 B地点出土石器・石製品実測図①



第23図 B地点出土石器・石製品実測図②

第24圖 日地点出土石器·石製品実測図③

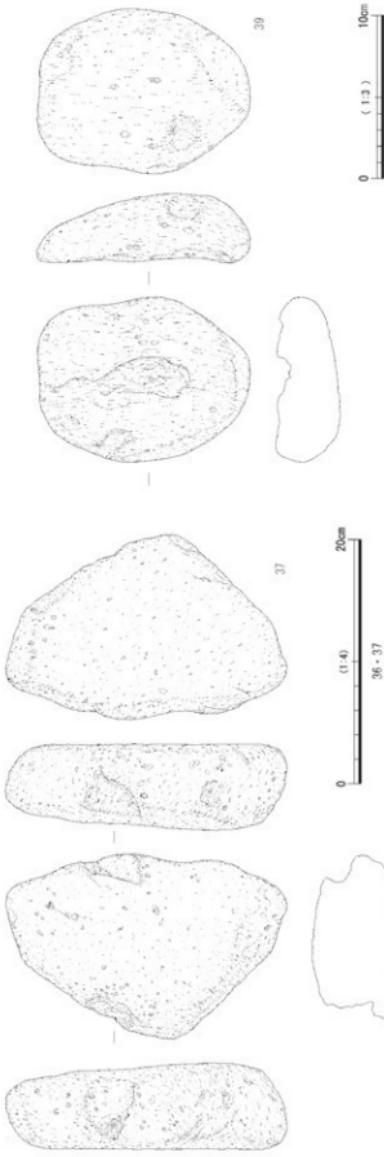




第25図 B地点出土石器・石製品実測図4

0 (1:3) 10cm

0 (1:4) 20cm
36・37



2 C地点（第2次調査）出土遺物

（1）土器（第26～28図）

40～44は、壺である。40の口縁部は斜め上方へ長く伸びる逆L字状を呈する。口唇部は凹線状となる。頸部直下及び胴部中位にそれぞれ1条の断面三角を呈する突帯を貼り付けている。底部はやや上げ底である。口唇部内面及び外面の突帯間には暗文を施す。外面及び内面の口縁部～胴部中位まで赤色顔料が塗布されている。底部付近の胴部下位には、外側から孔が穿たれている。41の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口唇部は四線状となる。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。底部は平底である。外面に煤の付着が確認できる。また、口唇部及び口縁部内面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。42の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は四線状となる。内外面に煤が付着している。44は、口縁部片である。口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、4条の突帯を巡らす。口唇部は四線状となる。内外面に、爪状の圧痕が規則的に施されている。指オサエ時につけた可能性が考えられる。

45～47は壺である。45は小型壺である。口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口唇部は四線状となる。底部は平底である。胴部下位に外側から孔が穿たれている。46は広口壺である。口縁部は朝顔形に大きく聞く。口唇部は四線状となる。胴部は偏球状を呈し胴部中央に断面M字状の1条の突帯を巡らす。胴上部には、3個1組の円形浮文が5か所確認される。胴下半部に孔が内側からと外側からの2回の打撃により開けられている。底部は平底である。外面胴部の突帯には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。47は頸部～底部片である。胴部は偏球状を呈し、頸部と胴部中央にそれぞれ3条の突帯を巡らす。底部は平底である。胴部下位に外側から孔が穿たれている。

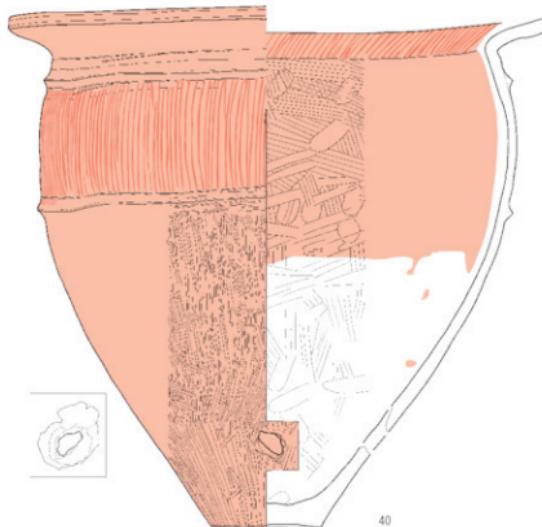
（2）石器・石製品（第28・29図）

48・49は磨製石錐である。48は長さは残存部分のみで5.55cmある大型品で、端部はいずれも欠損している。49は長さ2.9cmの小型品である。

48はII9区出土と書かれた袋の中におさめられていた。しかし、写真との照合からC地点II8区出土の石錐と判明した。49もII9区出土と書かれた袋の中におさめられていた。II9区が設定されているのは、C地点のみであるため、ここで報告した。つまりC地点出土と考えられる磨製石錐は2点あるのだが、旧報告にある「C地点の遺物としては、粘板岩製の磨製石錐1箇」という記

述と矛盾する。48は写真から確実にC地点出土ということがおさえられるため、49は他の地点から出土した可能性がある。

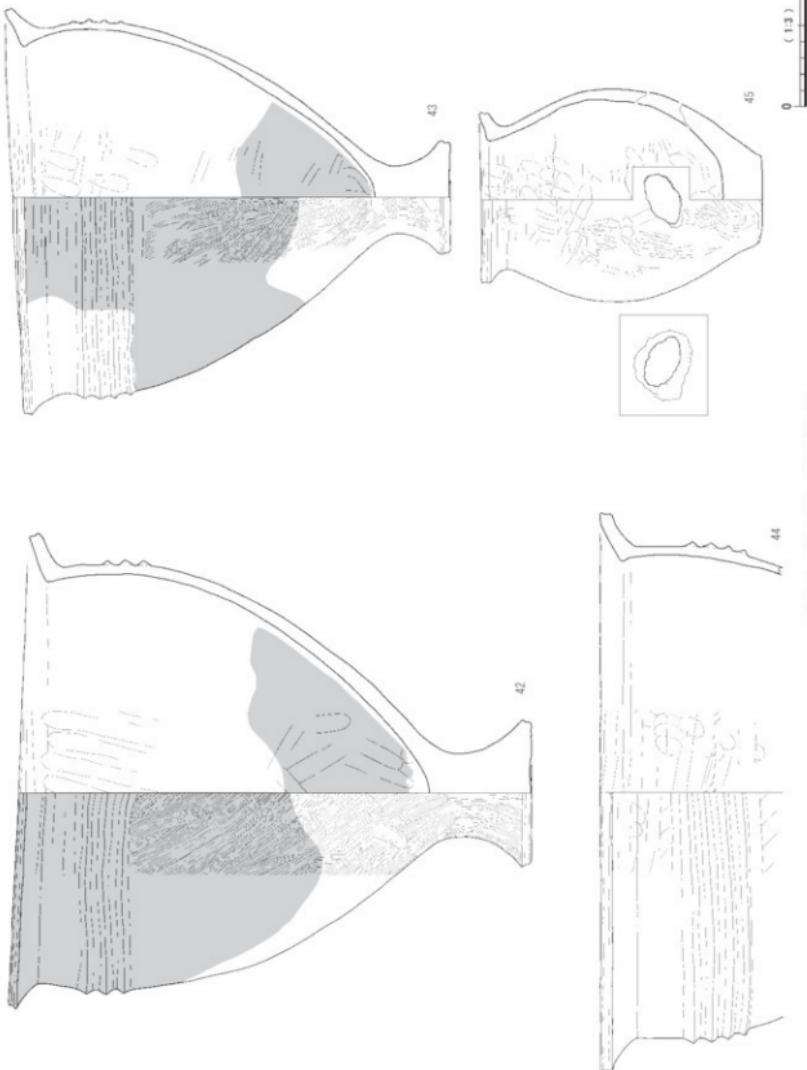
50～52は軽石製品である。50は正面中央に長さ18.0cm、幅7.5cm、深さ11.3cmの凹穴をもつ。平面形態は、梢円形、断面形態は凹状を呈する。右側面にも凹みを4か所確認される。これまで陰石と報告してきたものである（河口II1978など）が、前述の出土状況から陰石ではなく容器の可能性も否定できない⁽²²⁾。51は勾玉である。両側から孔が穿たれている。下半部は後世、欠損した可能性も考えたが、風化の具合が明らかなガジリと異なるため、意図的に磨いて整形したのではないかと思われる。52は旧報告で「円柱形軽石製品」や「まるい棒状の加工品」とされたものである。両端部に加工を施し、凸状の突起が形成されている。ソケット状のものと組わせて使用した可能性等が考えられるが、用途は不明である。

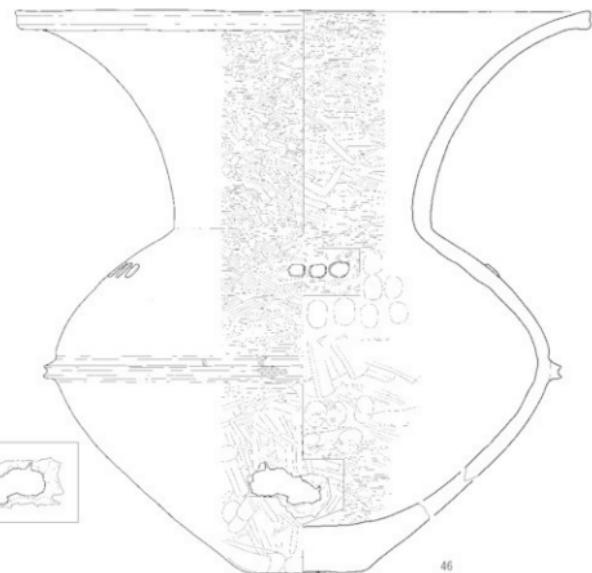


0 (1:3) 10cm

第26図 C地点出土土器実測図①

第21圖 C地點出土土器實測圖2

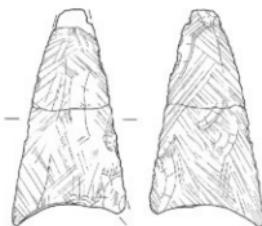




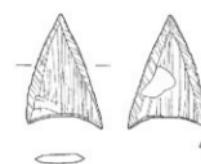
46



47



48

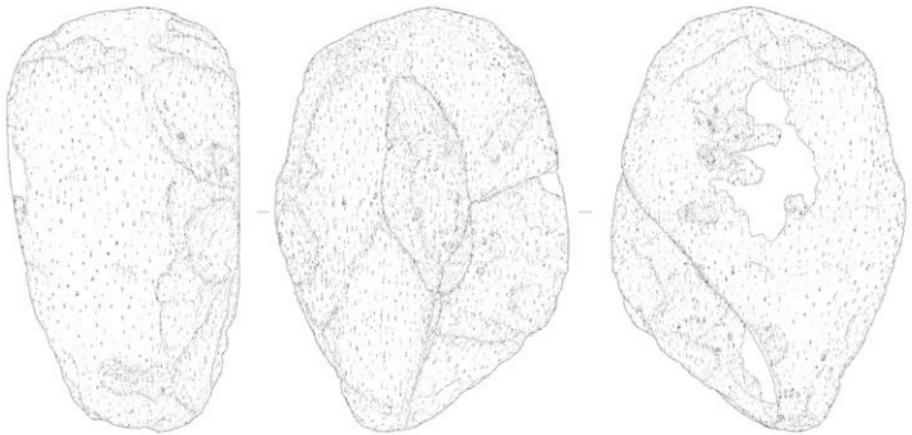


49

0 (1:3) 10cm
46・47

0 (4:5) 5cm
48・49

第28図 C地点出土土器実測図③及び石器・石製品実測図①



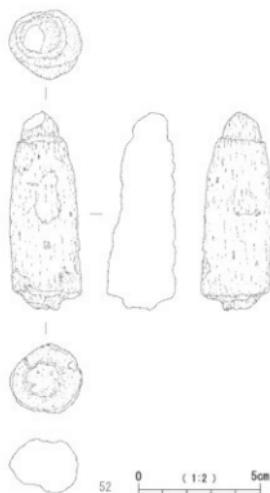
50



0 (1:4) 20cm
50



51



0 (1:2) 5cm
51・52

第29図 C地点出土石器・石製品実測図②

3 D地点（第3次調査）出土遺物

53~72は、錦江町教育委員会が所蔵する山ノ口遺跡出土遺物である。60~62は、これまでD地点（第3次調査）出土遺物として、報告されたものである。他の遺物については、どの地点から出土したものか確認は得られていない。しかし、出土状況図（第15図）や出土写真に類似する遺物が多数みられたことなどから、錦江町教育委員会が所蔵する遺物は、D地点出土遺物の可能性が高いと判断し、本項で詳述する。ただし、D地点の調査が行われた第3次調査時、再び砂鉄採掘作業も行われているため、一部、昭和36年の砂鉄採掘時の出土遺物も含まれている可能性があることも加えて指摘したい。

（1）土器（第30~32図）

53は壺である。脚台から、ゆるく内湾する胴部をもち、大きく外開きする口縁部に至る。口縁部下には3条の突帯を巡らす。口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部内面には明瞭な棱がみられるが、外面での境は明らかでない。口唇部および底部縁辺は凹線状となる。D地点からはもう1点壺が出しているが、所在不明である。

54~59は壺である。54は底部から胴下半部はストレートに外開きし、胴部中央から胴上半は球形に近い。胴部最大径の上よりも、2条の突帯を巡らす。胴上部と頸部の境は、形としては境が明瞭でないものの、3条の突帯を巡らすことから境が明らかである。口縁部は、やや垂れ下がった逆し字状を呈する。勘先状の整形を意識したものであろうか、内面に口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。口唇部は広く面取りし、四線状となる。底部付近には、孔が外面から穿たれている。55は底部から胴下半部はストレートに外開きし、胴部中央から胴上半は球形に近い。胴部最大径より上に3条の突帯を巡らす。頸部の最も締まった部分から下には、4条の突帯を巡らす。口縁部は、やや垂れ下がった逆し字状を呈する。勘先状の整形を意識したものであろうか、内面に口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。口唇部は広く面取りし、四線状となる。口縁部の内側は、勘先状の整形を意識している。外面の調整はハケ目状の工具によるが、ミガキ様のナデに近い光沢をもつ。胴部から底部にかけて何か所か欠けているので、孔が穿たれていたかどうかは不明である。56は小型壺である。安定した底部から内湾気味に胴部中央に至る。器高のはば中央に胴部最大径はあり、1条の突帯を巡らす。胴上部と頸部の境は、はっきりとしない。口縁部は、水平方向に伸びる逆し字状を呈する。胴下半部には、孔が外面から穿かれている。57は大型長頸壺である。口縁部付近が欠損しているものの、ほぼ全体の形が残っている。不安定な底部から胴下半部はストレートに外開きし、胴部最大径は上位にあって、胴上部は球形となる。頸部との境付近には、3条

の突帯を巡らす。突帯の断面形状は、三角形ではなく台形に近い。頭部はやや内湾気味に外開きしながら口縁部へ至る。頸部内面の途中には、工具が当たった痕跡があり、口縁部を調整する際に付いた可能性もある。胎土は花崗岩質を基本とするものの、金色の雲母は目立たない。胴部最大径付近には、焼成後に孔が外面から開けられている。胴部の一部が欠けているが、故意によるものかどうかは不明である。本資料は同時期の南九州にはあまりみられない器形であり、山ノ口遺跡出土品であるかどうかの確認は得られていない。ただし、穿孔の仕方など共通点も多いことから、当遺跡の出土品として扱った。58は広口壺である。安定した底部から球形に近い胴部をもち、境が明瞭で締まった頸部から大きく聞く口縁部へ至る。口縁部付近は水平に近く、口唇部は広く面取りし、四ませている。胴部最大径よりも口縁部が広いことが特徴である。底面はわずかに上げ底状となり、同じ方向に指ナデされる。底部縁辺はわずかな反りがみられる。胴下半部には、孔が外面から開けられている。59は不安定な底部から球形に近い胴部をもち、締まった頸部から大きく聞く口縁部へ至る。頸部と口縁部および胴部境は明瞭でない点が特徴である。外面は全体的に摩耗が著しく、調整は明らかでない。また、口唇部も広く面取りはしているものの、四線状になるかは不明である。胴部の一部が欠けているが、故意によるものかは確認できない。

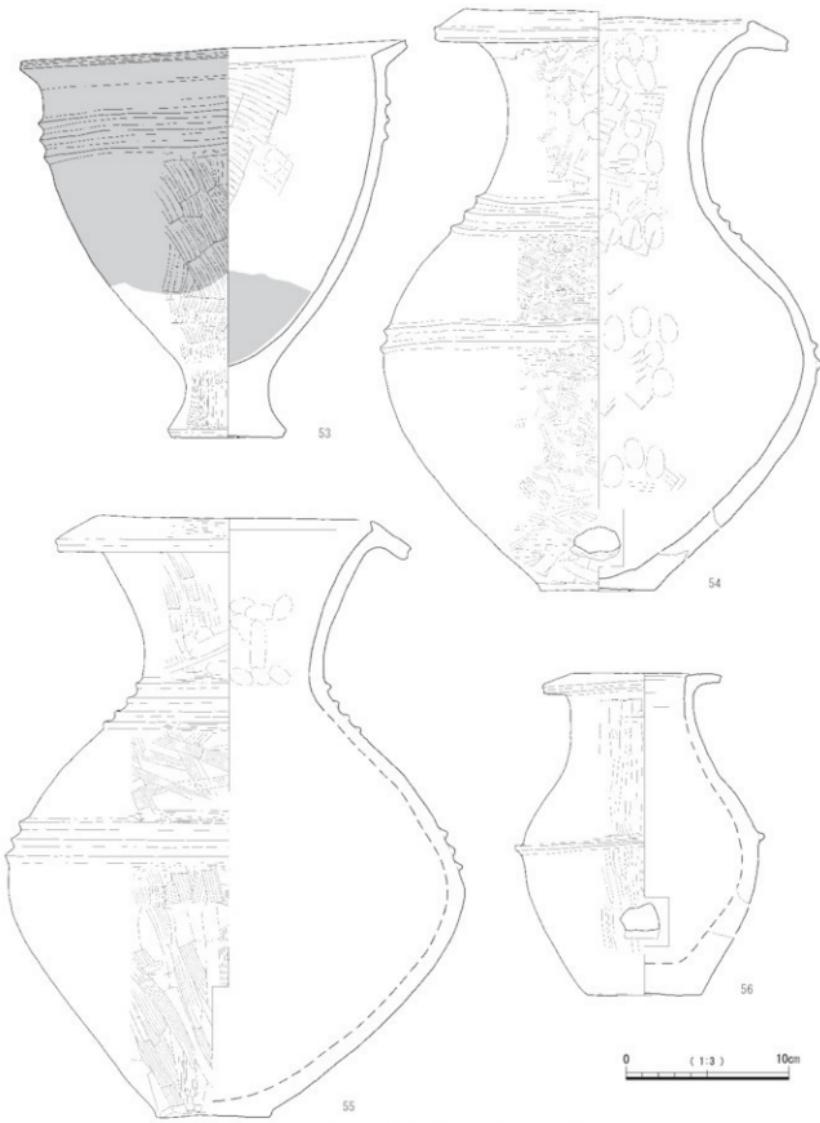
60は高杯である。楕円形の杯部とラバ状に聞く脚部を有する。杯部と脚部の接合部分には、円盤状というよりは、Uの字状に近い粘土塊を充填している。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。また、内外面に赤色顔料が塗付されている。

61は小型の鉢である。安定した底部から球形に近い胴部を経て内湾する口縁部へ至る。口唇部は平坦面を有する。内外面には、赤色顔料が塗布されている。また、胴部下半の底部付近に、内側から孔が穿たれている。

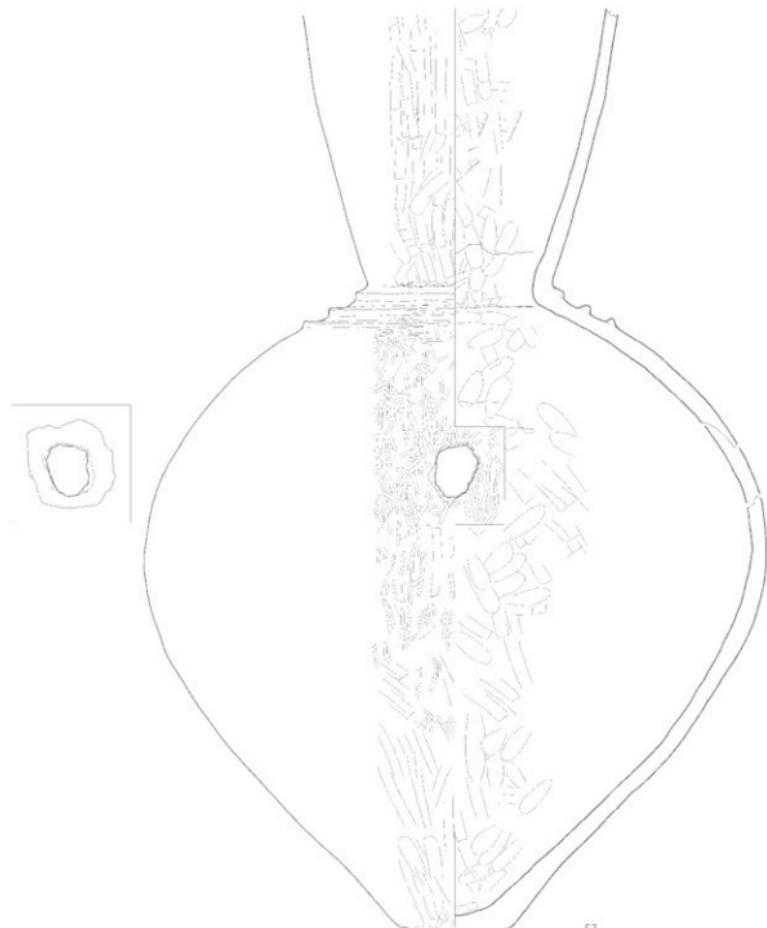
（2）石製品（第33~35図）

62~72は、軽石製品である。62は、旧報告で「顔面を思わせる軽石加工品」との記述があるものである。平形態が橢円形の軽石を素材とする。断面形態は舟形状を呈し、一面は平坦である。この平坦面は、人為的なものか、元来の軽石の形態か、明瞭な擦痕がみられないため判断できなかった。また、平坦面には目を思わせる二箇所の人為的な円形の凹みが確認される。両側面中央付近では、硬質の工具を用いて、抉りを入れている。

63~65は、旧報告で「曲玉状の加工品」との記述があるものであろうか。63は勾玉状の形をしたものであり、断面はほぼ円形である。両方の端部は平坦面をつくり出している。丁寧な加工は、全周に及んでいる。穿孔はみられない。64は勾玉状の形をしたものであり、腹部を除き全体的には明瞭な加工痕はみられない。腹部に横方向



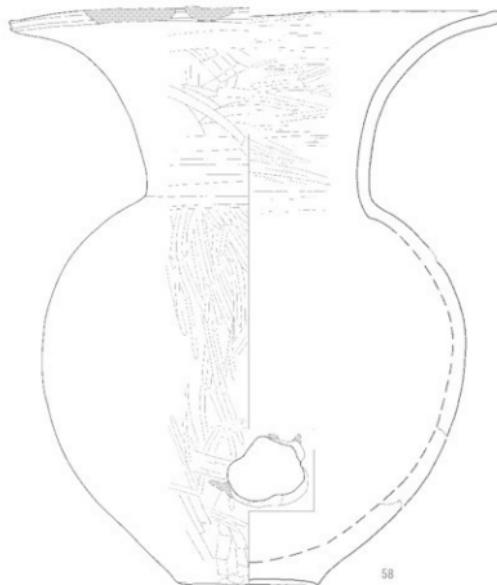
第30図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図①



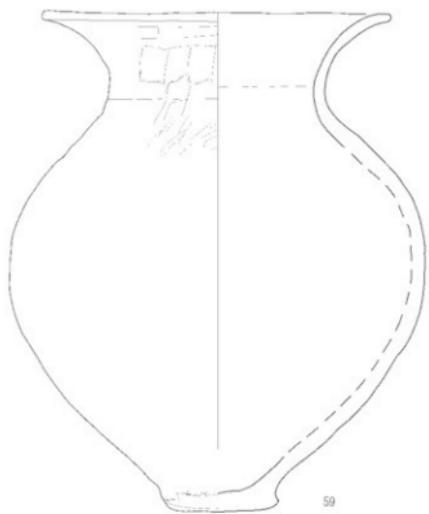
57



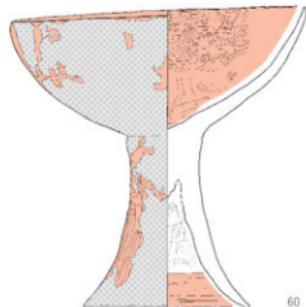
第31図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図②



58



59



60



61

0 (1:3) 10cm

第32図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図③

からの加工を間隔をおいて施しており、獸形勾玉を意識しているとも考えられる。穿孔はみられない。65は幅広ではあるが、形状的には勾玉状の形をしたものである。両方の端部は平坦に面取りし、背部は中央と両側に分けて面取りしてある。腹部の加工は上から下に行い、側縁部は軽く面取りしてある。穿孔はみられない。

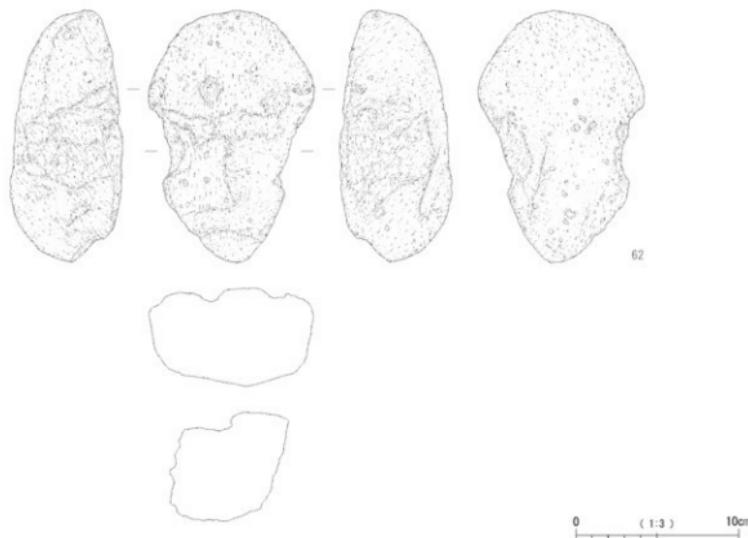
66・67は、陰石状を呈する軽石製品である。66は3つに割れた状態で保管されていた。不定形の大きな軽石を用いたもので、粗削りではあるものの一面をつくり出している。この面の中央部を大きく抉り出しており、深いところで5cmを測る。工具の痕跡から、幅約5cmの手斧状の鉄製品が使われたと推察される。ほぼ半分に割れていると考えられ、削れ目の風化は著しい。67は不定形な軽石を用いている。平坦な一面の中央部を、抉ることによって凹みをつくり出している。凹みは深さ1.4cmを測る。

68・69は略半月状を呈する軽石製品である。68は、抉りを除いて特に加工した部分は認められない。側面の端部寄りに、橢円形を呈する、深さ3cmの抉りをもつ。69は特に加工した部分は認められないが、表面の端部寄りに敲打によるものと思われる凹みが確認できる。ま

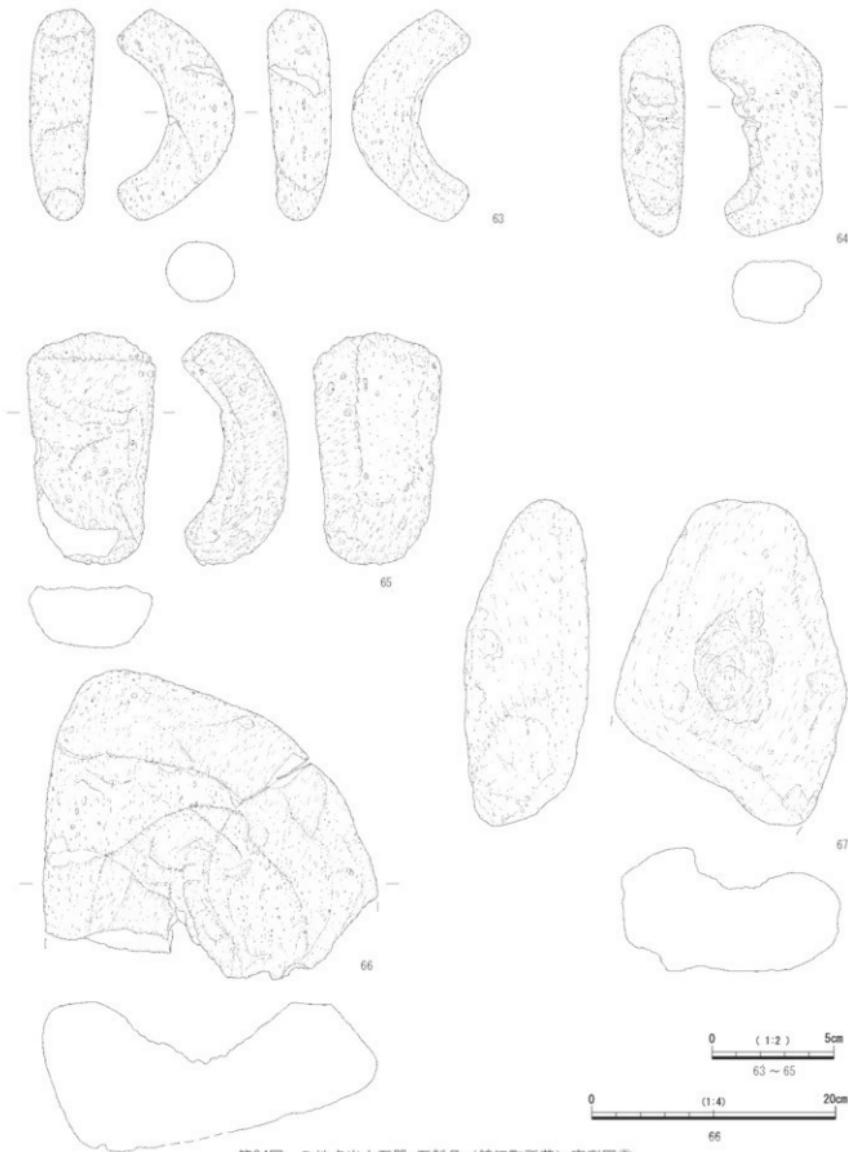
た、一面が赤色化しており、披焼した可能性もある。70は大部分が欠損しているため、本来の形状は不明である。両面に平坦面をつくり出しており、側面と比較して非常に平滑である。意識して磨面をつくったのか、使用直としての磨面なのかは明らかでない。削れ口の風化が著しいことから、当時故意に削られたか、その後のかなり以前に削れたと思われる。

71は半球形状で一面が浅い凹面状となっている。全周とも、明瞭な加工痕はみられない。72は略三角形を呈し、正面に2か所の加工状の痕跡がみられる。一つは上下から切り込みを入れたものである。もう一つは2mm幅の串状の快りである。ただし、両方とも明瞭なものではなく、自然の可能性もある。

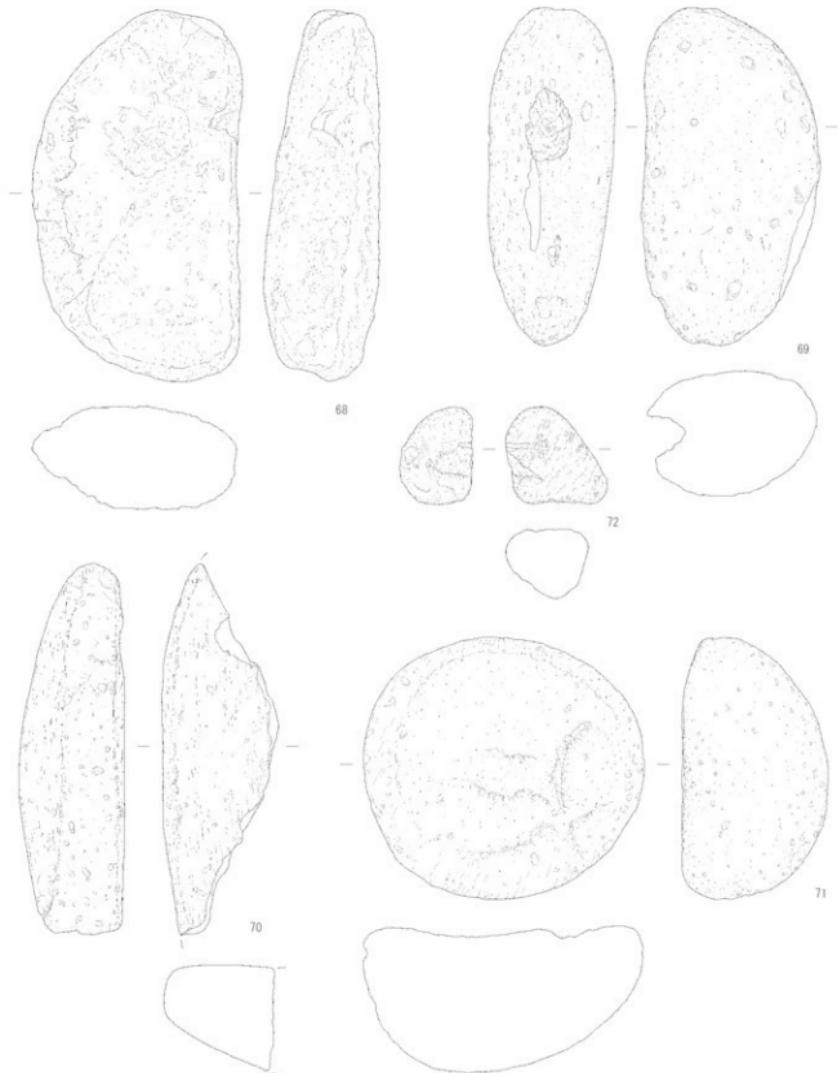
これらに加え、もう1点錦江町教育委員会が所蔵している軽石がある。巻頭写真3右下の写真の一番上にある軽石である。略測、長さ19cm、幅21cm、厚さ12cmを測る。全周にわたって、特別な加工はみられないため、風化は行わなかった。ただし、平坦な両面は、噴火時の発泡によると考えられる石壘状となっていることから、意識的に遺跡に持ち込んだ可能性がある。



第33図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図①



第34図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図②



第35図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図③

4 A 地点（昭和33年砂鉄探査時）下層出土遺物

A 地点遺物包含層は地表下 1 m の旧砂浜と思われる砂層上部と、地表下約 3 m の同砂層の深部との上・下 2 層があると報告されている。そのうち下層から出土した遺物について詳述する（第36図）。

73は壺である。口縁部は S 字状に屈曲する。頭部に強いヨコナデを施することで、口縁部と胴部の境が明瞭になっている。底部は欠損している。内外面に煤が付着している。74は壺である。口唇部は強くナデられ、四線状となる。頭部がきつく縮まり、肩部が張る形態である。頭部～肩部外面と口縁部内面に 3～5 本で 1 組の沈線文が施されている。75は小型壺である。口縁部は外反し、ラッパ状に開く。胴部は球形状を呈する。底部は小さな脚台状となる。胴部中央付近に外面から孔が穿たれてい。76は台付鉢である。杯部はボウル状を呈する。口縁部は大きく外反し、内面に段を有する。器面全体に黒色顔料が塗られ、外面に赤色顔料で盾面文等の文様を描かれている。口縁部内面には、黒色顔料で盾面文を描いている。脚台部上位に 2 条の突帯を貼り付け、その下に方形の透孔を設けていたようである。また、円盤充填の様子も見える。なお、内面には「昭和三十三年六月二十八日 大根古町馬場山ノ口水田ノ地下十尺砂鉄層ヨリ單独出土 同地点地下三尺砂丘層ヨリ圓生式土器 軽石製人形 家形 軽石製曲玉模造品伴出 シダ化石出土」と墨で書かれており、当時の出土状況を窺い知ることができる。

5 A 地点（昭和33年砂鉄探査時）上層出土遺物

A 地点遺物包含層のうち、砂層上層から出土した遺物について詳述する。「山之口 坂」や「山之口坂福」の注記があるものが多い。おそらく「坂」「福」は発見者の坂元貞夫氏、福井久光氏を表していると思われる。

（1）土器（第37～40図）

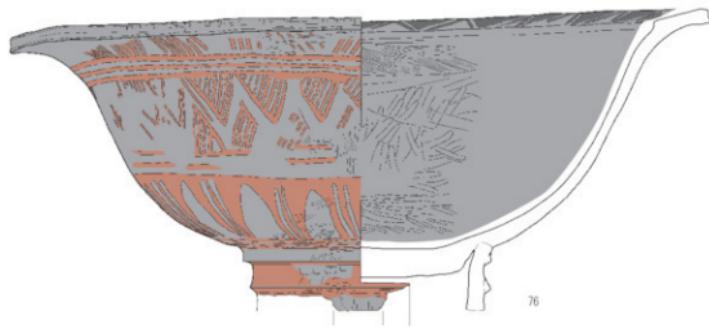
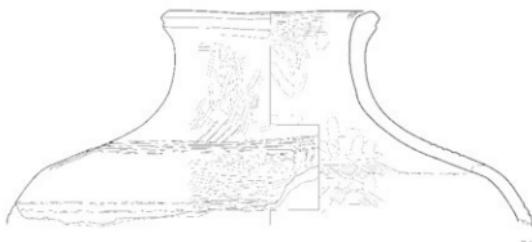
77～81は壺である。77の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆 L 字状を呈する。口縁部下には、3 条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は四線状となる。外面に煤の付着が確認できる。78の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆 L 字状を呈する。口縁部下には、1 条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は四線状となる。外面に煤の付着が確認できる。79の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆 L 字状を呈する。口縁部下には、1 条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。底面はや上げ底を呈する。口唇部及び脚台端部は四線状となる。内・外面に煤の付着が確認できる。80・81は胴部下半～脚台部片である。いずれ

も内面に煤が付着している。81の脚台端部は四線状となるが、80の脚台端部は四線状とならない。

82～88は壺である。82の口縁部は、やや垂れ下がった逆 L 字状を呈する。口唇部は四線状となる。胴部はあまり張らず、卵形に近い形状を呈する。底部は平底である。また、胴下半部には、孔が外側から 2 か所開けられている。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。また、内面には種子圧痕が確認される。83の口縁部は、やや垂れ下がった逆 L 字状を呈する。口唇部は四線状となる。胴部は球形に近い形状を呈する。底部は平底である。また、胴下半部には、孔が外側から開けられている。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。84は口縁端部が欠損している。口縁部は外側へ開く。頭部と胴部の境は明瞭で、胴部は球形に近い形状を呈する。底部は不安定な平底である。胴下半部には、孔が外側から開けられている。おそらく 2 回以上の打撃で穿たれたものと思われる。また、内面に種子圧痕が確認できる。85は広口壺である。口縁部は朝顔形に大きく開く。胴部は偏球状を呈し、胴部中央に 1 条の突帯を巡らす。胴部中央と胴下半部の 2 か所に孔が内側から開けられている。底部は平底である。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。86は口縁部～頭部片である。口縁部は、やや垂れ下がった逆 L 字状を呈し、内面には口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。口唇部は、四線状となる。頭部には、現状 6 条の突帯を巡らしているが、頭部より下部が欠けているため、本来の突帯の条数は不明である。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。87は胴部中位～底部片である。胴部は、球形に近い形状を呈する。底部は平底である。88は無頭壺である。口縁部は斜め上方へ伸びる逆 L 字状を呈する。一部口縁部が剥落しており、擬口縁となっている。胴部は球形に近い形状を呈する。底部は上げ底となっている。胴部中央には孔が外面から穿たれている。

89～91は鉢である。89・90の口縁部は水平方向へ短く伸びる逆 L 字状を呈する。底部は厚く、脚台状になっている。89の脚台端部より 90 の脚台端部のほうが外側へ張り出す。90は外面に煤が付着している。91は小型の鉢である。器形はコップ状を呈する。口縁部は逆 L 字状を呈し、水平方向に延びる。底部は厚く、脚台状を呈する。外面に煤が付着している。

92・93は台付鉢である。口縁部は斜め上方へ伸びる逆 L 字状を呈する。口縁部下に 3 条、脚台部上位に 1 条の突帯を巡らす。脚端部にも 1 条の突帯を巡らし、その上に連続したハの字状の沈線を施す。円盤充填技法も確認できる。口縁部下の 3 条の突帯の下に外面から孔が穿たれている。93は脚台部片である。脚台部上位と脚端部にそれぞれ 1 条の突帯を巡らす。脚台部内面は黒色処理が施されている。94は小型の台付鉢である。口縁部は水平



0 (1:3) 10cm

第36図 A地点下層出土土器実測図

方向へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下に2条の突帯を巡らす。

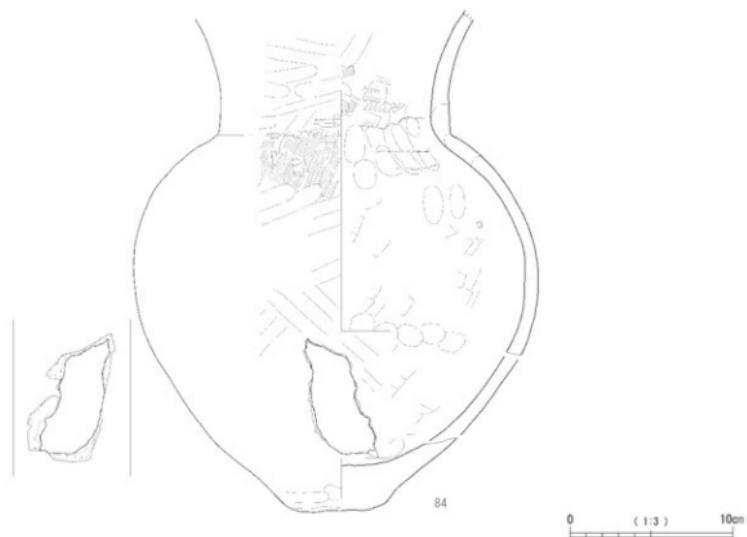
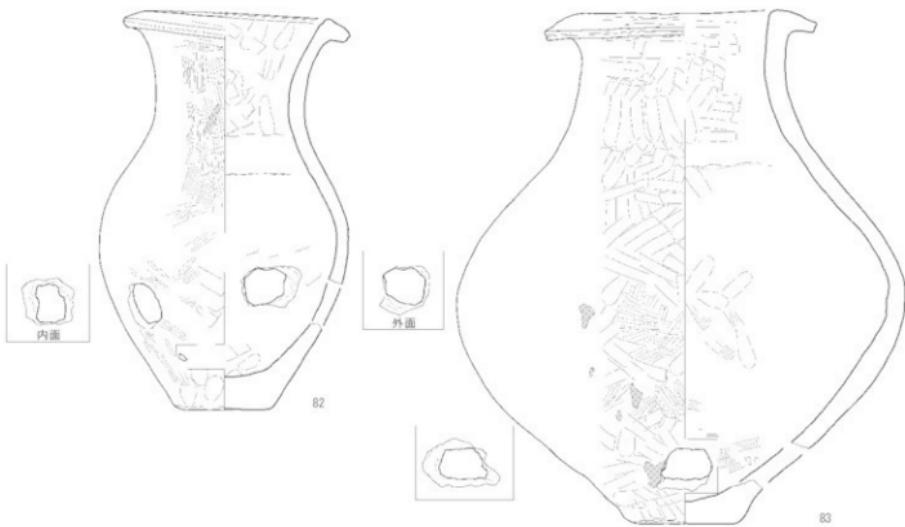
95は高杯の脚部である。脚柱部が長く、脚柱部と脚板部の境に1条の突帯を貼り付けている。外面は剥落が激しいが、わずかながら縱方向のミガキ調整が確認できる。

96はジョッキ形土器である。口縁部から胴下部にかけて把手がつく。外面及び口縁部内面に赤色顔料が塗布さ

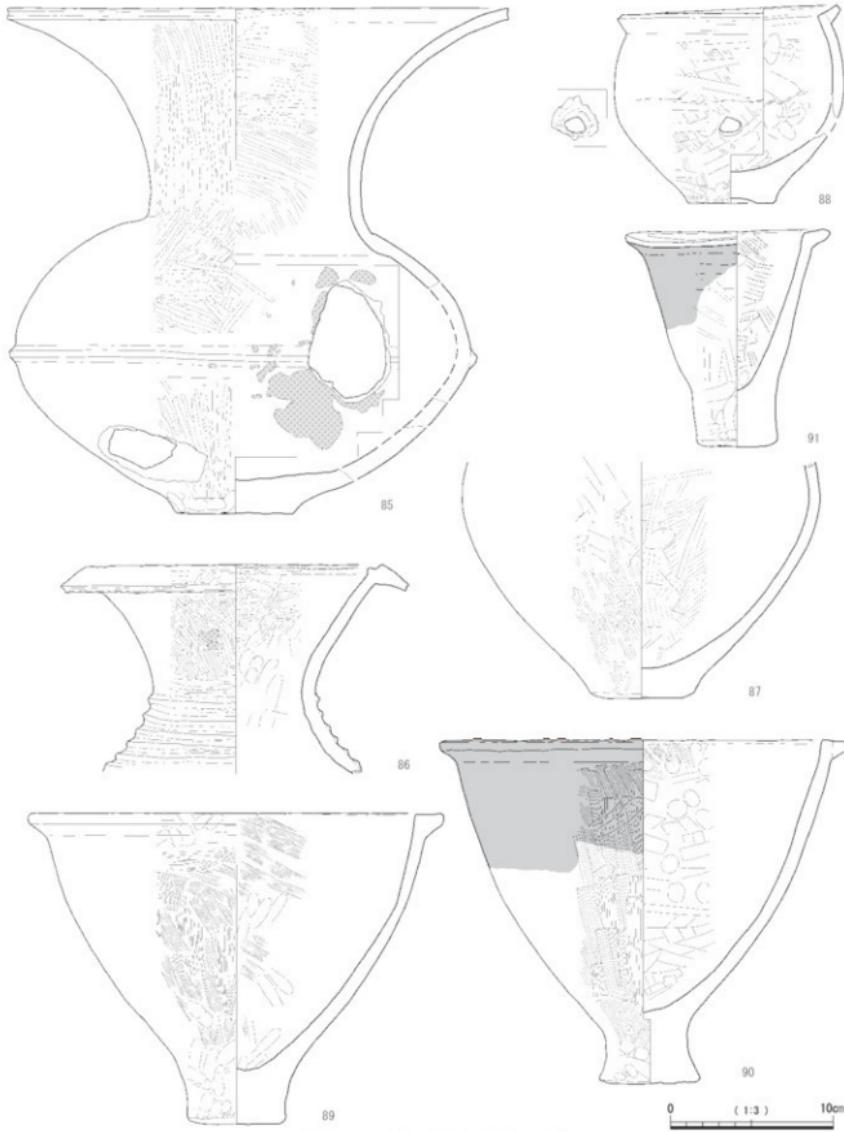
れている。旧報告では「下方より1/4の箇所に小孔をあく」と記述され、実測図にも表現されているが、現在そのような小孔は確認できなかった。石膏を用いて復元がなされているため、小孔部分が埋められてしまった可能性がある。



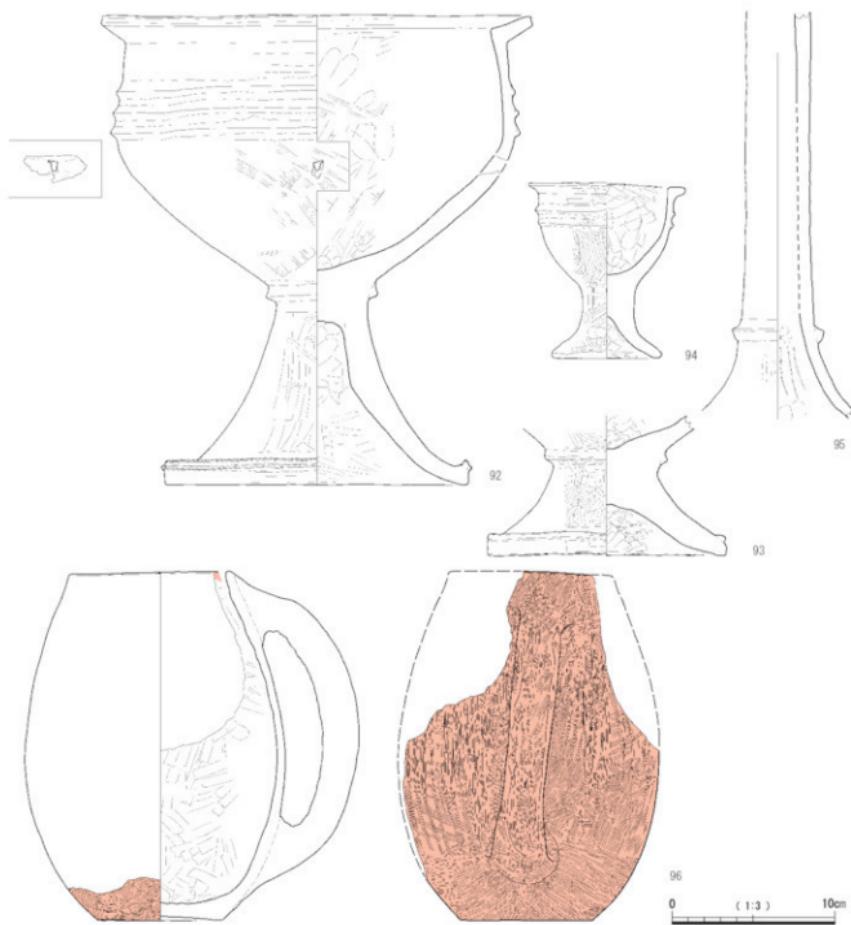
第37図 A地点上層出土土器実測図①



第38図 A地点上層出土土器実測図②



第39図 A地点上層出土土器実測図③



第40図 A地点上層出土土器実測図④

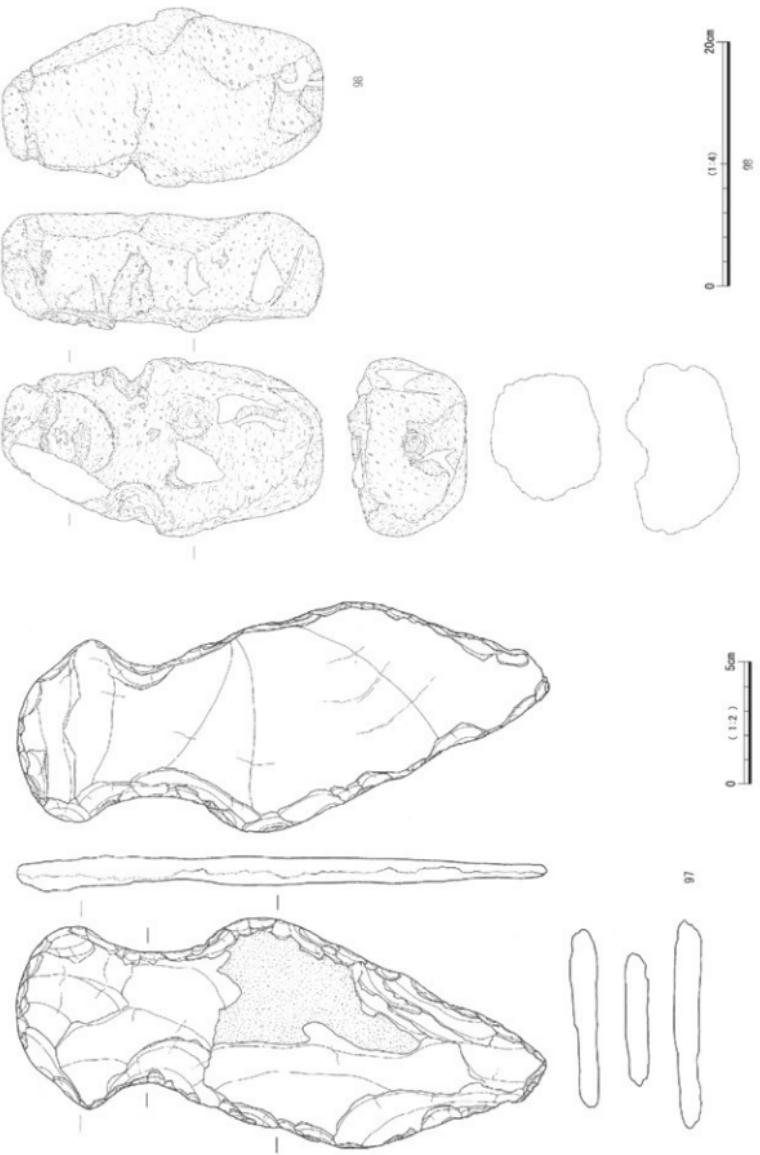
(2) 石器・石製品 (第41~43図)

97は頁岩製の打製土器である。基部は両側から抉りを入れて造り出している。先端は細く仕上げている。全体的に磨滅による光沢がある。装着の時のズレにより生じた可能性がある。

98~102は軽石製品である。98は女性を表した岩偶である。顔部分を一段高く掘り出し、目と口は凹め、鼻を隆起させ、顔を表現している。また、顔部分の側面に

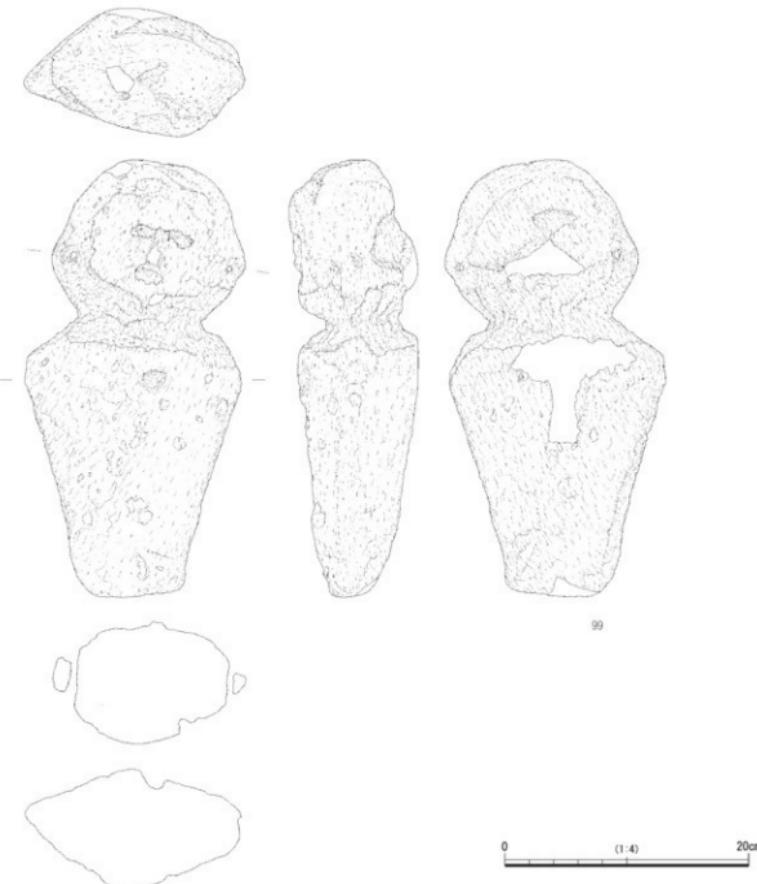
刻みを入れることで髪を表現している。中央付近には、両側面から抉りが入れられ、顔と胴体が明確に区分されている。胴体中央には乳房を表現した突起が2か所確認される。下面には直径2cm、深さ4cmの穴が穿たれている。手足の表現は省略されている。99は男性を表した岩偶であろうか。98と同様、顔面は一段高く掘り出され、目と口は凹め、鼻を隆起させ、顔を表現している。両耳部分には孔が穿たれている。おそらく、耳飾りを表現し

第41図 A地点上層出土石器・石製品実測図①



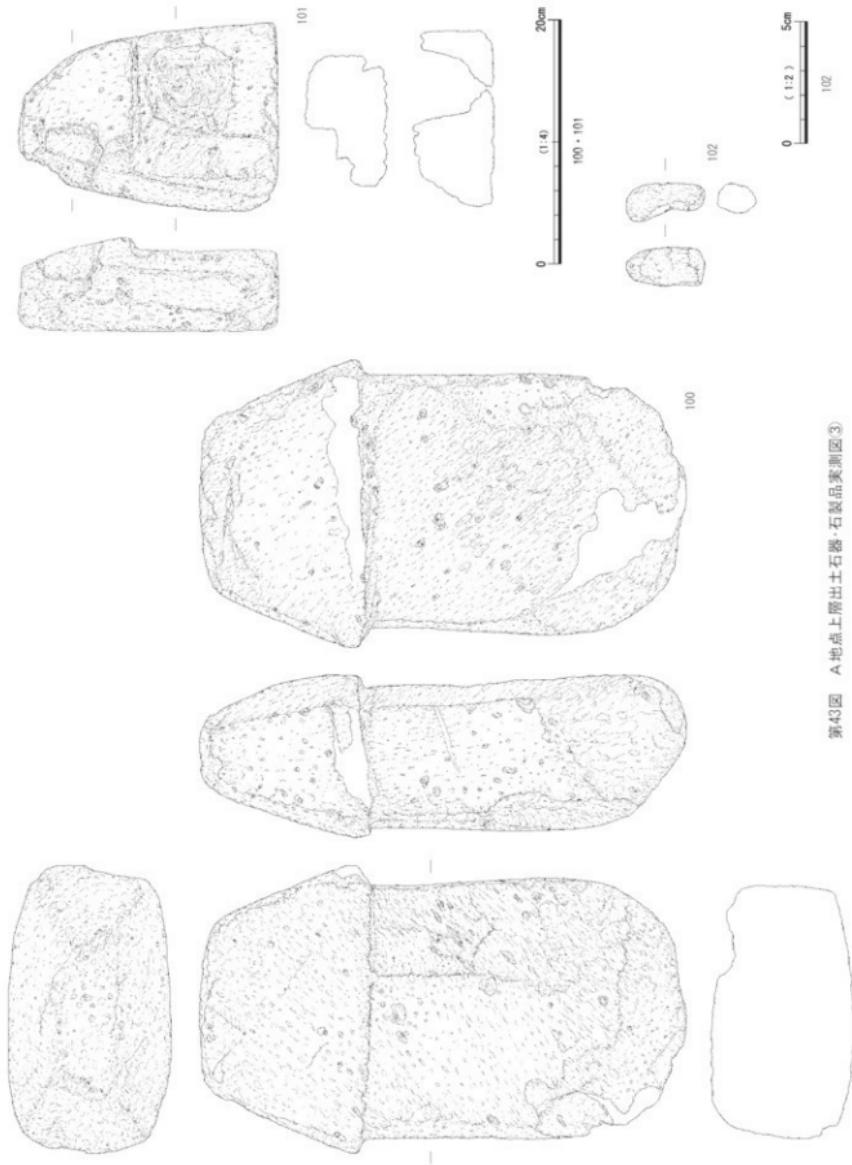
ているのであろう。胴体の形態は断面が菱形を呈し、下方へいくにつれ次第に窄まる。胴体中央部分に、直径2cm、深さ1.5cmの穴が穿たれている。手足の表現は省略されている。100は、旧報告で石棒とされていたが、後に河口氏が軽石製家と訂正している（河口2005）ものである。家形とした場合、庇や窓と思われる表現がなされている。屋根は寄棟である。下端部の整形は粗いため、地中に埋めて使用した可能性が考えられる。101は家形の軽石製品である。線刻や穴により、庇や窓と思われる

表現がなされている。線刻は非常にシャープな加工である。102は勾玉状を呈する。孔は穿たれていない。下半部は欠損している。第1次調査の旧報告で写真が掲載されているが、A地点のものかB地点のものか判然としなかった。



第42図 A地点上層出土石器・石製品実測図②

第43圖 A地點上層出土石器·石製品實測圖3



6 A' 地点（昭和33年砂鉄試掘時）出土遺物

B地点の南西に隣接した地点で試掘が行われた際出土した土器である。第44図103は高杯である。口縁部は大きく外反する。杯部中央には1条の突帯を巡らす。また、杯部内面には把手状の粘土紐が貼り付けられている。脚柱部は円柱状で、脚裾部はラッパ状に開く。外面及び杯部内面に赤色顔料が塗布されている。旧報告では、土器が4点出土したあるが、103以外の残り3点の土器について詳しく述べてある。

7 昭和36年5月砂鉄採掘地点出土遺物

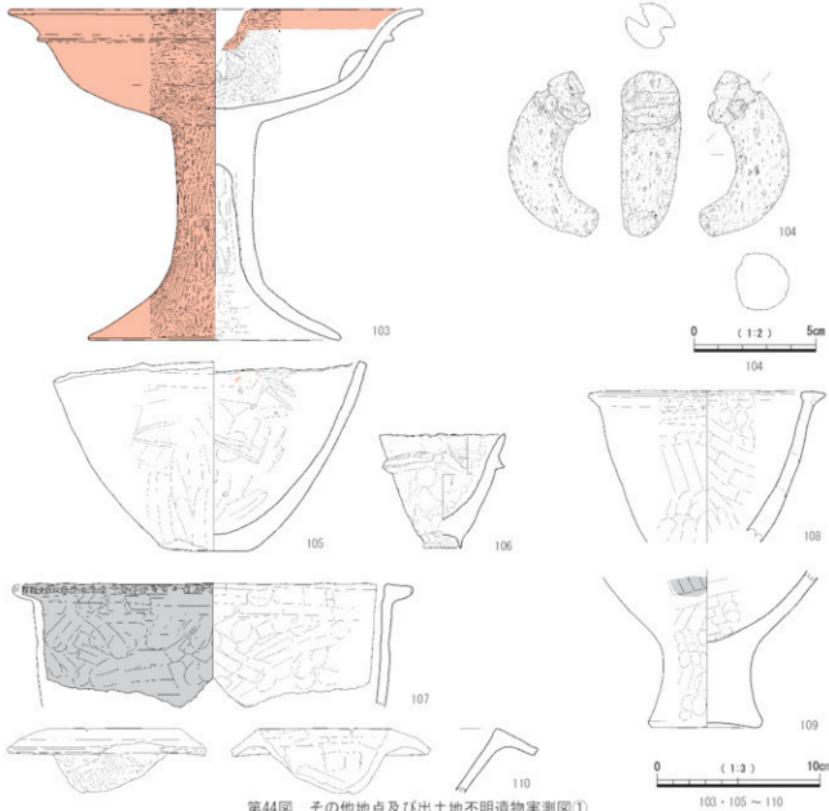
第44図104は昭和36年のメモ帳に「砂鉄採掘地点ヨリ出土」とある軽石製勾玉である。丁字頭で両側から穴が穿たれるが貫通しない。穴の周囲に線刻を巡らす。

8 山ノ口遺跡東水田表探遺物

「山ノ口、東、水田入口共伴」と注記された遺物である。第44図105は鉢である。やや不安定な平底の底部から、外側へ直線的に開く。口縁部内面に赤色顔料が、内外面の器面に多数の種子圧痕が確認された。第44図106はミニチュア土器である。壺形で口縁部下に1条の突帯を巡らす。底部は脚台状を呈する。

9 出土地点不明の遺物

注記より本遺跡から出土したことは分かるが、どの地点から出土したか判然としない遺物をまとめた。



第44図 その他地点及び出土地不明遺物実測図①

(1) 土器 (第44図107~110)

107~109は壺である。107は口縁部に刻目突帯文を有する。外面に煤が付着する。108は小型の壺である。口縁部は水平方向へ短く伸びる逆L字状を呈する。109は壺の底部片である。充実脚台である。外面に煤が付着する。110は壺の口縁部片である。口縁部はやや垂れ下がり逆L字状を呈する。口唇部は凹線状となる。

(2) 石製品 (第45図)

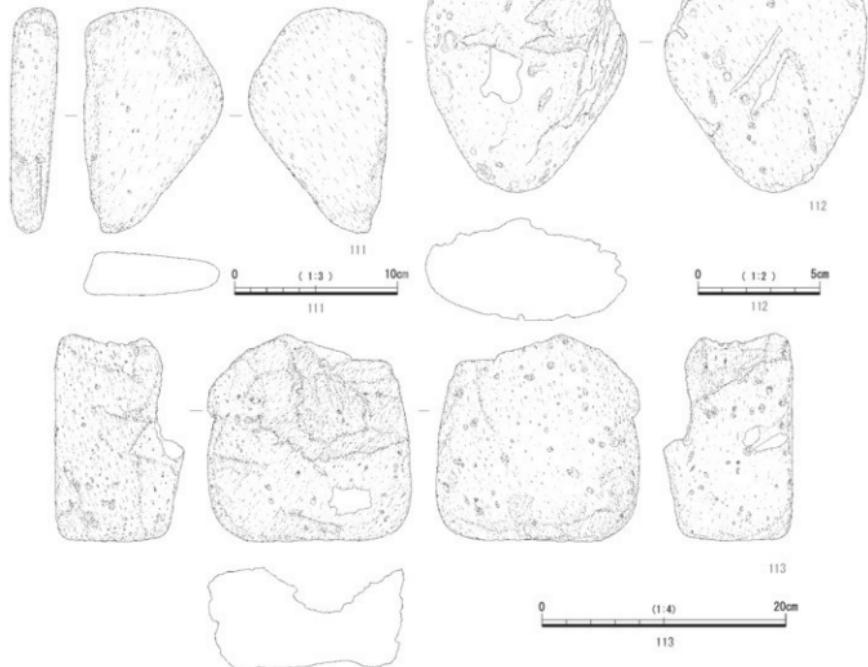
111~113は軽石製品である。111はほぼ全面研磨されている。112は溝状の凹みが確認される。113は上方から方形の穴を穿っている。

10 その他の遺物

注記等がないが、器形や胎土、石材等から本遺跡出土の可能性が高いものをまとめた。

(1) 土器 (第46図114~117)

114・115は壺である。114の口縁部は、斜め上方へ短く伸びる逆L字状を呈する。口縁部下に、3条の突帯を巡らす。充実脚台である。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。内外面とも煤が付着する。115はやや小型の壺



第45図 その他地点及び出土地不明遺物実測図②

である。口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。内面に煤が付着する。

116・117は壺である。116は広口壺の口縁部である。口唇部は四線状となり、一部暗紫ゴラが付着する。117は頸部～底部片である。胴部は偏球状を呈し、胴部中央に1条の突帯を巡らす。底部は平底である。

(2) 石器 (第46図118)

118は岩製の剥片である。両側縁に二次加工が施されるが、その意図は不明である。

【註釈】

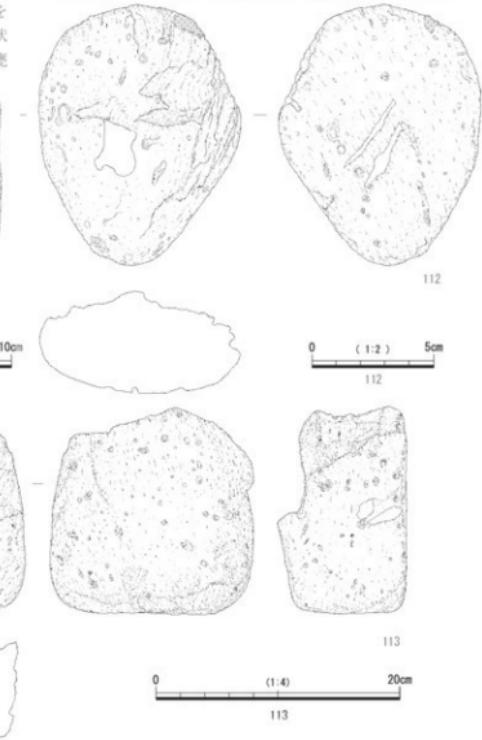
1 寒川朋枝氏のご教示による。

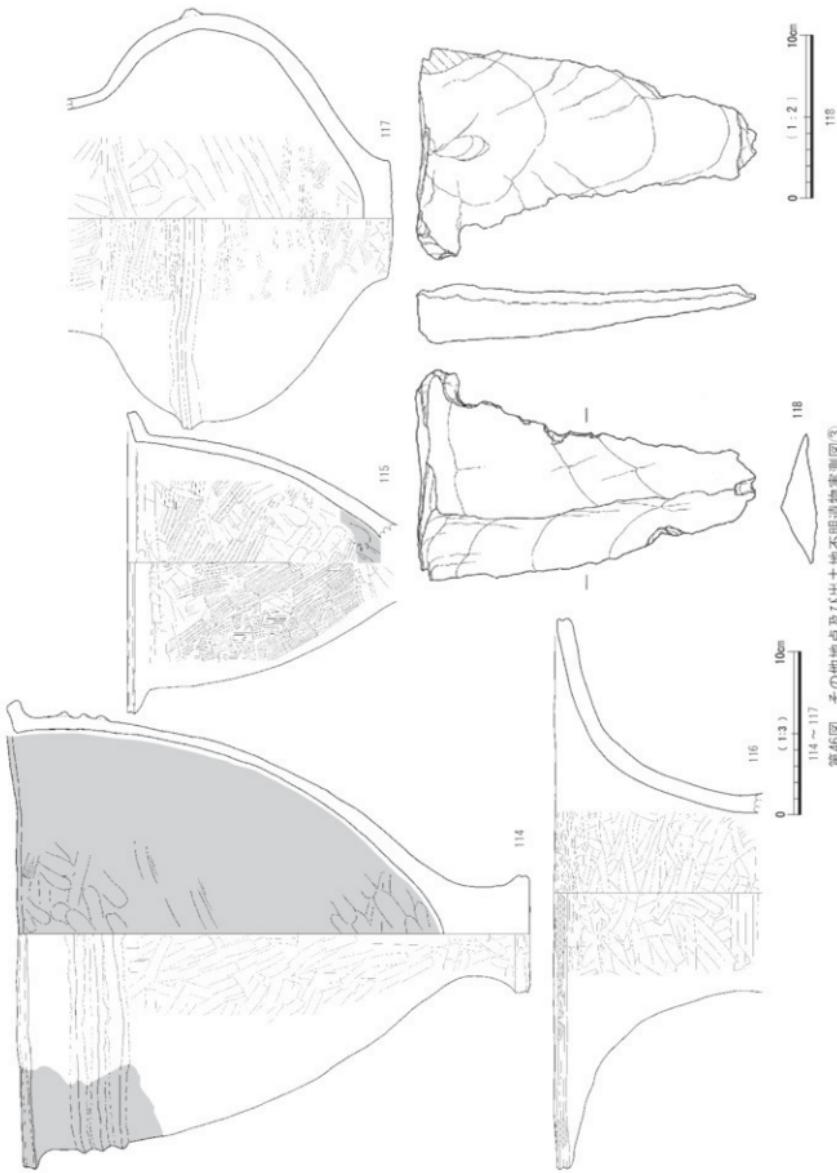
2 長野寅一氏のご教示による。

【引用・参考文献】

河口貞徳 1978 「弥生時代の祭祀遺跡 大隅半島山ノ口遺跡」
「えとすの」第10号

河口貞徳 2005 「山ノ口遺跡」「先史・古代の鹿児島 資料編」





第46図 その他地点及び出土地不明遺物実測図③

山ノ口遺跡出土土器観察表①

第6表 山ノ口遺跡出土土器観察表(2)

第7表 山ノ口遺跡出土土器観察表(3)

第8表 山ノ口遺跡出土土器観察表④

第9表 山ノ口遺跡出土石器・石製品計測表①

序号 番号	出土地点	位置 標記	種類 名	石材	法線(垂直は名、重量以外はcm)			直角合板規格番号	河口部 所面番号	測定 番号	備考		
					最大高	前大厚	重さ						
15	B1地点	1.6~ Ⅲ 1区	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	(6.1) (26)	0.05	4.75	河口1960	7-7	12-C	A10206	[赤井村代No.7 山ノ口16区 Ⅲ 1区]	
16	B1地点	1.6~ Ⅲ 1区	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	(5.3) (27)	0.38	4.37	河口1960	7-6	12-C	A10206	[赤井村代No.6 山ノ口16区 Ⅲ 1区]	
17	B1地点	1.6~ Ⅲ 1区	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	(5.15) (265)	0.13	3.92	河口1960	7-9	12-C	A10206	[赤井村代No.9 山ノ口16区 Ⅲ 1区]	
18	B1地点	1.6~ Ⅲ 1区	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	(4.1) (30)	0.03	5.24	河口1960	12-C	A10206	[赤井村代No.1土郎山] [1.6区 Ⅲ 1区]		
19	B1地点	Ⅳ 4区	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	(4.55) (24)	0.3	2.82	河口1960	7-8	12-C	A10206	[赤井村代No.8 山ノ口4区]	
20	B1地点	Ⅳ 4区	砂漠岩 等級石頭	頁岩	(6.1) (325)	0.35	7.31	河口1960	7-3	12-B	A10206	[山ノ口4区]	
21	B1地点	Ⅳ 4区	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	(5.25) (23)	0.14	4.35	河口1960	7-5	12-B	A10206	[赤井村代No.5 山ノ口4区]	
22	B1地点	Ⅳ 4区	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	(4.7) (265)	0.38	3.86	河口1960	7-2	12-B	A10206	[赤井村代No.3 山ノ口4区]	
23	B1地点	Ⅳ 4区	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	(4.55) (235)	0.33	3.30	河口1960	7-4	12-B	A10206	[山ノ口4区]	
24	B1地点	Ⅳ 4区	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	(3.0) (1.75)	0.27	1.35	河口1960	7-1	12-B	A10206	[山ノ口4区 砂漠岩等級石頭 番号代No.1]	
25	B1地点	Ⅳ 4区	砂漠岩 等級石頭	頁岩	(4.1) (255)	0.25	2.50	-	-	-	A10206	[山ノ口4区 砂漠岩等級石頭 番号代No.2]	
26	B1地点	1.10K	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	4.6 (25)	1.45	2.83	河口1960	7-B	11-D	A10206	[山ノ口1区 砂漠岩等級石頭 番号代No.59]	
27	B1地点	Ⅳ 4区	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	6.05 (26)	1.19	5.06	河口1960	7-C	11-D	A10206	[山ノ口4区 砂漠岩等級石頭 番号代No.56]	
28	B1地点	1.8区	砂漠岩 等級石頭	粘板岩	6.05 (26)	1.05	5.78	河口1960	7-A	11-D	A10206	[山ノ口1区 砂漠岩等級石頭 番号代No.58]	
29	B1地点	Ⅲ 1区	不明	粘板岩品	粘板岩	3.4	2.2	1.05	2.25	-	-	A10306	[未完 山ノ口1区 砂漠岩等級石頭 番号代No.66]
30	B1地点	Ⅲ 2区	不明	粘板岩品	粘板岩	14.8 (90)	6.4	1.57	-	-	-	A10306	[山ノ口2区 砂漠岩等級石頭 番号代No.67]
31	B1地点	Ⅲ 3区	不明	粘板岩品	粘板岩	25.3 (130)	1.58	5.22	-	-	-	A10306	[山ノ口3区 砂漠岩等級石頭 番号代No.68]
32	B1地点	Ⅲ 4区	不明	粘板岩品	粘板岩	16.7 (15.05)	4.7	3.11	-	-	-	A11706	[山ノ口4区 砂漠岩等級石頭 番号代No.72]
33	B1地点	Ⅲ 4区	不明	粘板岩品	粘板岩	17.15 (11.8)	4.88	4.02	-	-	-	A11706	[山ノ口4区 砂漠岩等級石頭 番号代No.73]
34	B1地点	Ⅲ 4区	不明	粘板岩品	粘板岩	18.6 (11.0)	5.75	2.22	-	-	-	A11706	[山ノ口4区 砂漠岩等級石頭 番号代No.74]
35	B1地点	Ⅲ 2区	不明	粘板岩品	粘板岩	10.0 (8.5)	1.11	-	-	-	-	A11706	[山ノ口2区 砂漠岩等級石頭 番号代No.75]
36	B1地点	Ⅱ 2区	不明	粘板岩品	粘板岩	17.65 (12.6)	1.05	6.28	-	-	-	A11706	[山ノ口2区 砂漠岩等級石頭 番号代No.79]
37	B1地点	Ⅱ 2区	不明	粘板岩品	粘板岩	21.05 (15.1)	1.71	5.63	-	-	-	A11706	[山ノ口2区 砂漠岩等級石頭 番号代No.73]
38	B1地点	Ⅱ 4区	不明	粘板岩品	粘板岩	11.7 (7.7)	2.05	6.35	-	-	-	A11706	[山ノ口4区 砂漠岩等級石頭 番号代No.78]
39	B1地点	Ⅱ 3区	不明	粘板岩品	粘板岩	13.1 (10.1)	4.25	1.13	-	-	-	A11706	[山ノ口3区 砂漠岩等級石頭 番号代No.76]
48	C地点	Ⅲ 8区	不明	粘板岩品	粘板岩	(5.55) (285)	0.33	4.69	-	-	-	A10206	[山ノ口8区 砂漠岩等級石頭 番号代No.54]
49	C地点	Ⅲ 9区?	不明	粘板岩品	粘板岩	29 (19)	0.27	1.31	-	-	-	A10206	[山ノ口9区 砂漠岩等級石頭 番号代No.53]

第10表 山ノ口遺跡出土石器・石製品計測表(2)

探査番号	測量番号	出土地点	トレンチ番号	測量名	石種	石片	法線(垂直は0、垂直以外は45°)			直角合板番号	河口図所番号	測定番号	注釈等
							幅大さ	幅大厚	重量				
29	50	C地点	Ⅲ 9区	不明	軽石製品	軽石	34.8	24.15	19.0	3322	河11958	-	25
30	51	C地点	Ⅲ 6区	不明	軽石製品	軽石	58.5	3.35	2.5	7.23	-	-	-
31	52	C地点	Ⅲ 8区	不明	軽石製品	軽石	81	29.5	29	17	-	-	-
33	62	D地点	-	不明	軽石製品	軽石	15.4	10.2	6.9	228	-	-	-
63	63	D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	8.7	4.7	2.6	20	-	-	-
64	64	D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	8.7	4.8	2.6	22	-	-	-
74	65	D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	9.6	5.2	2.5	36	-	-	-
66	66	D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	(25.4)	(27.5)	12.5	1470	-	-	-
67	67	D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	12.4	9.5	3.1	128	-	-	-
68	68	D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	30.5	17.3	9.5	994	-	-	-
69	69	D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	27.8	14.5	10.4	1224	-	-	-
70	70	D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	(30.5)	(9.6)	8.6	582	-	-	-
71	71	D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	10.8	11.5	6.0	164	-	-	-
72	72	D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	4.0	4.2	3.0	14	-	-	-
41	97	A地点	-	不明	打削上端刃	骨質	21.65	9.25	1.5	2755	河11960	-	12-A
41	98	A地点	-	不明	軽石製品	軽石	26.4	14.65	9.75	7325	河11960	-	11-A
42	99	A地点	-	不明	軽石製品	軽石	35.8	17.8	10.6	1144	河11960	-	11-B
100	100	A地点	-	不明	軽石製品	軽石	30.9	23.7	13.4	3148	-	-	-
43	101	A地点	-	不明	軽石製品	軽石	21.35	15.4	7.65	872	河11965	8	テラピア
102	102	A地点	-	不明	軽石製品	軽石	3.25	1.6	1.6	157	河11960	-	11-D
44	104	S6砂浜	-	不明	軽石製品	軽石	6.75	3.75	2.55	11.3	-	-	-
111	111	-	-	不明	軽石製品	軽石	13.8	8.5	2.96	745	-	-	-
45	112	-	-	不明	軽石製品	軽石	10.7	8.35	4.7	87	-	-	-
113	113	-	-	不明	軽石製品	軽石	17.0	16.7	10.55	906	-	-	-
46	118	-	-	不明	剥片	骨質	13.85	8.5	2.4	1518	-	-	-

第Ⅳ章 山ノ口遺跡の再評価

第1節 山ノ口遺跡に関する研究史

遺跡や検出された遺構の性格については、報告者である河口貞徳氏をはじめ複数の研究者から複数の見解が示されている。本節では、これらの研究について概観していきたい。

1 農耕祭祀説

河口氏は、第1次調査の報告で、遺構の性質に関係のある事項として以下の6点を挙げている。「1. 遺跡の位置が大根古の沖積低地の水田地帯及び、その西側に細長く伸びる集落帯の南端で山地が海岸にせまり、平地がせまくなっている所である。2. 遺構の構造が環状配石の内部には、なにもなく、その外部に土器等の遺物が配置され、またこれらを取りまいて、焚火の跡をとどめていることである。3. 遺物出土層は新鮮な砂層で、生活址らしい有機物の堆積がみられない。4. 土器のうち壺形土器のみは、全て故意に孔をあけてある。5. 遺構成立後、相当長期にわたって時日を経過しているにもかかわらず、遺構があらざれずに保存されていたのは、立ち入ってはならない様な制約があったものと思われる。6. 軽石製の曲玉、軽石礫に刻目や穴を設けたもの等を配置している。」そして、これらを総合的に考え、「遺構は農耕儀礼などの祭事が行われた場所で、当時の砂浜上に集落の共同の祭祀が行われた遺跡ではないか」と結論づけている（河口1960）。また、第1次調査の報告が翌年にみなされているが、河口氏はこの報告の中で遺構の性質に関係のある事項として上記6点を挙げ、さらに類例を加え、遺構の性格について検討した。まず、「壺形土器に孔を穿った一例として、指宿市山川の成川遺跡弥生時代の墓葬を挙げ、「壺形土器に孔をあけたものが祭祀に関係があることは一般考えられているところである。」としている。また、人為的に埋設された土器が数個まとまって発見された例として群馬県上野保弥生時代遺跡を挙げ、報告者が遺跡の性格について祭祀遺跡として思考したいとしていることを付記している。これらから遺構の性格について「弥生時代集落の共同の祭祀が行われた遺構」としており、「農耕儀礼などの祭事」と具体化していないことが違いて挙げられる（河口1961）。しかし、河口氏が第2・3次調査の報告を行った際は、遺跡の性格についてはやはり「農耕に関する祭祀の行われた遺跡ではないか」としている（河口1962）。

その後も、河口氏は山ノ口遺跡を紹介する中で、遺跡や遺構の性格について触れている。1970年代以降の河口氏の研究では、縄文時代後晩期に南九州において発展した性器信仰が農耕文化と結びついて、山ノ口遺跡における祭祀になったことを新たに指摘している（河口1978・1988）。この点に加え、山ノ口遺跡や検出された遺構の

性格を「農耕儀礼などの祭事」と限定せず、「共同祭祀のあと」という表現にとどめている（河口1978・1988・2005など）ことが注目される。ただし、河口氏が意識的に「共同祭祀のあと」という表現にとどめているかどうかは定かではない。

金闇惣氏は、「魏書」東夷伝の農耕祭祀の記事にある鬼神（祖靈神）を祀る祭場「蘇塗」の中心に置かれていた祖靈像にあたるものとして山ノ口遺跡出土の男女一対の軽石製品を一例として挙げている（金闇1986）。つまり、金闇氏は河口氏同様、山ノ口遺跡を農耕祭祀が行われた遺跡として、位置付けているといえよう。

2 墓地説

このように「農耕祭祀」「祭祀遺跡」としての評価がなされてきた山ノ口遺跡だが、遺跡の性格を「墓地」と考える研究者もいる。中園聰氏は、環状配石に立石相伴うことや壺の胸部に焼成前穿孔を施したものが目立つ点から、西日本各地の墓地との類似性を指摘している。そして、環状配石を円形周溝墓と考え、環状配石を構成する軽石やその周囲で出土した土器を周溝の中に落ち込んだものとした。環状配石の中心にあったであろう墓壙は、砂地に掘り込まれた遺構であるため、当時の発掘技術等から検出されなかったことは無理からぬこととした。また、同時期の円形周溝墓が検出された志布志市松山町京ノ峯遺跡や立石を伴う墓地の可能性が高い成川遺跡、枕崎市松ノ尾遺跡を類例として挙げた（中園2004b）。

長野眞一氏は、蘇塗に関わる鳥作や木彫像は、村や寺院の入り口に祭られたとされることを山ノ口遺跡の出土状況から充分に説明できているとは思えないとして、農耕祭祀説を否定した。一方、墓地の可能性を裏付けるものとして、配石遺構とそれと伴う立石の存在、規則的な土器の設置や穿孔慣習、磨製石鎌の理納、軽石製岩偶や石棒、陰石等の配置、送り火とみられる焚火跡の存在等を挙げている。また、穿孔事例として成川遺跡や松ノ尾遺跡のほか、薩摩川内市下郷町の大原宮園遺跡、指宿市南摺ヶ浜遺跡、南さつま市金峰町中津野遺跡を挙げ、当時の普遍化した葬送儀礼とした。さらに墳墓祭祀遺跡とされる大分県大分市浜遺跡を類例として挙げたうえで、山ノ口遺跡を「集團墓地」「立石墓」とした（長野2017）。

このように近年、山ノ口遺跡を墓地と指摘する意見もあるが、本田道輝氏のように当時作成された地層図からその可能性は低いとする研究者もあり（本田2015）、未だ定説をみていないといえよう。

第2節 山ノ口式土器の研究史（第11表）

山ノ口遺跡は、南九州を代表する弥生時代中期後半の土器型式の標式遺跡としても著名である。そこで、本節では、型式設定から今日までの山ノ口式土器を巡る研究動向について、山ノ口遺跡の調査・報告者である河口貞徳氏を中心に研究が進んだ段階（1960年～1981年）とそれ以降の段階（1982年以降）に大別してみていき、現段階の位置づけについて整理していくこととする。

1 1960年～1981年の研究

山ノ口式土器は、山ノ口遺跡第1次調査の報告の中で初めて型式設定された。調査・報告した河口氏は、A地点（砂鉄採掘地点）、B地点（第1次調査地点）出土の土器を二つの型式に分け、A地点下層の土器を山ノ口式、A地点上層及びB地点の土器を山ノ口二式とし、北部九州の土器との比較から、前者を弥生前期の終わりごろ、後者を弥生中期に位置付けている（河口1960・1964）。第2次調査（C地点）では、B地点の土器と同一型式の土器と城ノ越IV式（須玖式）との併用関係がみえたことで、弥生時代中期後半と時期幅を狭めている（河口1962）。また、同年に刊行された「弥生式土器集成」の中で、南九州（鹿児島県域）の弥生土器について第I～第Vの5様式に大別し、編年を提示した河口氏は、「第IV様式の土器のうち、山ノ口遺跡から出土したものと山ノ口式土器と呼ぶことにしたい」とし、改めて型式設定を行っている（河口1968）。ここで提示された山ノ口式土器とは、第1次調査の報告で河口氏が山ノ口二式とした土器である。この段階で初めて山ノ口二式のみが山ノ口式土器として再設定されたといえる。しかしながら、第2次調査で併用関係がみえたとしていた山ノ口遺跡出土の須玖式土器を第III様式に位置付けるなどの矛盾点も生じている。

河口氏以外の研究者からも九州の弥生文化を説明する中で一部検討が行われている。森貢次郎氏は、山ノ口式土器を後期前半として位置付け、「主として大隅・薩摩に分布するきわめて特徴的な土器様式」としている（森1966）。河口氏が山ノ口式土器を中期後半に位置付けたのに対し、森氏が後期前半に位置付けた点が大きな相違点である。鏡山猛・乙益重隆両氏は、山ノ口式土器を中期後半の所産とながら、「南部九州における後期の土器は、山ノ口式（第3様式）の期間が長くつづき、次の一つの宮式（第4様式）は短期間に終った」とする森氏の説を一部肯定するような記述を行っている点が注目される（鏡山・乙益1969）。

その後河口・出口浩両氏は、従来の編年の空白を埋める新たな資料が追加されたことにより、改めて南九州の弥生土器編年を再検討し、入来式土器の設定などを行っている（河口・出口1972）。この論文で山ノ口式土器のことにも触れ、「弥生式土器集成」編年の問題点として、

「他地方との関連において重点をおいて編年したために無理があった」とし、「山ノ口式土器と須玖式土器の同時性」や「山ノ口式は中期後半に位置するもの」と改めて位置づけを行っている。さらに河口氏は、更なる追加資料を加え、南九州の弥生土器を第I～Ⅴ様式に分けた。第I・Ⅱ様式が前期とされ、それぞれ高橋I式土器・高橋II式土器と呼ばれる。第Ⅲ～Ⅴ様式は中期とされ、それぞれ入来式土器、吉ヶ崎式土器、山ノ口式土器と呼ばれる。第VI～Ⅸ様式は後期とされ、それぞれ松木蘭I式土器、松木蘭II式土器、中津野式土器と呼ばれる（河口1981）。山ノ口式土器自体には大きな変更はないが、山ノ口式土器の前の後の型式が整理されるなど、南九州の弥生土器編年の全容が初めてビジュアル的に示された点で大きな画期といえよう。

2 1982年以降の研究

1981年にいわゆる「河口編年」と呼ばれる南九州の弥生土器編年が完成して以降、河口氏以外の研究者による南九州の弥生土器の検討が活発となった。その中で、山ノ口式土器に関する重要な指摘についていくつかみていみたい。

（1）山ノ口式土器と他地域の土器との併行関係について

河口氏の中期後半説と森氏の後期前半説に対して、1990年代にクロスデーターティングによる検証が行われた。中園聰氏は共伴関係から、山ノ口式（新）＝須玖II式（新）＝黒髮II式（新）＝中溝式＝瀬戸内第IV様式という併行関係を提示した（中園1993・1996）。また、中園氏は、山ノ口式土器自体も古段階と新段階に細分した。古段階は、鹿屋市串良町吉ヶ崎遺跡の焼失住居から出土したもので、吉ヶ崎式と呼ばれたり入来II式として括されてきたりしたものである。この吉ヶ崎タイプが典型的な山ノ口式土器の分布範囲に一致することや、形態的に非常に類似し、その直前に位置付けられることが確實視されていることから、山ノ口式土器の古段階と位置付けられたものである（中園1996）。後に山ノ口式古段階・新段階は、山ノ口I式・山ノ口II式として再設定された（中園1997）。つまり現在、南九州の弥生土器編年として最も用いられている「中園編年」では、山ノ口遺跡から出土した一括資料を山ノ口式土器の新段階として、山ノ口II式と再設定されたことに注意されたい。また、共伴関係の新資料が追加される中で、クロスデーターティングや様式論に基づく土器の動態に関する研究が今まで盛んに行われている（中園2004・西谷2002・河野2013・平2015など）。このような研究の結果、北部九州から「周辺」地域への「伝播」をその主たる説明概念として用いていた山ノ口式後期前半説が否定され、山ノ口式土器が中期後半の土器型式として広く認知されるようになった。

(2) 山ノ口式土器の分布域について

従来、南九州全域に分布すると考えられていた山ノ口式土器だが、本田道輝氏や中園氏により、再検討が行われた。本田氏は後期に位置付けられる松木蘭I・II式土器の祖型が山ノ口式土器ではなく、「松木蘭O式土器」と仮称する肥後系の土器群であるとし、中期中糞頃から地城を異にする異なる系統の土器が存在した可能性を示唆している（本田1984）。この説は後に中園聰氏によって補強されている。中園氏は、薩摩半島西部が山ノ口式土器の分布の空白地域であり、かつ黒髮式（松木蘭O式）土器の濃密な地域であることを根据に、「南部九州では地域を異にした山ノ口式と黒髮式という2つの系統の土器群が存在していたとみられる」（第47回）としている（中園1997）。

(3) その他の注目される研究について

河口氏は、1990～2000年代に山ノ口遺跡出土の土器に開聞岳の第二次爆発による暗紫ゴラが付着している資料が多いことに着目し、山ノ口式土器型式の再検討を行っている（河口1993・1995・2002）。

このほか、近年大規模な開発事業に伴う発掘調査により蓄積された資料をもとに小地城編年を行った内村憲和氏の研究が注目される（内村2015）。

第3節 山ノ口遺跡の現代的評価

第Ⅲ章で現場画面や出土遺物等の追加資料の図化及びこれまで報告してきた遺物の再実測を行った。これら踏まえたうえで、山ノ口遺跡の現代的評価を行う。

1 検出された遺構について

これまで、山ノ口遺跡で検出された「環状配石」や「軽石集積地」の状況は、全体図の中で模式的に示されていたほか、B地点（第1次調査）やC地点（第2次調査）で検出された環状配石の個別遺構図が報告されていたが、これら以外の「環状配石」や「軽石集積地」は文章記述が中心であり、具体的な状況については不明瞭であった。

今回、C地点やD地点の新たな追加資料を掲載したことにより、遺構の検出状況や出土遺物との関連性がよりつかめるようになった。加えて他遺跡との比較も以前に比べ、具体的に検討できるようになったといえよう。一方、遺跡・遺構の性格を墓地とする説を検証するためには必要となる墓塚や周溝の有無についての記録は残されておらず、写真からの検証も困難であった。現代の調査と比較して、かけられる時間や予算が限られていること、検出状況から類推される遺跡・遺構の性格についての問題意識、類例の少なさなどが要因となり、検査材料が少ないことは否定できない。しかし、限られた中で少しでも記録を残そうとした河口氏をはじめとする発掘担当者の熱意が、今日でも山ノ口遺跡が南九州における弥生時

代の代表的な遺跡として、研究の俎上に載っている理由といえよう。

2 遺物の再実測について（第48回）

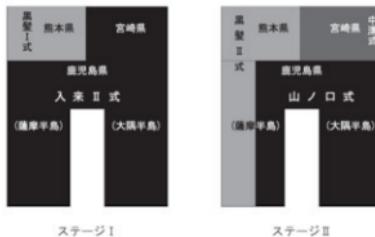
これまで、旧報告に掲載されていた土器の実測図は、器形や断面形態はもちろんのこと、穿孔やハケ目・ヨコナデの調整についても図化が行われていた。これは、河口氏が土器に穿孔がなされている重要性や調整技法を図化する必要性を認識していたことを示しているといえる。一方、今回土器の実測については、これらに加えミガキ・工具ナデ・指ナデの表現、接合痕の図化を行った。石器・石製品で擦摩方向を意識した図化を行ったにも見えるが、現代の実測図では製作技法を意識した図化が以前より高まっていることの表れといえよう。今回、山ノ口式土器の標式遺跡として、より詳細な情報を提示することできたのであれば、幸いである。

さらに、今回の実測図で暗紫ゴラの付着範囲を図化した。これにより、開聞岳噴火直前の土器の状況を復元する材料が増えたのではないかと思われる。

【引用・参考文献】

- 内村憲和 2015 「大隅地域の弥生時代中期後半から後期前半の土器編年について」鹿児島考古』第45号 鹿児島縣考古學會
鏡山猛・益政重隆 1969 「九州」『新版考古学講座第4巻 原始文化<上>』雄山閣出版株式会社
金闇惣一 1986 「呪術と祭」『岩波講座 日本の考古学4 集落と祭祀』株式会社岩波書店
河口真徳 1960 「山ノ口遺跡」『鹿児島縣文化財調査報告書』第七集 鹿児島縣教育委員会
河口真徳 1961 「鹿児島県山ノ口遺跡の調査」『古代学』第九卷第三号 財團法人古代学協會
河口真徳 1962 「山ノ口遺跡」「立正考古」第21号 立正大学考古学研究会
河口真徳 1964 「鹿児島県肝属郡山ノ口遺跡の調査」『日本考古学年報』12 (昭和34年度) 日本考古学協会
河口真徳 1966 「鹿児島県肝属郡山ノ口遺跡の調査」『日本考古学年報』14 (昭和36年度) 日本考古学協会
河口真徳 1968 「南九州地方」「弥生式土器集成」株式会社東京堂出版
河口真徳 1978 「弥生時代の祭祀遺跡 大隅半島の山ノ口遺跡」「ひとのす」第10号 新日本教育国書株式会社
河口真徳 1981 「新南九州弥生式土器集成」「鹿児島考古」第15号 鹿児島縣考古學會
河口真徳 1988 「山ノ口遺跡」「日本の古代遺跡38 鹿児島」株式会社保育社
河口真徳 1993 「型式の再考察」「鹿児島考古」第27号 鹿児島縣考古學會
河口真徳 1995 「考古学における型式の動態」「鹿児島考古」

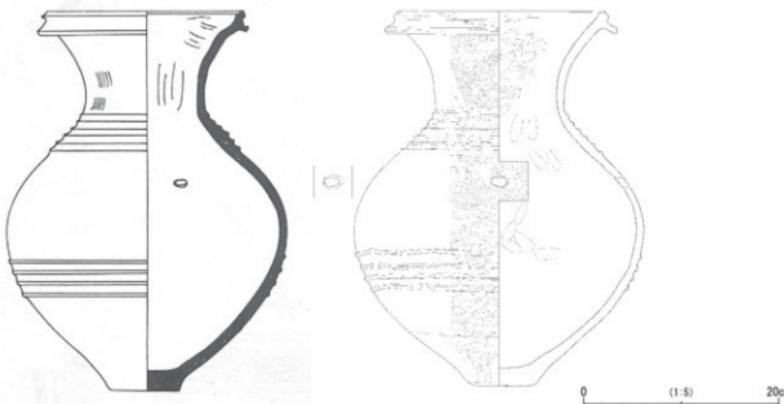
- 第29号 「鹿児島県考古学会」
- 河口貞徳 2002 「山ノ口遺跡の実相と弥生文化に占める位置」
『鹿児島考古』第36号 鹿児島県考古学会
- 河口貞徳 2005 「山ノ口遺跡」「先史・古代の鹿児島 資料編」
鹿児島県教育委員会
- 河口貞徳・出口浩 1972 「南九州弥生式土器の再編年」「鹿児島考古」第5号 鹿児島県考古学会
- 河野裕次 2013 「南部九州における弥生時代中期土器様式圈の動態」「古文化談叢」第69号 九州古文化研究会
- 中園聰 1993 「様式論と南部九州の弥生時代中期土器」「鹿児島考古」第27号 鹿児島県考古学会
- 中園聰 1996 「弥生時代中期土器様式の併行関係」「史源」第百三十三号 九州大学文学部
- 中園聰 1997 「九州南部地域弥生土器編年」「人類史研究」9
人類史研究会
- 中園聰 2004a 「土器の分類・編年と様式の動態」「九州弥生文化の特質」(財)九州大学出版会
- 中園聰 2004b 「墳墓にあらわれた社会構造」「九州弥生文化の特質」(財)九州大学出版会
- 長野慎一 2017 「山ノ口遺跡考」「鹿児島考古」第47号 鹿児島県考古学会
- 西谷彰 2002 「弥生時代後半における土器編年の併行関係」「古文化談叢」第48集 九州古文化研究会
- 平美典 2015 「鹿児島県出土の須玖式系土器」「鹿児島考古」第45号 鹿児島県考古学会
- 本田道輝 1984 「松木蘭1号住居址出土土器とその意義」「鹿児島大史学」第32号 鹿児島大史学会
- 本田道輝 2015 「山ノ口遺跡出土品」「鹿児島県文化財調査報告書」第61集 鹿児島県教育委員会
- 森貢次郎 1966 「九州」「日本の考古学III 弥生時代」株式会社河出書房新社



第47図 南部九州の弥生時代中期土器様式の動態
(中園2004を再トレース)

第11表 山ノ口遺跡上層出土土器を模式とする土器型式の名称と時期比定

文献	河口1960	河口1962	河口1966	河口1968	河口・出口1972	河口1981	森1966	中園1997
型式名	山ノ口二式	-	山ノ口二式	山ノ口式土器 (第IV様式)	山ノ口式土器	山ノ口式土器 (第V様式)	山ノ口式土器	山ノ口二式
時期比定	弥生時代中期	弥生時代	弥生時代中期末 から後期初頭	-	弥生時代 中期後半	弥生時代 中期後葉	弥生時代 後期前半	弥生時代 中期後半
備考	A地点下層の土器は山ノ口二式として前期の軽わり頃に位置づけられる			共伴した須玖式は第Ⅳ様式に位置づけられる		共伴した須玖式は第V様式に位置づけられる		須玖II式(新) と黒髪II式と併行



第48図 新・旧遺物実測図の比較

第V章 総括

第1節 出土遺物の検討

1 出土土器について

本項では、本遺跡から出土した土器の時期や系統等について現段階での研究成果等をもとに検討を行う。型式名等は中園編年（中園1997）に則った。本遺跡から出土した土器は大きく地表下約3mから出土した土器群の時期と地表下約1mから出土した土器群の時期に分けられる。なお旧報告では、前者を弥生時代前期の終わりごろ、後者を弥生時代中期に位置付けられている。

(1) 地表下約3mから出土した土器群

地表下約3m（A地点下層）から出土した土器群は、第35図73～76に当たる。73は、口縁部が広く外反する器形の壺である。南きつま市高橋貝塚の前期の土器との類似性が指摘されている（河口1995）。76は円盤充填技法で製作され、脚部に方形の透孔をもち、口縁部内面に内傾化する段をもつ付鉢である。この特徴は弥生時代中期初頭～前葉の豈後系台付鉢の特徴に一致する。また、内外面に黒塗が施され、外面には黒塗の上から丹彩文が施されており、精製品であることから搬入品の可能性が高い。74の壺形土器も器形や二叉状工具を用いた平行線文が施される特徴からやはり同時期の豈後系土器との類似性を指摘することができる。よって、地表下約3mから出土した土器群は、弥生時代中期初頭～前葉の時期を中心とし、一部前期に上がる可能性もあるといえる。また、出土した土器の中には豈後系土器が含まれていることも特徴といえる。

(2) 地表下約1mから出土した土器群

地表下約1m（A地点上層）から出土した土器群は、第36図77～第39図96に当たる。このほか、B～D地点から出土した土器群（第16図1～第20図14、第25図40～第27図47、第29図53～第31図61）も同時期である。これらは弥生時代中期後半に位置付けられた山ノ口II式土器の模式となった資料である。在地系土器と外來系土器（模倣・搬入品）がある。在地系土器は壺・壺・鉢が出土している。壺は、脚台をもつものや平底のもの、大壺の器形のものがある。脚台を持つものは、口縁部下に突帯がないものと1～4条の突帯を巡らすものがある。一般的に山ノ口式土器の壺は脚台を有し、口縁部下に3条の突帯を巡らすものが多いが、本遺跡では多様な壺が存在していたことが窺える。壺は、口縁部が逆L字状のものと二叉状口縁がある。また、口縁部が逆L字状の壺は頭部や胴部に突帯を巡らすものとそうでないものがある。59の土器は、器形的には弥生時代中期前半の入来式の壺に類似するが、共伴関係から山ノ口式土器の段階に下る古い要素を残した土器と判断したい。このほか、長頸壺や無頸壺、脚付小型壺等が出土している。92は台付鉢である

る。類例が確認できないが、口縁部形態や突帯等山ノ口式土器の壺の特徴に類似しており、在地系とした。57の大型長頸壺もほとんど類例が確認できない。指宿市成川遺跡で類似する資料が出土している程度である。胎土に雲母を含まない点が在地系土器とが異なるが、近畿地域で類似品が出土していることからひとまず在地系に含めた。

46・58・85は模倣品と思われる素口縁広口壺である。北部九州で見られるものに形態的に類似するが、丹塗りが施されていない点や胴部最大径の位置、頭部の縮まり具合、器皿の厚さ等異なる点も多い。「在地様式の構成器種の一つとして組み込まれ、早い段階で在地化した可能性」（平2015）や「須玖II式を意識して製作された」（中園1997）と評価されている。40・60・61・95・96は、搬入品と考えられる土器群である。いずれも丹塗土器である。95は表面の剥落が激しいがわずかに丹塗りの痕跡が残っている。40は、從来須玖式とされていたが、近年では口唇部形態や突帯の断面形態等北部九州のものと異なることが指摘されている。最も類似性がある資料は、熊本県北部の大道小学校遺跡のものとされ、中九州からの持ち込みの可能性が指摘されている（中園1998）。96は北部九州の典型的な須玖II式である。60の楕円高杯や95のジョッキ形土器は、福岡県行橋市前田山遺跡等、豊前地域で散見される。61の鉢は、類例を確認できなかったが、丹塗りや胎土から搬入品と考えられる。これら外來系土器も弥生時代中期後半頃に位置付けられる。

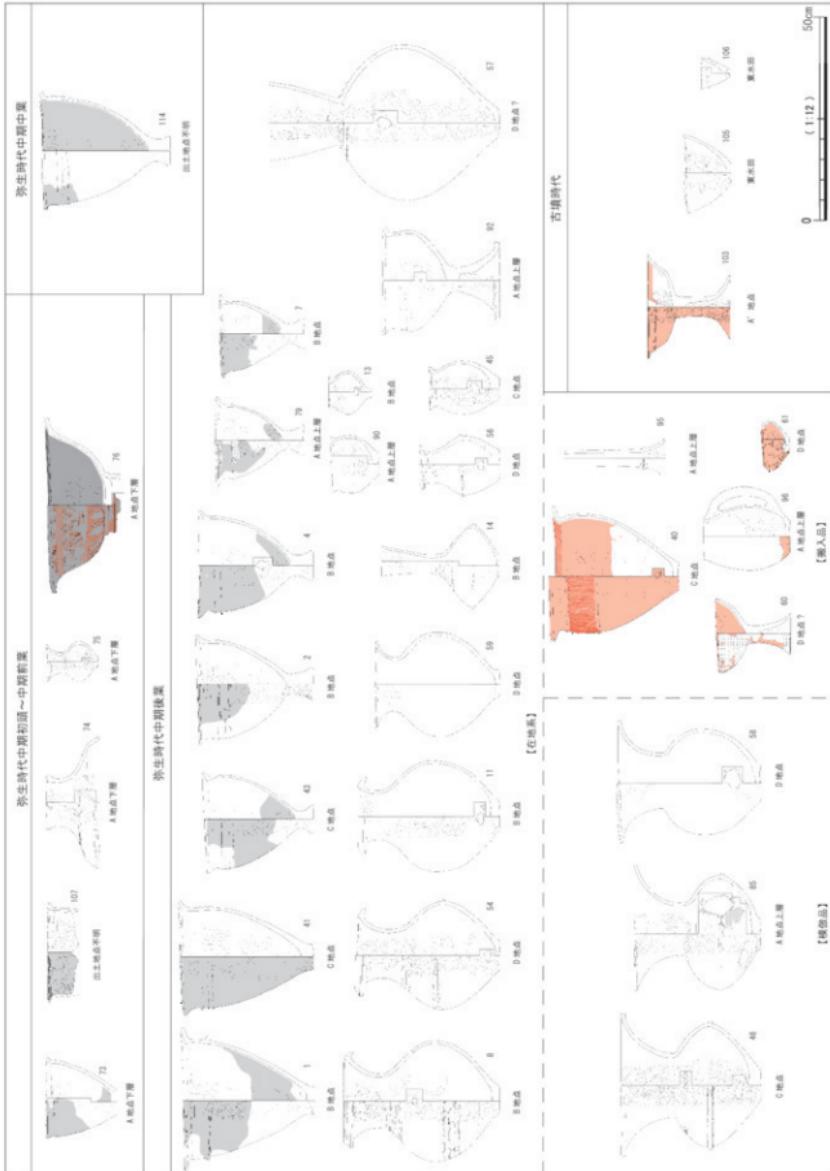
(3) その他の時期の土器

114は出土地不明であるが、山ノ口I式土器にあたる資料である。他遺跡の資料であることも否定できない。

103は、A' 地点（砂鉄採掘地）から出土した高杯である。旧報告ではB地点で検出された円形の配石遺構の外周に配置された土器の一つと推定され、弥生時代中期に位置付けられている。類似する資料は指宿市成川遺跡や南摺ヶ浜遺跡で確認されているが、南摺ヶ浜遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器棺墓を構成する土器群に含まれている。103の土器は弥生時代中期の土器と共に伴するかどうか未確定であるため、形態的類似性から弥生時代終末～古墳時代初頭の所産と判断した。出土品のうち、この時期の土器は1点だけだが、本遺跡の東水田（105・106）や近接する出口遺跡で古墳時代の土器が確認されていることからも矛盾はないものと考える。

(4) 小結

本遺跡は、弥生時代中期初頭～前葉に形成され、東九州からの搬入品も確認される。本遺跡の主体となる弥生時代中期後葉の山ノ口II式の段階では、北部九州や中九州からの搬入品が確認できる（第49図）。出土遺物から



古墳時代まで続いたものと思われるが、遺物量は少なく、その主体は調査地点の周囲にあるものと推測される。

2 出土した軽石製品について

本遺跡では、磨製石鑿等の剥片石器のほか、多量の軽石製品が出土した。特に軽石製品は、本遺跡を特徴づける遺物の一つであり、また本遺跡の性格を検討するための重要な要素と考えられる。そのため本項では、軽石製品の検討を行う。

(1) 出土した軽石製品の製作技術

南九州において軽石は、弥生時代以前から用いられる素材であり、縄文時代においても様々な軽石製品が出土している。本遺跡から出土した軽石製品が縄文時代の軽石製品と大きく異なる点は、加工痕である。第29図50や第42図101など非常にシャープな加工痕が認められることから、軽石製品の加工工具として硬質な金属製品が用いられたことが想定される。本遺跡で出土した軽石製品は、重厚なものも含まれている。素材が軽石とはいえ、硬質な金属製品を加工工具として用いていたからこそ、大型で具象的な軽石製品の加工が可能となったともいえる⁽³¹⁾。

(2) 出土した軽石製品の原型

本遺跡から出土した軽石製品は、岩偶や家形など特定の形を目的として作られたものと、加工等に用いられたものがある。特に前者は、これまでの研究で山ノ口遺跡の性格を考えるうえでの重要な指標となっている。そのため、前者について何の形を目的として作られたのか改めて検討したい。

第41図98や第42図99は人物を、第43図101は家を目的として作られたものと考えられ、これまでの研究でも異論は唱えられていない。一方第43図100は、石棒やもしくは家形と考えられていもので、定説をみない。宮崎県塚原遺跡でも類似する軽石製品が出土しているが、男女の性器を併せて表現したものか家を表現したものとされている。また、第29図50は、これまで陰石とされていたものであるが、前述のとおり出土状況から容器の可能性もあることを本報告で指摘した。いずれも現段階でどちらかだと断定することはできないが、仮に第43図100を家形、第29図50を容器とした場合、河口氏が想定する、「縄文時代後晩期に南九州において発展した性器信仰が農耕文化と結びついで、山ノ口遺跡における祭祀になった」という考えは、成り立たなくなる。そのため、今後類例の増加をまって、改めて検討すべき事項と考える。

第2節 遺跡の性格の検討

1 山ノ口遺跡の特徴について

まず、本遺跡の性格を改めて検討するにあたり、本遺跡の出土状況等の整理を行う。

本遺跡では、弥生時代中期後葉を中心とした環状の配

石構造9基とその周囲から、焚火跡が検出され、立石や多数の土器や軽石製品等が出土した。弥生時代中期後葉において、出土した土器の構成割合は、壺が最も多い(第51図左)。また、焼成後穿孔された土器も壺が最も多く(第51図中央)。壺は欠損部分により穿孔の有無が判断できないものを除く全ての土器に確認された。これらの特徴から、本遺跡が生活遺跡ではなく、祭祀遺跡であることは明らかである。ただし、何を目的とした祭祀なのかが重要であり、各研究者間で意見の相違が見られる部分もある。

なお、出土した土器は、開聞岳起源の暗紫ゴラが付着したものが多数みられた。暗紫ゴラの付着している箇所に着目すると、口縁部や胴部最大径付近に付着しているという特徴がある。また、暗紫ゴラが付着している面は片方の側面に限られており、かつ風化が激しいという特徴もみられた。これらの特徴と出土状況から、土器の埋没過程を想定した図が第50図である。まず、第1段階は、「①正位で設置され、風等で横倒しになる。②横位で設置される。③半分程度埋めた状態で横位に埋設される。」の3パターンが想定される。その後、第2段階で片側面の風化と埋没が進み、第3段階で暗紫ゴラが降下してきたと思われる。なお、土器の倒位方向から北西~南西方向と北東~南東方向の2グループに分けることができる(第51図右)。本遺跡が所在する錦江町にある田代の最多風向は、夏期が南東からの風、冬季が北西からの風であり(鹿児島県ホームページ参考)、土器の倒位方向と対応している。よって、第1段階で想定した3パターンのうち、①の可能性が最も高いものと思われる。

2 山ノ口遺跡の性格の検証

前述のとおり、山ノ口遺跡の性格については、農耕祭祀とする説と墓地とする説がある。農耕祭祀説については、蘇巣に関わる鳥を模造した木製品や石製品が出土しておらず、本遺跡が村や寺院の入口とは考えにくいことから、長野氏の指摘のとおり(長野2017)、本遺跡の出土状況から充分に説明できているとは思えない。

一方、墓地説についても、人骨や墓壙等、本遺跡が墓域と確証づけるものは確認されていないため、判断が難しい。中園氏のように環状配石を円形周溝墓と考え、環状配石を構成する軽石やその周囲で出土した土器を周溝の中に落ち込んだものとする考えもあるが(中園2004)、墓壙や周溝が検出されていないため、確定できない。立石は、成川遺跡・南摺ヶ浜遺跡・枕崎市松之尾遺跡で確認されているが、立石を伴う墓と断定できるのは、立石に隣接して土器棺墓や人骨が出土した弥生時代後葉以降であり、弥生時代中期後葉の事例は確認できない。本遺跡で出土した土器自体も、本来正位で置かれていたものと想定しているため、土器棺墓とは捉えがたい。ただし、

弥生時代後期以降の立石墓が確認された遺跡と、焚火跡の検出や穿孔土器や武器（磨製石器や鉄製武器）の出土等共通する事項も多い。よって、農耕祭祀説より、墓地説のほうが可能性が高いと思われるが、状況証拠による推測しかできないのが現状である。少なくとも、以前河口氏が指摘したとおり、山ノ口遺跡の祭祀状況が、弥生時代後期以降の立石墓の原型である（河口1987）ことは、言えるかもしれない。今後、本遺跡残存箇所の発掘調査が行われる際は、墓壙や周溝の有無に留意した調査が望まれる。

【註釈】

1 寒川朋枝氏のご教示による。

【引用・参考文献】

鹿児島県ホームページ URL : <http://www.pref.kagoshima.jp>

[jp/ah12/kurashi-kankyo/sumai/kankyo/hoshin1/theme3/03.html](http://ah12/kurashi-kankyo/sumai/kankyo/hoshin1/theme3/03.html)

河口真徳 1987 「隼人の埋葬」「鹿児島考古」第21号 鹿児島県考古学会

河口真徳 1995 「考古学における型式の動態」「鹿児島考古」第29号 鹿児島県考古学会

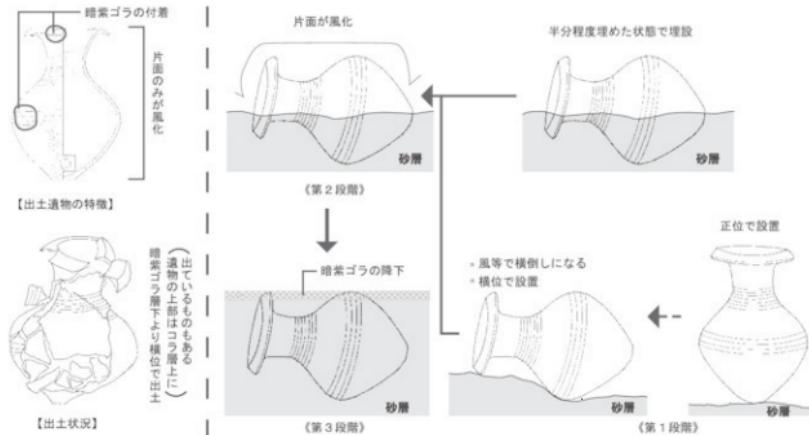
中園聰 1997 「九州南部地域弥生土器編年」「人類史研究」9 人類史研究会

中園聰 1998 「丹塗精製器種群盛行の背景とその性格」「人類史研究」10 人類史研究会

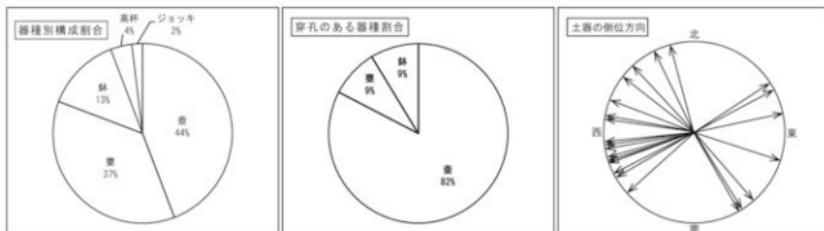
中園聰 2004 「墳墓にあらわれた社会構造」「九州弥生文化の特質」(財)九州大学出版会

長野眞一 2017 「山ノ口遺跡考」「鹿児島考古」第47号 鹿児島県考古学会

平美典 2015 「鹿児島県出土の須玖式系土器」「鹿児島考古」第45号 鹿児島県考古学会



第50図 土器の埋没過程想定図



第51図 弥生時代中期後葉の土器群の諸要素

附 編

—旧報告の再録—

山口遺跡

河口貞徳

河口貞徳 1960 「山ノ口遺跡」『鹿児島県文化財調査報告書』第7集 鹿児島県教育委員会
附編 1

本文目次

第一章 第一節 調査概要	一一六
第二章 漢語辭書	一一二
第一節 遺跡の状況	一一一
1. 地質調査	一一一
2. 出土状況	一二二
第三章 文化遺物	一二三
第一節 土器	一五六
第二節 石器	一六六
1. 石器	一九九
2. 玉器	二〇一
3. 鋼器	二九九
4. 銅器	二九九
第四章 山ノ口漢詩の考察	二二一
遺物の概要	二三三
土器以外の遺物	二三〇
B 地点出土土器一覧表	二三三

挿図目次

図版日次

1.	a' 滅滅全量	b' 乗組状況
2.	a' 乗組全員 (西頭より)	b' 乗組全員 (東頭より)
3.	a' 乗組全員 (北頭より)	b' 乗組全員 (南頭より)
4.	a' 補正加工品由来灰 (No.1 ～ 2 区) b' 石墨由来灰 (No.2 ～ 4 区) N.8 土器 附近 C' 出土灰 (No.1 ～ b) d' 出土灰 (No.2 ～ b)	
5.	a' 出土灰 (No.3 ～ b) b' 出土灰 (No.4) c' 出土灰 (No.5 ～ b) d' 出土灰 (No.6)	
6.	a' 出土灰 (No.7 a) b' 出土灰 (No.7 b) c' 出土灰 (No.8 ～ b) d' 出土灰 (No.9 ～ 3 区)	
7.	a' 土器 1' ～ 5' ～ 8' A 地点由来 4' 国分寺口跡部原出士	
8.	a' 土器 9' ～ 16' B 地点由来	A 地点由来
9.	a' 土器 17' ～ 22' B 地点由来 23' ～ 28' B 地点由来	
10.	a' 土器 29' ～ 31' ～ 36' A 地点由来 30' B 地点由来	
11.	a' 磁石板 A, B, C, A 地点由来 D, B 地点由来	
12.	a' 石器 A, A 地点由来 B, C, B 地点由来	

第一章 調査経過

山口瀬源は、鹿児島県前大隅町新瀬村にある、大陸からの複数に及ぶ、船多行より、正門方に生じており、ちょうど、指印の跡にあつて、船足島港にむかう船形に位置している。

本調査報告書の最後は、昭和三十二年正月、国連海にあつて、東方金洋株式会社が、昨後の探査を行つた際、「我が方の國へ、出島跡が出土したことによる」。

昭和三十二年七月、鹿児島市山川町新瀬川河岸跡の舟田三郎氏が、御託山ノ口跡地に現地から、種々類の土器の調査が新島支店にて行つた事実を伝え、そちらは別紙を添された。

その後同年八月又、鹿児島市新瀬町の舟田三郎氏が、大陸の調査を行われた際に、国連社出土の遺物の一部を承認し、鹿児島県社会文化普及係に報告された。

山口瀬源は、御託山跡地となつてこられたため、御託山跡地の船多行があつたので、本文を挿では「昭和三十二年三月」、他の調査は行つたものと記載するが、大根占中学校に隣接した、又大根占小学校、大根占中学校生駒山跡に中学校、一郷は御託山大根占小学校、御宿市篠原本美浜小学校等に併設され、報道紙に見られ、もしかしたらしてしまつたと料想した。

御託山跡地の民家には残された船石調査等は、舟田の氏名とされ、確認して行く折合であり、各處に散在したもののは船水の恐れもあつたので、手をついて取扱保育につとめた結果、検査していくと類似の大部分を取める事が出来た。

調査は、整理に沿つた結果であつて、御託山跡地の外、大根占中学校新瀬川河岸跡の舟田三郎氏、舟田中学校新瀬川河岸跡の舟田三郎氏等の目にとまり、過激の棄損となつたものである。

調査の出土次第につれては、砂岩表面作業に從事した、当子文野がよく注意しておられた、舟田の尾端は参考になる点が多かつた。

其物は、新生代の初期層は中間に及んでおり、此方が新村とした遺物「石器」(注2)、御託山跡地を含み、添めて置いた、且つ類似の少くない遺物である事が判明した。この點は砂岩表面のため、追跡が困難に行われる恐れがあつたので、昭和三十二年十一月二十一日より、昭和三月四日まで、十日間の調査を行つた。

発掘にあつたのは、県立鹿児島高等師範学校、舟田三郎氏は種々鉛版の夢をさせられ、大根占中学校よりの協力を受け、又田舎で位の好意を受けた、乗組

に多くの便宜を得た事を記して、厚く感謝の意を表したい。

また坂元貢氏、神田三郎氏は櫻洲先生には直接連絡に付す限り、一方書簡に渡る御直旨をいたしまして、各派の通行に重要な役割を果してましたからね。櫻洲先生は隠岐守学校生徒及び大畠中学校生徒がの隠岐行業奉公を終ったことと共に記して通路の運を表しました。

後醍醐天皇は、山陽道から京都に赴く途次、御宿には御山室の御宿館に泊まり、御膳は、豆御食や御膳打膳にちぢめ、長田御膳である。御膳の御膳は、「山陽道より京都来」と御祝状に御膳に附いて置くなつてしらるい。御膳は、「そもそも」なだらかな御膳をもつて御膳館に運んでいたところが、どうやら。

山ノ口飛行場の北側斜面に立てば、竹筋地の中心地(庄原)の運賃で事務室より松生村後藤の漁船が運搬に当たしておる。大根白平野を中心部の大通港にて、もとから出でて居た大通港がみられた。大通港町一帯は、農業と漁業を併せ持つものである。

秀麗に飾られた施設は、山口郡能の御殿の水田城や、豪華に飾られた赤坂城の特徴である。今回の発掘は、諸記三十三年正月に行われた砂銀

記述の如實上、昭和三十三年五月に行われた砂漠探査地にて、砂漠の最高点を A 点とし、今回の実験場所を B 地点と呼ぶことにする。実験場所は三つの本山にまたがり、I、II、III、の四つのトレントに区分し、東西面積は、一〇〇平方キロメートルである。(図四二)

十日十五日、五月に行われた各種測量と、移動測地点との中間距離を、普通は行つて、N.B. 西や東の方向に、 2×20 メートルのランチ

そちらは「トレンチの面倒」に2.5米の距離を置いて「トレンチに平行に」 2×10 メートルの「トレンチを横断」、北より2米前に正面にして「1区」 \sim 「5

トレンチ1区の正面は、珍獣繁殖場に重なっていることが判明し、トレンチ2区は、珍獣繁殖場に重なっていることがわかつた。

植物の由来状況をみると、トマトを主とする園芸、地元で約1キロの距離を離れた山から、農業革新 No. 1 は A¹、樹木や灌木 No. 1 は C¹が接種しておこし、(原種 4 番園芸 C¹)。アゲハ蝶の前翅の表面は No. 2 は A¹、後翅は No. 2 は C¹、白蝶は No. 2 は C¹、白蝶は A¹ (原種 4 番園芸 C¹)。

十一年四月二十六日には、ミネソタ州のダーリングトン郡 No.3 のアーヴィング湖にて No.3 のアーヴィング湖にて田植した。種は前回同じである。(第四回)

【レシオ】は必ず機動車となり、運石を材料とした自走が出土した。(図版一、D、右に、標団七、A)

—シノヘテ10区、砂礫層より砾石を含むシルト層付帯（図版一、D、左上、断面七、B）

十二月二十六日 トレンチの発掘を行ひ、5 区、6 区は砂質埴層より堅なつてらるゝが判明した(図版2)。
十二月二十九日 トレンチ3区、4区に砂質層上に軽石礫を鉛直に配列した層面を発見する。(図版3、b、説明4) 2区と3区の境に、

2 区 沙鉄橋上に鉛錠壁一箇が由工した（掲図4）

■4-1-2-1-2区埋設：豪斯干槽 No.6 の空氣管を設置した。（図説写真 d、図説4）

2区、西側の板壁上に浮遊土壁 No.7 が出土し、その上部の上面は長石層（コラフ）で覆われていた（図版六、a、跡地四）。

一月三日 ■トム・ホーリー No.8 b 制作計画室にてその時元より繪葉は藤五郎出した。(西原四、塙四、西原一一、B、津田廿
二)

⁸ 全部の植物を採取する。

「三月三日 ■トシハナ、2区～3区層」を発見中より要領土器No.7を出土した。(図版六、b' 第四)

これまでの出土標本が全般に見て、やはり下層を形成した■トシハナ、1区、No.1を発見中隣接する1号墓跡中より標本出土し、標本の石器を含むる土器は皆出土しないため、4区後終盤から既に出土せずして他の区段に移るに至る。

■トシハナ2区は前述大きな礫石遺跡を中心として、礫石の小塊地や砂礫帶中より出土。(図版1'、D'右下、地圖5' C)

地圖5' Cの2区は前述大きな礫石遺跡を中心として、礫石の小塊地や砂礫帶中より出土。(図版1'、D'右下、地圖5' C)

「三月四日 番號の整理と検定を行ふ。」

以上の如く今回の採集は、■トシハナの■トシハナにねりて深層をねらひ、浅層の主要な標本は■トシハナの開拓中より、■トシハナの区段に位置し、礫石層を円形に配置したものを中心として、これを圓形の範囲の「圓面」、ややその他の範囲等であつて、この類型は標本全に穿通するものがある。(しかし) ■トシハナの5区は沙浜灰陶の底に振り散らしてしまつて、既に他の口形転写の「圓面」であつたが、この底から出土した保存土器は、圓面であつたと伝えており、既に他の資料が土器は標本として取り入れられることは出来た。

(図版1'、2')

調査組織

調査主体	玉瀬高等学校考古部
代表者	大庭光郎
委嘱責任者	原大輔謹井義久
全般監督員	博文館書店
全般監督員	玉瀬高等学校教諭
全般監督員	鹿児島大学学生
全般監督員	玉瀬高等学校学生
全般監督員	和上池水貞治
全般監督員	鶴川昭光司

全般監督員	全	全	全	全	全	全	全	全	全
大庭光郎	中学校教師	藤田重彦	坂元元氣	大庭光郎	佐野元三	三男	井口洋一	佐野洋一	佐野洋一
井口洋一	小学校教師	井口洋一	佐野元三						
佐野元三	小学校教師	佐野元三							

記述1 圓面三十三年七月より八月にかけて、鹿児島市川町前川の新井の字牛立場の裏面が、文化財保護費貢金の上部によつて行はれた。

記述2 圓面三十三年五月より六月にかけて、新井の字牛立場の裏面が、文化財保護費貢金の上部によつて行はれた。

記述3 圓面三十三年七月より八月にかけて、町の中央部を走る千頭道工事が行われて所が、この箇所より新井の裏面の馬糞が、おひだりしく出土してある。この馬糞も馬糞地といふ。

記述4 大庭光郎研究者、井口洋一研究者の手形中心部にある水田は、地圖1'〇番位の現在の水田の手形が土器が出土し、保存土器が多く、水田十番位から今位の二箇所が出土した事がある。地圖1'〇番位の現在の水田の手形が土器が出土し、保存土器が多く、水田十

第一節 遺跡の状況

1. 宏观

無論は木田であるから実家は木手であるが、門番達は見るといふ。若時は西面方向にあたる庭園側に向かって腰掛を示し、大体同様を取ることの始に便に、火山温泉の断続した湯が生まれ、これらを含むものと呼ぶとなる。(筆図3)

「さあ、今度はあなたと上野の連中の眞似、廻五三ヶ廻五二廻を

【解説】酸化炭素化物はさきまであり、酸素の下部に酸化炭素が酸化炭素したものと思われる。この段は地盤にそつて下方へ相成して柱状を示し、地面上に面して接着する。そのために地盤は表面起立している程度があるが、地盤生長は表面の風化じる。

数下部の脊柱腰神經と、共にズバツルズルの場合は、126-130度のもの。

¹⁵ See also the discussion of the relationship between the concept of "cultural capital" and the concept of "cultural value" in the section on "Cultural Capital and Cultural Value."

◎要點を挙げると次のようになります。

「國の財政であることは不思議な気がわからぬ。」「総理は○圓と四〇圓の差をもて実験した結果であるけれど。

国語 大山氏端精闘（コラ世）前記の背景中に含まれ、紫色を帯び、丸子は細かでやへ深く、裏面よりちらに斜く、表面も深く断続している。

出は動物は、コロナ下に位置しているが、動物の上部はコロナ上に出て、いるものもあつて、上部の頭の一部にはうが頭蓋した形である。この部位は

西諸島後間もなく運動が来たに埋没したわかつた時期に、火山灰の隙間に埋積したもので、この遺跡の成立時代は、コラ哥の生成時

化以前であると思われる。

【解説】砂熱解：砂漠を守る地質過程で非常に多く、その底部は炭の層が出来ない。植物は多くは、この層の上面に倒つており、一部の植物が小量の内部にくっ付込んで出土している。

祐の出土試見からみて、この群の衣服が地衣を形成しているに特徴があるて、この時代で地衣を形成するものであつた。

【脚注】 ■ は太字で最初に読み下す語を示す。ただし、これは「*アーティスト*」、「*藝術家*」、「*藝術家*」などの意味で、

貴重な植物出土品には、一般的の生産地のような有機物の堆积によつて、土壤が蒸むるような状態は全然みられず、植物の存在している附近にも余分な土がまかれてゐる。この原因の一つの原因は、これは自然である。(前回)

2. 由上可知， $\overrightarrow{AB} = \overrightarrow{AC}$ ，即点B与点C重合，所以线段AB与线段AC重合。

(17)

長崎船在の間に船置された小切は、桂十五圓を額え、三十三年五月の砂漠試験所に出土した四通を以えると、十九面の土器によって

ナガラの水位は、No.4 から No.6 の間に位置する。この水位は、河川の流量によって常に変動する。

前回によって生じた千葉郡と土浦の競争力をみると、安藤の開拓と、豊田の開拓は、豊田の開拓である。その出資額をみると、土浦の開拓の競争力がほぼ同じであるが、No.2 号、No.3 号の土浦は必ずしも形態を保つた様子なし。他の土浦もわれてはしてが、生で賣つてしまつて、時価に近づきを

上部出土の位置は「横糞」の形となつたものが多く、「No.2-a」「No.3-a,b」「No.8-a」の四箇所だけが縦糞となつてゐる。口に向いた方向をもつて「駆逐

- 2 土器はある範囲一様を認定され、一様を基準に評価が下り、既存、既知の発見地、遺跡を含むか否か、遺跡全体が復元したと見られる事である。

3 ある範囲、複数の部類が出現してしまった時ねらはるくもわかる、遺跡が複数が存在してしまっている。

4. 本器は個体、何處か複数で出土出来るものは多部類に属すとして本器も複数だったのではないか。始めから現在土中(実機跡)した状態で、複数が识别したもののあることを記述するのみである。

5 遺跡半周辺に「○」印のものがあるが、遺跡半周辺には必ず其にあらわらぬ箇所である。

注 5 No.1 ■ 遺跡半周辺の「○印」、No.7 ■ 遺跡半周辺にはコロソ形が複数して出土した。

注 6 ■ 遺跡半周辺、No.1 ■ 遺跡半周辺近くより出土した複数石器のうちの1個、トランク4区から出土した串玉等は、鉄製物にくづぶつんでいた。

注 7 大きな壙は三〇壙、小さなものは五五壙までの間に分類してしまった。

注 8 No.5 のギリオは鉛球状の鉛錠にあり、No.7 のギリオは鉛錠半周の表面に、約二〇壙ぐらいたっており、ギリオと呼ぶことは大體間違えられないと。

注 9 1面は約36×22mmの楕円の横で、七面の穴を有する。他の二面は14×6mmの楕円。正反の対側と四隅を削ぎ、その端面を強張り面にしてしまった。

注 10 No.1 ■ No.7 ■ の半周辺は周縁に7cm、断面に4cmの心管を削ぎ、「No.8」の半周辺は「同じ」として次条、No.8 ■ 半周辺は大変に心管の外側を削ぎして断面は4cmである。

注 11 No.8 ■ 半周辺は周縁を削りてあるが、土器の口の開く方向には「一定の角度」があつて、強張と弱張を交互にしている。

第三章 文化遺物

第一節 土

こゝに準ずる土器はA 地点(昭和三十三年五月の砂質埴地出土)、同じく砂質埴地出土より出土した骨器と、B 地点(昭和三十二年十一月三十日、一月の砂質埴地)より出土した骨器である。

植物化合物は馬糞下約一米の、田砂層とと思われる砂質土壌で、均數下約三米の田砂層の淡部との上、下二層がもある。

上層の鳥居土手の松林をみると、当地域においては、櫛形配置(直線)に多く採用された。延長による面積的有利の外に、深形状土壠を配置した状態で十メートルの土壠が並申して、いる。この段階では、山地の松林からみて、「これらの土壠は一括して、大体同じ手順で造られたものとみえてよい」。

A 地点における蒸発土中の砂混入は、砂混入操作に従つた崩下式方式によると、大体A地点と同様の実験があつたものと思われ、さらに崩下式下部三つの深溝からも砂混入の田土がふられたこと、いき。

A 鳥居山出土の鳥居は、恐らく手物にみてよい。二つの形が水筒でもござり、この中の二形はB 鳥居の形態と一致する。

A、B、C、Dの各地点より出土した土器をと、以上のように「都」を下階の土器と山口式土器、中階の土器と山口式土器に記載する。

三山口一式（下野十縣）

底形土器の構造が、11 例頭部のみついた圓

頭部はしまり、口唇部は外反している。下脛部は欠損して不明である。頸部及び脇部に平行沈瘻を有し、頭部はさらに頭に覆かい平行沈瘻を有する。四肢は正常の形態を有するが、四肢の外側には皮膚が脱離している。四肢は4本の指をもつ。この2種の脱離がある。

小畠道場と福岡(博古)、3回戦からはついで三連続で河内をもぐららに口の開きをつけた頭である。頭通と頭通との序盤は同曲して身が伸び伸びで、前脚は口張りをつけた形の姿勢である。腰向には頭より口が多く、腰屈みの腰をひくことから「腰」。足は歩と陰陰をかくる、直はかたく拳銃は直拳である。なで仕事であるが、頭には腰をひくんだとかいひこじて、頭通にふき通ふひこじてくる。

新編和漢書(巻四六)15)田舎の原を駆ける。馬車は走り、口説を外れて、馬車は左を向こうに走るが、馬車は矢張して不明である。

脚部を中空で組めば、二本の凸筋のみで支えていい。

以上にあげたものは、いずれも本場の出土ものである。北九州初期の形式に共通する要領をもつてゐるが、前杯の口縁部の内側に腹を有する点などからみて、新井式初期の終りごろに位置する形式となるべきではないかと思ふ。

2. 山口式（上部土壁）

御前十體圖(西宮圖)「下」(1)圖面はつた形態に近い論式で、大をくらうらと廣幅をかけた體である。口縁は「下」形の「下」(2)形と似て、左側に開き、右側に閉じる。左側の開きは、左側の腰に開き、右側の腰に閉じる。左側の腰に開き、右側の腰に閉じる。

翼膜仕上げであるが、頭部の一部に刷毛目を残すものもある。色調は紅褐色を軽び、胎上には砂粒及び密肉片をふくんでいる。

東京士師(図版4、8、11)脇部のはつた形に近い形は脛部に似ているが、裏側が深く、口縫のひらきが狭い。口縫部は「T」字形で、脇部に近づいて、口縫はつてない。土台は手の手前、指は第4脚腕から同じじだ。

右付新頭形胎子(後図4、6)胎子のはうた側面に乳頭状に「胎子よりうなぎ穿孔」である。胎子は常に外してゐるが、おそらく実質上は胎子でなく乳頭である。乳頭は乳子の乳頭である。乳頭は乳子の乳頭である。
左付新頭形胎子(前図4、6)胎子のはうた側面に乳頭状に「乳頭」である。乳頭は乳子の乳頭である。乳頭は乳子の乳頭である。

外側は「腰筋筋」、さらに上部は「腰筋」、下部は腰筋の横筋の筋膜をなすとしている。筋肉は筋膜をもつが、筋膜の筋肉は筋膜である。解剖学上腰筋筋群は「14」「15」「17」「18」筋群が筋膜性筋群ではなくからとされる。腰筋筋群の「19筋群」中腰筋群は「腰筋筋群」でなく、下方は腰筋群に属するが、筋膜は腰筋筋群に属するが別に「腰筋筋群」は外反してくる。筋の外側には「腰筋筋群」をめぐらしく、「内側には腰筋筋群の筋膜がある」と記載がある。

¹⁴, 17 は日語版「御前御子」には、「相々に敬意を深く、「二ノ子院に外見し、外見は2歳にならじ、3歳の頃に抱かんらじ」。脚は中央行第6行から脚注として記載される。

菱形土嚙(柳田六八、18、19、21と26、29)、直口に近い平造菱形土嚙(24)と、鏡形の調節部に充実した勝目を付けた菱形土嚙の二形式があるが、前者は土手例は外にならぬ、後者は「一般的的」である。24は近い「丁子」形の口縁部の調節部に丁子に1条の凸筋を設け、底部は比較的小さい。

弱化付のりうち2322は、口喉部が「『手で内臓へややさしり出し、凸部はなく、外側に輪郭みの跡をのこしてい

18、19、21、22、25、26は口極部が「丁字形をなし」の頃にばかり出したもの。²⁴⁰

口唇部内面に脂肪の脂肪を吹きるものが多い。口唇下に1歳ないし3歳の脂肪を吹きはじめる。脂上は、歩く難易度を高く、頭はかたく、眉毛は上手である。

26頁の「当時の土蔵は」26頁の土蔵をひいて脚注は「後醍醐天皇が死んでから、足利尊氏が土蔵を改修した」と書かれています。この裏は近頃御土蔵を改修するところが多いです。

A端点出土の黒漆土器には「彦の口縁に刻目を入れたもの」、口縁内側に鏡を有するものなど收藏した資料でも、やゝ口縁部の変化等が見られる。大半は一時間に満ちるものと云ふよう。此出土器群では黒漆土器及び漆器が、とにかく口縁部を凸形に頭ふくらみ手共に頭以上がふくらむ。

齊天大聖の「一様式」と云ふも

第二石

1. 石 墓

2. 用

3. 岩层

A 地点に出土したもので、その出土次第は明瞭でないが、若て次第よりの開き取りによれば伊勢原発地点よりの出土で、上層部よりの出土である。青銅村は極めてあって現存しているものは、図版一の A、B の二箇所のみである。

Aは高さ26.5mm、幅14.3mm、厚さ7.2~8.0mmである。前面をはり出し、目と口は凹め、鰓に二箇所の刻みを入れて、はらまきを表現している。

耳は頭部30.5度、頸17.2度、頭へ4~8.2度である。顎骨を「らんやで高く」し、目と口と並び「らんやで高く」し、鼻は「らんやで高く」し、両耳に力をあけている。これは恐らく繁殖競争をはじめるための頭部示すものであろう。頭体は首輪としているが頭輪は「らんやで高く」し、下方に次第に頭くなっている。

右の地に同地より出土した、磨石状の岩塊が大眼古小学校にて発掘されてゐる。この物は、古物にして、い

42 石 师

A 地点出土の研ぎ石を用ひたとするものである。図版一、C がそれで最も39.5mm、至22.0mm、厚約9.6~11.5mmである。表面は鋸歯をなし、縦文脈間に山字形の石溝に類似している。

¹² 山崎五十鈴「大阪西福山村石番時代道路より発見したる石碑について」考古学雑誌一〇一六、大正九年。

¹³ 三島松肥後鹿児島県貝塚発見の岩偶 九州考古学七・八、一九五九。

第四章 山ノ口遺跡の考察

今回の発掘調査は「このあたりに古墳があるが、この遺跡より北側に○米をくむし山古墳」と今後は「この古墳より北側に○米をくむし山古墳」といふことである。今後は「この古墳より北側に○米をくむし山古墳」といふことである。

今回の発掘調査は「このあたりに古墳があるが、この遺跡より北側に○米をくむし山古墳」といふことである。今後は「この古墳より北側に○米をくむし山古墳」といふことである。

B 墓地の整備の既成した古墳は「前が古墳跡である」と記載される。

次に既成の古墳の位置に隣接する古墳を記載していく。

1. 既成の古墳の位置に隣接する古墳を記載していく。

既成の古墳の位置に隣接する古墳は「前が古墳跡である」と記載される。

2. 既成の古墳の位置に隣接する古墳は「前が古墳跡である」と記載される。

3. 既成の古墳の位置に隣接する古墳は「前が古墳跡である」と記載される。

4. 既成の古墳の位置に隣接する古墳は「前が古墳跡である」と記載される。

既成の古墳の位置に隣接する古墳は「前が古墳跡である」と記載される。

5. 既成の古墳の位置に隣接する古墳は「前が古墳跡である」と記載される。

既成の古墳の位置に隣接する古墳は「前が古墳跡である」と記載される。

6. 既成の古墳の位置に隣接する古墳は「前が古墳跡である」と記載される。

以上のような既成の古墳があるが、「これらを記載している」という既成は既存調査などの調査が行われた跡地や、既存の調査が既存調査の実行の結果が行われた跡地や、既存の調査が既存調査の実行が行われた跡地にはならないと記載される。

A 遺物からみる考古学的調査の結果、中国の土器を以て、其表面を磨きの無地を出土し、中國の土器は今回発見のものとみられる。

既成の古墳の位置に隣接する古墳は「前が古墳跡である」と記載される。

遺物の観察

遺物名	種類	形	出土地點と部位	出土状況	種類
漆器 漆耳杯	漆耳杯	口縁部は深く斜め外反して「手の回転」を示す。柄を長い漆器から直角に移行して周辺の環びた木筒である。表面は漆で仕上げられており、所々剥離が見られる。漆器をやめている。	昭和三十三年五月 山ノ口の漆器塗装部 より出土。	漆器より出土。	漆耳杯
漆器 漆耳杯	漆耳杯	口縁部を丸く、耳部が張り、漆器は手縫いである。漆器手をもじり命名する。	昭和三十四年一月 国会官「山ノ口漆器の シラス漆器より出土。」	漆器は「山ノ口」の文を有して居り、漆器塗装の漆田式も出土している。	
漆文 漆耳杯	漆耳杯	小形耳杯である。口縁部は大きく外反し、漆器の張りがつよい。表面は漆で仕上げた跡があり、漆器をやめている。	昭和三十三年五月 山ノ口漆器塗装部 より出土。	漆器より出土。 下腹部に大きな孔を正面にして、漆器に漆をぬいた状態で出土したものと記載される。	漆耳杯

國坂八、13	國坂二、30	國坂一、13	國坂二、30	國坂五、6
柳川五、8	柳川五、4	柳川五、4	柳川五、6	柳川五、6
口唇部は内側へ少し出ぼつでいる。 裏面黒みがきく黒ずむ。	口唇部は内側へ少し出ぼつでいる。 裏面黒みがきく黒ずむ。	口唇部は内側へ少し出ぼつでいる。 裏面黒みがきく黒ずむ。	口唇部は内側へ少し出ぼつでいる。 裏面黒みがきく黒ずむ。	口唇部は内側へ少し出ぼつでいる。 裏面黒みがきく黒ずむ。
柳川五、9	柳川五、8	柳川五、8	柳川五、9	柳川五、9

柳川五、10	柳川八、9	柳川八、10	柳川八、9	柳川五、5
頭部を上にして左側の顎を觸がある。右側は頭部と正面がぶら下げる。骨盤を含む。	頭部を上にして左側の顎を觸がある。右側は頭部と正面がぶら下げる。骨盤を含む。	頭部を上にして左側の顎を觸がある。右側は頭部と正面がぶら下げる。骨盤を含む。	頭部を上にして左側の顎を觸がある。右側は頭部と正面がぶら下げる。骨盤を含む。	頭部を上にして左側の顎を觸がある。右側は頭部と正面がぶら下げる。骨盤を含む。
柳川五、12	柳川五、7	柳川五、12	柳川五、7	柳川五、5
頭部を上にして左側の顎を觸がある。右側は頭部と正面がぶら下げる。骨盤を含む。	頭部を上にして左側の顎を觸がある。右側は頭部と正面がぶら下げる。骨盤を含む。	頭部を上にして左側の顎を觸がある。右側は頭部と正面がぶら下げる。骨盤を含む。	頭部を上にして左側の顎を觸がある。右側は頭部と正面がぶら下げる。骨盤を含む。	頭部を上にして左側の顎を觸がある。右側は頭部と正面がぶら下げる。骨盤を含む。

西坂 7	西坂 27	西坂 8	西坂 7	西坂 1	西坂 7-3
神田 5	神田 28	神田 11	神田 6	15	神田 6-16
新井の大町土器 口縁部がなく内部に段がある。腹部 は腹ふくらみ。器底はやや平で平行底。腹 部は火等で深く焼かれ、月桂の葉 は底面の資料で焼かれている。口縁 上面は黑色漆料を用いて起毛状文を 施す。内壁は黒く焼かれている。	新井の大町土器 口縁部が少し外反している。底部 は火炎して不明。保素付器 平底。新井土器	新井の大町土器 口縁部が張り、口縁部一帯のはり出しが 運び付けられたものである。腹足面 にも腰輪のつづきと口が近側にみられる る。焼け度である。鉢形を含む。 山口の新井土器 腹部に一条の凸筋 を有す。条件を含む。	新井の大町土器 口縁部が少し外反している。底部 は火炎して不明。保素付器 平底。新井土器	新井の大町土器 口縁部より出土。孔を土器にして由 砂燒取地より出土 ^a 。	新井の大町土器 口縁部より出土 ^a 。孔を土器にして由 砂燒取地より出土 ^a 。
西坂 18	西坂 16	西坂 15	西坂 21	西坂 7-6	
神田 6	神田 19	神田 24	神田 6	23	
やく頭の夷の刺繡の細い平底土器 背部を含む。	やく頭の夷の刺繡の細い平底土器 背部を含む。	やく頭の夷の刺繡の細い平底土器 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 腹部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 腹部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 腹部を含む。
西坂 25	西坂 6	西坂 19	西坂 6	23	
新井の大町土器 口縁部は内側く少しほり出している。 内外面に筋を以が部分的に焼されて いる。	新井の大町土器 口縁部は内側く少しほり出している。 内外面に筋を以が部分的に焼されて いる。	新井の大町土器 口縁部は内側く少しほり出している。 内外面に筋を以が部分的に焼されて いる。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 腹部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 腹部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 腹部を含む。
No 5	新井の大町土器 No 5	新井の大町土器 No 5	新井の大町土器 No 5	新井の大町土器 No 5	新井の大町土器 No 5
新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。

西坂 9	西坂 8	西坂 15	西坂 21	西坂 7-6	
神田 6	神田 19	神田 24	神田 6	23	
新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。
新井の大町土器 口縁部は内側く少しほり出している。 内外面に筋を以が部分的に焼されて いる。	新井の大町土器 口縁部は内側く少しほり出している。 内外面に筋を以が部分的に焼されて いる。	新井の大町土器 口縁部は内側く少しほり出している。 内外面に筋を以が部分的に焼されて いる。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 腹部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 腹部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 腹部を含む。
No 5	新井の大町土器 No 5	新井の大町土器 No 5	新井の大町土器 No 5	新井の大町土器 No 5	新井の大町土器 No 5
新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。	新井の大町土器 口縁部はT字型。一部に削毛有る。 背部を含む。

図版 28 番号 A	圓板 26 形手付裏面十三點 (ウミコトモ) 脇頭部くへ だな上でつくられている。外面は丹染 し、底に「文四國守をもつて研磨され た様を表す。通15以下は新澤した 模様研磨を行つてある。舞音を有む。	昭和三十三年五月、山ノ 口砂鉱採取場より出土。	不 明	見を有す。 「てがより」 の類題に小川を あく)
図版 29 番号 B	圓板 20 鉢形土器 底部は承く器台付土器に近い。脚も 目を内外に張る。	昭和三十三年五月、山ノ 口砂鉱採取場より出土。	不 明	

土 器 以 外 の 遺 物

図版二 A 番号版	形 態	山 土 地 点 と 解 釋 位	出 土 伏 観	備 考
図版二 B 番号版	形石斧、刃幅 底さ二七cm、頭一四cm、厚さ六cm 頭部は三枚の板を組み、頭部を拘束し た状を有する。顔面を想み出し、 照りくぼめの目と口をあらわす。頭部 はえぐつて体部との境が距離である。 体部は頭に突起をつくり、重力をあら わし、地は削ぎられ、下底部は直に頭、 腰を頭部の穴を有している。	昭和三十三年五月 山ノ口砂鉱採取場より 出土。	現在免頭地北側の砂鉱採取場中、約二 丈の大きさで出土。	鹿児島県東部 山町福山中学校校庭 より文部省課題と 思われる複数から いものが出土した ことがある。
	形石鏟形斧 底さ三七cm、頭一八cm、厚さ一〇cm 頭部は背面に横孔をあけ、頭部は区 離し、目と口にははりくぼめ、鼻は後起 している。頭部はえぐられて体部との 境をなじ、地部は削ぎされている。	昭和三十三年五月 山ノ口砂鉱採取場より 出土。	現在免頭地北側の砂鉱採取場より 出土。	

(標図記) 1-5) 開闢 三 B	(標図記) 6-9) 開闢 三 C	No.8	No.1
<p>上段 空隙 細粒水洗土 厚さ 二 段</p> <p>極々二・次め 壁を二・三面 薄小瓦を四・五枚 壁に、五枚 壁を二・壁頭 窓頭の次付たもは空隙 に隙縫の跡がある。</p>	<p>最大長さ六・一セメ 壁三・二セメ 壁を 三面、最小長さ三・一セメ 壁一・三セメ、 厚さ二・五面石より二層目は砂質 のためかず崩れをもつてゐる。 △2 △1.5 △0.5 cm)</p>	<p>新潟トランシット4区帯地 層</p>	<p>柱頭下部の下敷きは土頭を盛りた て出しに出土した。(柱頭で下敷きいた 歩き石より三層目には施出土。掘いて は柱頭を中心にして最も大1mの範囲に は施出土した。)</p> <p>柱頭下部 4区帯地</p>

説明三 A	説明二 C	(説明A,B,C) 説明二 B
打製石斧 新石器 頭骨	新石器 打製石斧 頭骨	右肩に長さ六寸 孔は頭部よりあけである。 片端のあとあり。
打製石斧 新石器 頭骨	新石器 打製石斧 頭骨	左肩に長さ四・七寸 孔は頭部よりあけである。 片端のあとあり。

B 地 点 出 土 器 物 一 覧 表

器種 番号	出土場所	形態	方位	口 徑	底 径	高 度	耳 の位置大きさ	出土状況	白 部	黒 部	素 面	特 徴
9 12	A6.1B	壺	S E 50°	24.3	26.7	cm 37.3	3.1×2.5 cm cm	75 cm 1.5	横 幅	7.8 cm	4cm 頭部に少しあり	○ 面正直角、黒釉が少し残る、上面が崩損をし、口の内側に凹起
10 6	A6.2B	壺	W S 42°	7.6	10.9	11.6	—	75 1.5	横 幅	3cm	なし	○ 深出筋を厚く腹側前面にくる。底部を欠く
11 4	A6.3B	壺	W S 40°	16.6	22.0	6.6	29.2	F5 4.3×4	斜 面	7.8 cm	斜面に少しあり	○ 黒面直角、口幅が狭く露出しているもの、その部分黒、差 の量で内側に浮す
14 7	A6.3B	壺	W S 40°	7.5	20.6	5.6	29.1	75 2.2	斜 面	6cm	なし	○ 黄斑、瓶部内側に細網、底部丸出唇、斜出筋が強め、手筋痕
12 6	A6.3A	壺	E S 50°	19.0	27.6	7.0	34.9	N5 2.5×2.8	斜 面	7.8 cm	なし	○ 口幅内側にまるで張り出る、表面少しおいて、底部丸出、西 面らしく、底邊よ
10 5	A6.3B	壺	S E 50°	27.9	22.2	6.1	39.5	横5 1.5×1.5	横長	7.8 cm	4cm 頭部に少しあり	○ 平な紅褐色表面、粗解、半面輪郭、色くすむ、腹側小手口に 施釉あり
11 9	A6.3C	壺	N W 32°	22.9	29.0	7.4	30.5	1.5×14	横長	7.8 cm	4cm 頭部に少しありはけり	○ 面正上を一回欠き、紅色、器物の無い、腹側小手口に 施釉あり
15 24	A6.3A	壺	W S 37°	34.0	—	7.2	32.4	横5 1.5×1.5	横長	7.8 cm	なし	○ 平面に施釉、燒成良好、口縁内側に張り出ず
22 22	A6.2A	壺	W 23°	22.4	22.6	7.4	25.0	横5 1.5×1.5	横 幅	3cm	なし、内曲一部	○ 斜面は割れ込み、上面焼成の為か剥落する、出来付け
21 23	A6.3A	壺	N W 32°	22.8	—	7.6	30.5	横5 1.5×1.5	横 幅	7.8 cm	なし	○ 有孔隙釉付、内曲部にこげつき
19 26	A6.3A	壺	N W 32°	24.3	23.7	7.5	26.3	横5 1.5×1.5	横 幅	2cm	なし	○ 斜面欠け、口上面 施釉あり
18 25	A6.3A	壺	W S 10°	22.4	21.2	6.6	26.4	横5 1.5×1.5	横 幅	1.5cm	なし	○ 口縁外つなぎあり、半面紅葉、半面黒葉
17 18	A6.3A	壺	W S 42°	22.1	24.4	6.2	29.6	横5 1.5×1.5	横 幅	3cm	なし	○ 斜面を焼成、半面赤目、口縁外つなぎあり、土灰状上部剥離現 象
20 21	A6.3B	壺	W S 22°	21.4	19.7	7.5	24.4	横5 1.5×1.5	横 幅	3cm	なし	○ 口縫性質のあり、焼出土壤に附れた擦がより大當り出し、 三分気窓
16 19	A6.3A	壺	W S 30°	30.8	29.1	9.3	30.8	横5 1.5×1.5	前 位	3cm	なし	○ 斜面欠け、面口端大、内曲こげつき

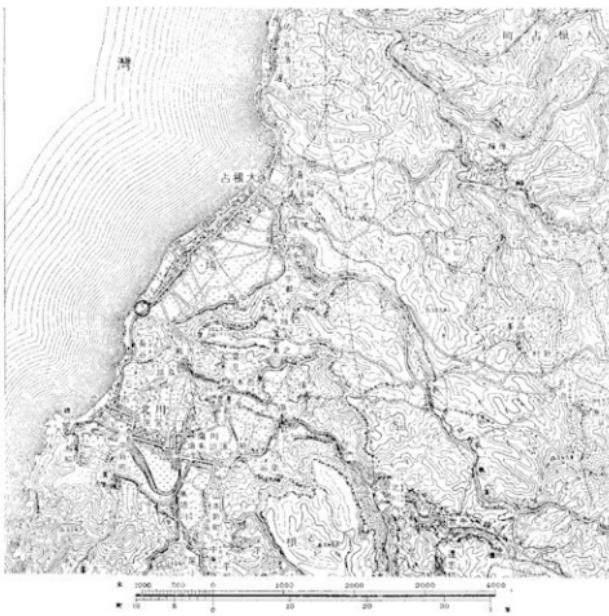
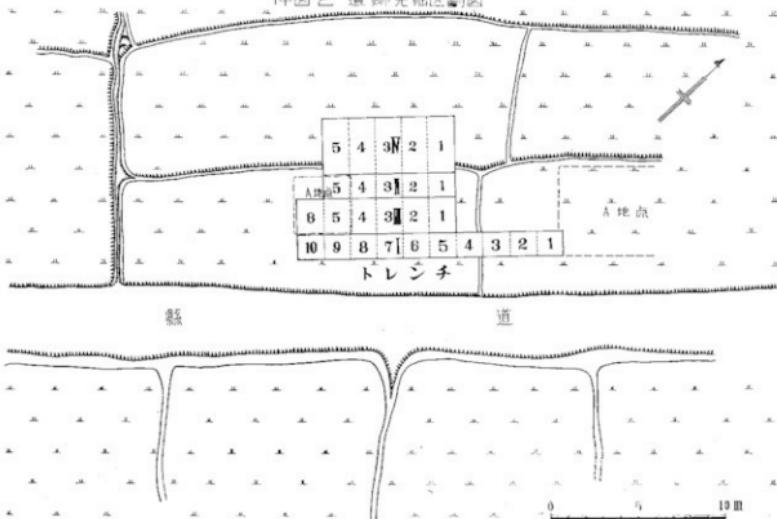
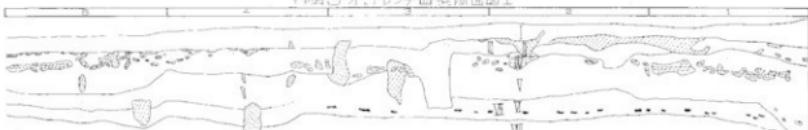


插图1. 高瀬附近地形图

抑図2 遺跡発掘区割図



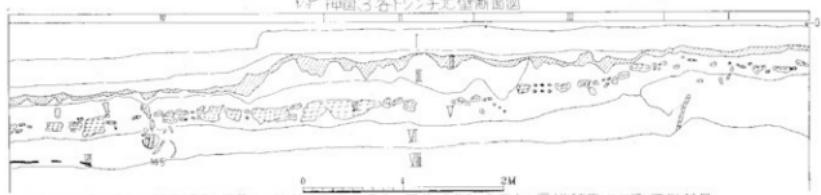
抑図3 オトレンチ西壁断面図1



抑図3 オトレンチ西壁断面図2



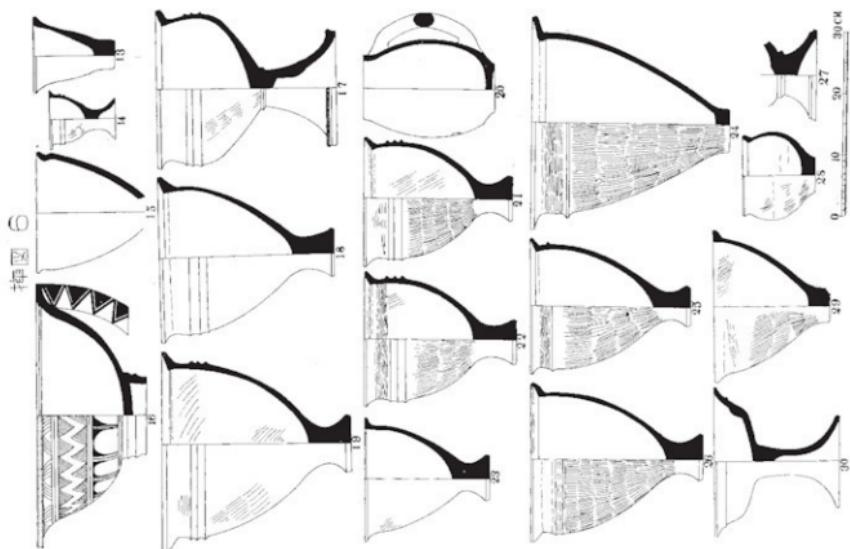
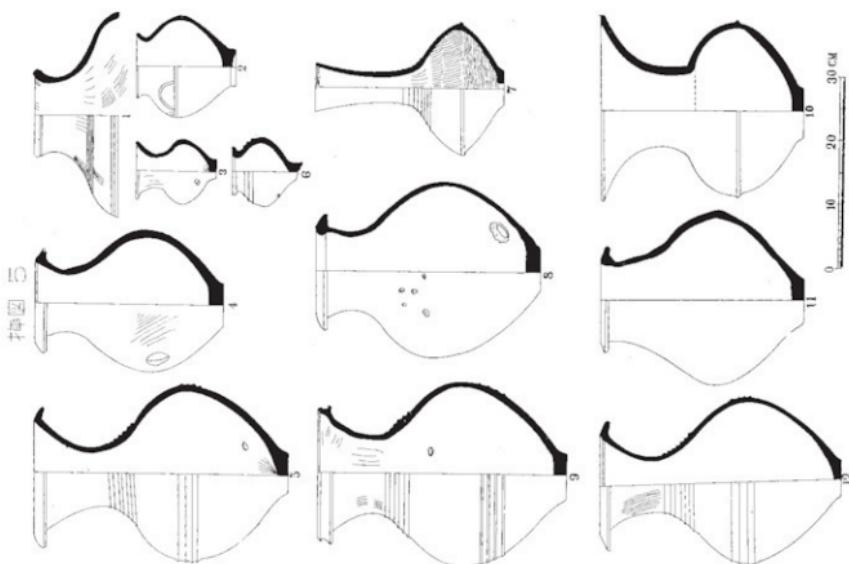
抑図3 各トレンチ北壁断面図



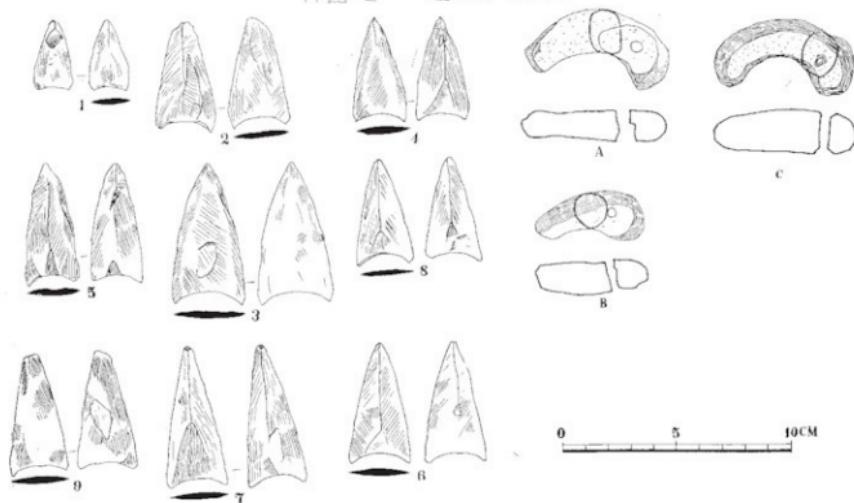
【表層】酸化鉄富化層 Ⅱ褐色土層 Ⅰ火山灰堆積層 Ⅲ褐色土層 Ⅳ褐色砂岩層 Ⅴ火山灰堆積層(コラ層) Ⅵ砂質層

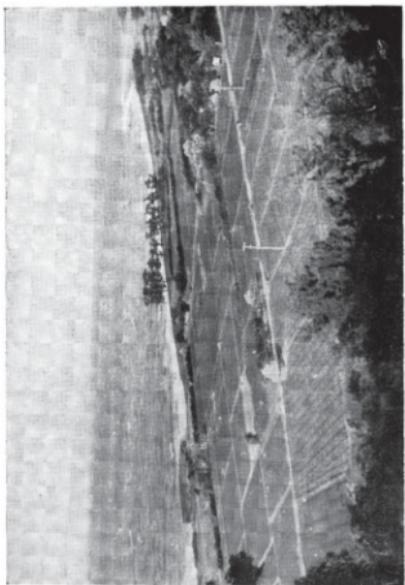
1 cm





插圖七 石簇・曲玉

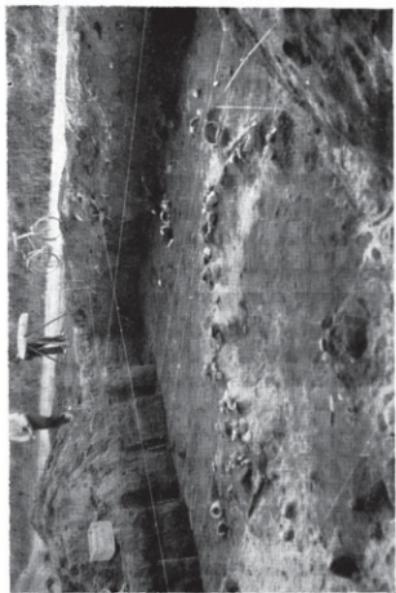




a、清辭金語



b、矢頭狀況



a、勢頭金語（西側より）



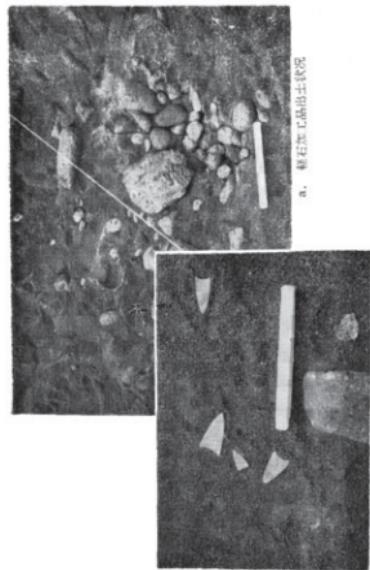
b、勢頭金語（東側より）



a. 銅器全般 (北側より)



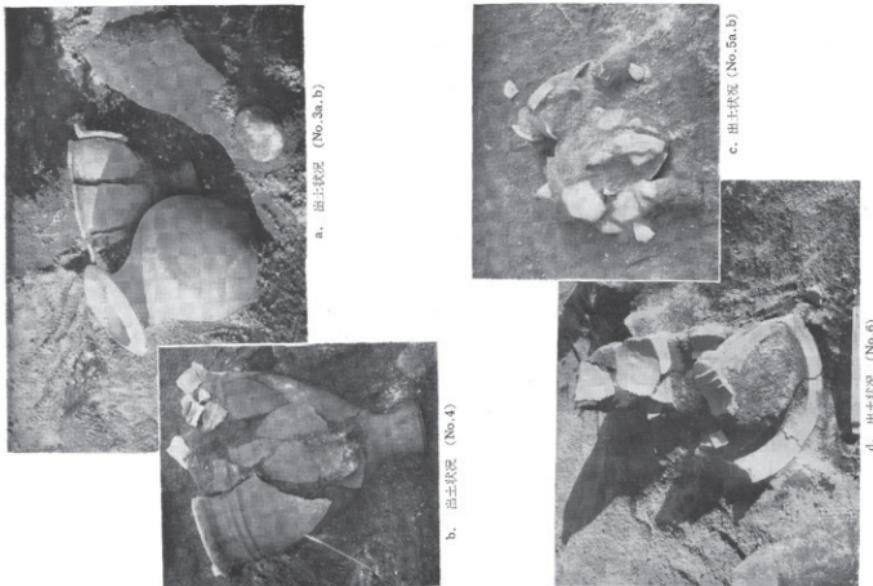
c. 出土状況(No. 1a, b)



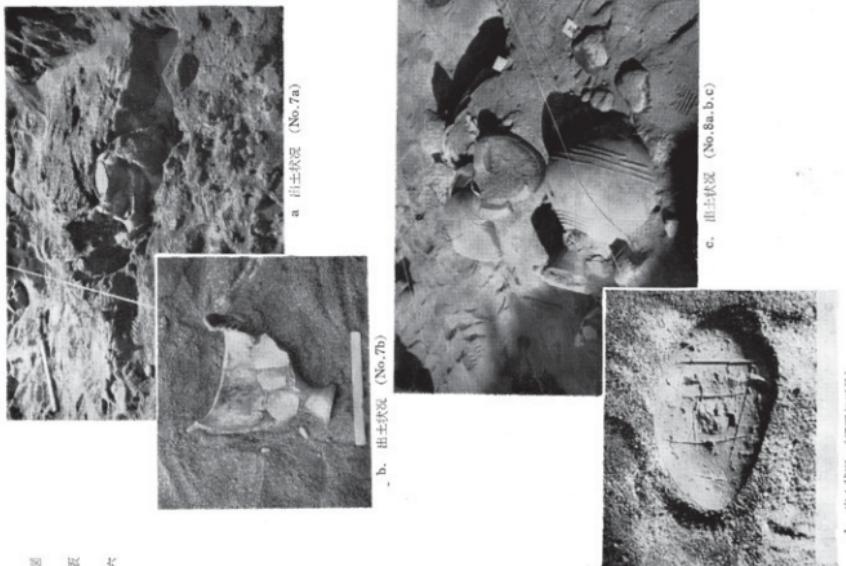
b. 石器出土状況 (No. 2a, b)



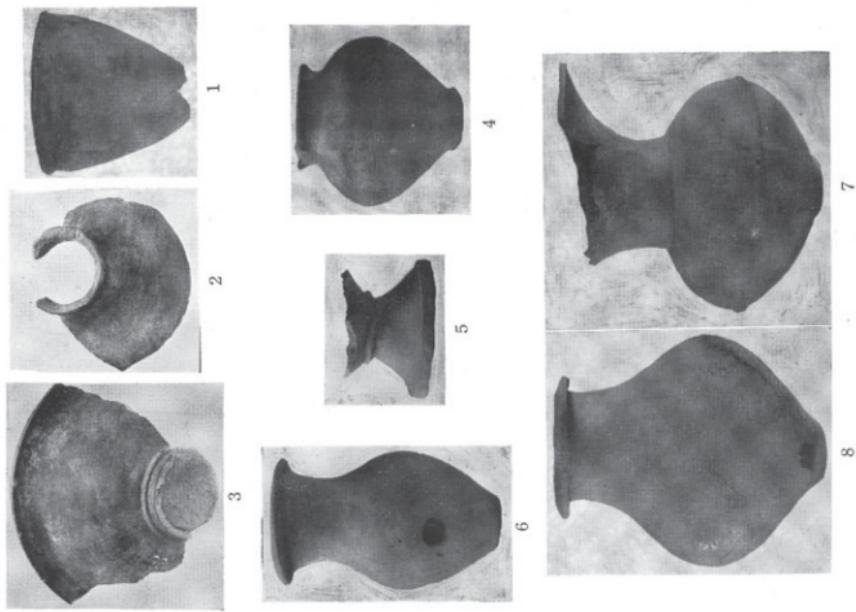
d. 土器状況 (No. 2a, b)



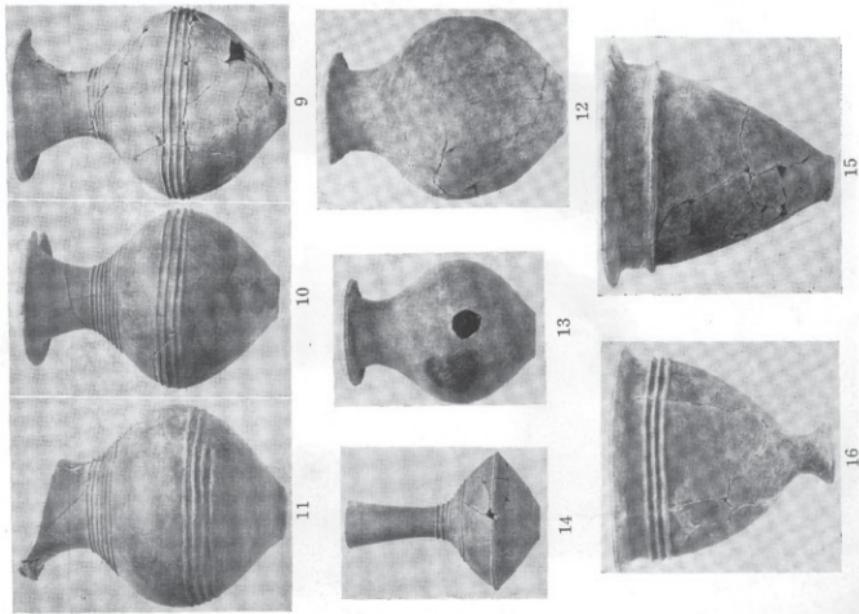
圖版五



圖版六



圖版七 土器



圖版八 土器